

○いみじくもよくも。

○水の江の浦島が子  
日本書紀、萬葉集  
などに出て居る。

○朝家奉公 朝廷へ  
忠義を盡す事。

○あよむ事 歩む事

來を詳しく承れば、末代我が朝の寶何か是に勝らむ、これ猶以つて有り難し、さりながら斯程の重き釣鐘を、争でか賜はり歸るべしや是ぞ難儀なり。」と申されければ、其の時龍王微笑みて、「いみじくも申されたる物かな、弓矢を取つて強き者を滅ぼす手段こそ、方々に及ばずとも、斯様の物を持扱ふ事は、我が眷屬の自由なり心にかけて給ふ事勿れ。」とて、乃ち異類異形の鱗輩に仰せて水中に引かされけり。既に時刻も移りければ、藤太心に思はれけるは、昔丹後の國與謝の郡水の江の浦島が子とやらむも、少女に遇ひて、偶然に此の常世の國に到りしに、かかる快樂に耽りつ、往にしへ行く末を忘れて年を経る事三年なり、或る時故郷の戀しさに少女に暇を乞ひ、水江に歸りて見てあれば、住みし故郷も變り果て見知れる人も無き程に、斯く有るべしやはと訝しく、能く問へば、それ昔三百餘年の事なりといふ人あるに驚きて、遂に空しくなると聞く、かかる例も有るぞかし。我は殊更朝家奉公の身なり、殊更故郷に年老いたる父母のましまして、時の間も見まほしく。」と、早々御暇を申されければ、龍神は猶も名残惜しけにて、様々の興を盡して慰め給ふ。去る程に龍女は依藤太秀郷を様々に饗應し慰め給ひける程に、漸々時刻も移りければ、藤太は大王に暇を乞ひ龍宮を出でられける。海中をあよむ事利那の程と覺ゆれば、勢多の

○梵ぜん 梵刹か。寺院。  
○御内証 その内面  
○一體方便 同體方便とも云ふ、方便即眞實、眞實即方便  
○新羅大明神 三井寺圓満院の北に在る祭神は素戔嗚尊。  
○三會の曉 彌勒菩薩が現世で成佛の曉龍華樹下で三度の法會を開き、一切衆生を度するを云ふ。  
○慈尊 彌勒の尊稱現世にあつて釋迦のあごをつぐ可き佛と信じられて居る。  
○北嶺 比叡山、延曆寺。  
○梟鐘 梟氏は支那の鑄造の名人、それでよい品には梟と云ふ美稱をつける。  
○千常 秀郷の子。  
○長吏 三井寺の長たる僧。

橋にぞ著かれける。それより父の許に行き村雄朝臣に對面して、此の程の有様始めより委しく語り給へば、父母不思議の思ひをなし、斜ならず悦び給ふ。「それに就き龍王の引出物に金作りの劔、金札の鎧、赤銅の釣鐘を賜はりたり。劔、鎧は武士の重寶なれば、末代子孫に相傳すべし、鐘は梵ぜんの物なれば俗の身に從へ詮もなし、三寶へ供養すべし、されば南都へや奉らむ比叡山へや奉らむ。」と申されければ、父の朝臣此の由を聞きて、「實にも誠に一々の稀代重寶なり、中にも彼の突鐘を精舎に寄進し奉り、當來の値遇を祈らむこそ有り難けれ、諸佛菩薩の御内証何れも一體方便と言ひながら、殊更三井寺の本尊へ奉り給へ、それを如何にといふに、一つは當國なり、又彼の寺の鎮守新羅大明神と申すは、弓矢神にて坐せば、子孫の武藝を祈るべし。又彼の寺の御本尊は彌勒菩薩にて坐す。此の度の功德によりて、五十六億七千萬歳三會の曉、慈尊の出世の御時、見佛聞法の結縁となるべし、其の上南都も北嶺も突鐘既に成就せり、彼の三井寺と申すに今に梟鐘の響きもなし、速かに思ひ立ち給へ。」と有りしかば、藤太委細に承り、さらば三井寺へ参らすべしとて園城寺へ遣はさる。千常三井寺へ参り、時の長吏大僧正に謁して件の趣申しける。僧正大いに悦び給ひて、寺中の衆徒達を會合し齋議まぢくなり。僧正仰せけるやうは

○五障の雲を齎らし給ふ 五障とは女人の身に具備する五種の障、一者不得作梵天王、二者帝三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛身。此の五障を除くの意。  
○しめぐわん 主願か。

「當寺は伽藍草創の後大檀那繁昌して、佛法最中の道場なれば、鳧鐘の響は心に任せて、龍宮より取りて歸りし鐘なれば、天下無雙の重寶、末代の名譽なり、菟角の沙汰に及ばず報謝を受け給ふべし。」とありしかば、満座の大衆一同に皆尤もと領承し、「吉日を選んで彼の釣鐘を寄進し給へ、即ち供養をなすべし。」とて千常をば返されける。藤太此の由承り、唐崎の濱へ行き見れば、夜の間に龍宮より上げ給ふと思しくて、件の釣鐘坐す。是より三井寺へ引きつけむには、數多の人夫を持ちたまはずば、容易く引きつくまじと案じける處に、明日供養と相定めし今宵、海より小さき蛇來りて、彼の釣鐘の龍頭を銜へ、大講堂の大庭までいと易く引きつけて、搔消すやうに失せにけり。僧正大衆達も奇異の思ひをなし給へり。去る程に園城寺には龍宮より釣鐘上りつく、今日供養し給ふ由兼ねて諸國に聞えしかば、近國は申すに及ばず、遠國の道俗男女、我劣らじと參詣す。都よりは殊に程近ければ、貴賤老若羣集してけり。時の關白、大臣、公卿、女院、御息所、女御、更衣に至るまで、三會の曉慈尊出世の結縁の爲と思しければ、道場に車を軋らし、佛前に踵をつきて、五障の雲を齎らし給ふ。既に時刻にもなりしかば、乃ち供養の儀式嚴重也。當寺導師は當寺の長吏大僧正、しめぐわんは天台座主とぞ聞えし。其の外諸寺の明德碩學數千人會

○三界の苦輪 欲界色界、無色界此の三界に於ける苦しきは衆生が生死輪廻すべき境界であるから苦輪と稱する。

○諸行無常、是生滅法云々 涅槃經に出て居る帝釋の唱へた呪。

○濫觴 起原。  
○こぶらへは 尋ねれば。

座に連なり給ふ。導師高座に上り、發願の鐘打鳴らし、「秀郷の朝臣この善根に應へて、今生にては無比の樂しみを極め、來世にては上品蓮臺に生れ、乃至七世の父母速かに三界の苦輪を出でて、天上の快樂を極め、法界衆生平等利益出離生死頓生菩提。」と、回向の聽聞有り難く、皆感涙をぞ流しける。

聽聞の道俗押並べて隨喜の涙を流しけり。有り難や此の鐘と申すは、祇園精舎の無常院に響くなり、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂の四句の音を寫されたれば、これを聞く人おしなべて、無明長夜の夢を醒し、發心菩提の岸に到る。誠に末代不思議の奇特なり。抑當寺草創の濫觴をとぶらへば、昔人皇二十九代天智天皇の御時、此の湖に近き大津に都を移したまふ。爰に帝御夢の告げましますにより、皇子大友の太子に詔して、樂浪や志賀の花園に靈地を占め、一の伽藍を建立し、丈六の彌勒薩埵を安置せらる、其の名を壽福寺と號す。其の後皇子大友事に遇うて崩れ給ひしかば、その御子與多王帝へ奏し申しつ、彼の寺を移して、父の家跡に造りつ、園城寺と改め給ふ。此の寺の傍に清潔なる岩井の水あり、此の水を持つて、天智、天武、持統三代の帝の御産湯に用ゐる故に御井寺とは申すなり。斯くて星霜を経る事漸く二百年に垂んたり。時に智證大師と申し

○竹馬の比より 單に竹馬を弄んだ幼年時代から。  
 ○各腫二つぞおはします 重腫の意。支那の異相に用ゐた語  
 ○三密瑜伽 行者の身口意の三密が、如来の三密と背離しないで即身成佛をなす意。  
 ○一乘圓頓 賢愚を問はず皆一樣に佛果を得可き圓融無碍自在の教法を云ふ。  
 ○一朝の綱領 一代の僧侶の統率者。  
 ○四海の倚頼 國內のたよる者。  
 ○四至のけんけい 四至は四方の極を云ふ。けんけいは嚴契か。未詳。

て有徳碩學の名僧まします、此の人は弘法大師の御甥讚州那賀郡の住人宅成の嫡男也。竹馬の比よりも其の相世人に勝れ、兩の御眼に各腫二つぞおはします。御年十四にて都に入り給ふ。十五歳にて叡山に登り、天台座主義眞和尚の門弟として髪を剃り、三密瑜伽の道場の中に、一乘圓頓の教法を極め給ふ。其の後仁壽三年の秋の比、求法の爲に入唐し給ふ所に、惡風俄に吹き來つて、海上の御船忽ちに覆らむとせし時、大師 舩に立出でて十方を一禮し誓請を爲し給へば、佛法護持の不動明王金色の身相を現じ船の舩に立ち給ふ。又新羅大明神目前船の舩に化現して、自ら舵を取り給ふ。是によつて御船恙なく明州の津につきにけり。御在唐六年の其の間、國清寺の物外、開元寺の良諤、青龍寺大徳、興善寺の智慧輪、斯かる明徳高僧に顯密の奧義を學び、玄旨を極めたまひつゝ、天安二年にいたつて御歸朝ましくけり。斯くて御法流盛んにして、一朝の綱領四海の倚頼として寶祚の護持を爲し給ふ程に、帝より詔して園城寺を賜はりけり。大師園城寺に入らせ給ふ時、一人の老僧立出でて名告りて曰く、「我はこれ教待和尚と言ふ者なり、此の寺に住して大師を待つ事二百餘歳。」と言ひ終つて、四至のけんけいを授けて、虚空をさして飛び去りぬ。大師は奇異の思ひをなし、此の寺に住持して眞言祕密の教法を行ひたまふ。大講堂は八間四

○一切經 大藏經と同じ。佛敎に關する經典の總稱。  
 ○今熊野御社 熊野三山の神靈を請じた神社。  
 ○三部灌頂 三種灌頂。慶頂灌頂、授記灌頂、放光灌頂を稱する。灌頂は水を頂にそいで祝意を表する事。  
 ○回祿 火災。  
 ○戒壇 戒を授くる式場、梵語で曼陀羅と稱する。  
 ○山門の大衆 延曆寺の衆徒。

面、三重一基の寶塔、七間四面の阿彌陀堂、四足一字の寶殿には山王權現勸請す。唐本の一切經七千餘卷をば、廣院にこめ給ふ。其の外今熊野御社護法善神の御拜殿、普賢堂、青龍院、尊星王塔、大法院、四面の廻廊、十二間の五輪院、總て堂舎の數は六百三十餘、佛の數は二千體、清淨堅固の靈地なれば、大師此の寺の井花の水を汲んで、三部灌頂の闕伽として、慈尊三會の曉を待ちたまふ故に、三井寺とは申すとかや。斯程めでたき道場、如何なる事の仔細によつて回祿に及ぶぞといへば、彼の大師御入滅ましくつて後、御門徒の大衆、戒壇興隆の事を申し行ひしによつて、山門の大衆嗷訴をなし、柔和忍辱の衣を著し、志賀唐崎に驅け合せて、或は討たれ、組んで落ち、道場に血をあへし修羅の巷と爲す事は、法滅の基と淺ましかりし事どもなり。

下

叔も依藤太秀郷は、下野の國に住して、國中を治めしかば、其の勢近國に振ひけり。斯かりける所に下總の國相馬の郡に將門といふ人あり。此の人は桓武天皇の御裔葛原の親王には四代の孫、鎮守府の將軍良將が子なり。承平五年二月伯父常陸の大椽國香を討つて

○御厨の三郎將頼云  
 將門記には次の如く出て居る。將頼を下野守、經明を上野守、興世王を上總介、文屋好立を安房守、將文を相摸守、將武を伊豆守、將門を下總守に敘す云々

○御れう 御領か。御察か、兎に角尊稱  
 ○大童 髪を結はず垂らして居る風を云ふ、兒童に似て居るからた。  
 ○はかしくしからず あまり氣が進まない。  
 ○輕忽至極 輕卒千萬。

勢漸く八州を呑み、相馬の郡磯橋を限りて王城を構へ、我が身自らは新皇と號し、百臣を召使ふ。舍弟御厨の三郎將頼をば下野守、同次郎大葦原の將平をば上野介、同五郎將爲をば伊豆守、多治見の經明をば常陸介、藤原の春道をば上總守、藤原の興世をば安房守、文屋のよしかねをば相摸守に赴任せしむ。斯くて大軍を催して帝都へ打ち上り、日本國の主となるべしとて、其の催し有りけるを、藤太秀郷熟々と聞きて、「實にも誠に大剛の勇士なる上、猛勢を靡け從へり、此の人に同心し、日本國を半分づ、管領せばや。」と思ひて、相馬の郡に下りけり。彼處にも著きしかば、館へ人を差遣はし、「下野の國の住人俵藤太秀郷御れうの御目にかゝり申し度事侍りて、これまで参りて候。」と申しければ、禁門警固の侍某、此の由を將門に申上げけり。折節將門は髪を亂し梳りて居給ひしが、如何思しけむ取敢ず大童にて、而も白衣の儘にて中門に出合ひ、秀郷に對面し給ふ。元來藤太は目賢き人なれば、此の有様を見留めて、はかしくしからずと思ふ所に、將門秀郷を饗さむ爲に、椀飯を搔据ゑて是を羞む。將門の食ひ給ふ御料、袴の上に落ち散りけるを自ら拂ひ拭はれたり。藤太心中に思ふ様、「是は偏に卑しき民の振舞なり、さて餘り輕忽至極なれば、日本の主とならむ事、思ひも奇らぬ事なるべし。」と、初對面に心變りし、申し語らふべき言葉

も出さず、疎み果ててぞ歸りける。それよりも秀郷は夜を日についで都に上り、案内申して奏聞申しける様は、「相馬の小次郎將門が叛逆を企て、東八箇國を横領し、剩へ軍勢を催し王城へ討つて上るべしと結構仕り侍るなり、速かに追討使を下さるべし、若し事緩怠に及ばば、ゆゑしき朝家の御大事と罷り成り候べし、それに就き候ては、秀郷が身不肖に候へども、一方の大將をも宣下せられ候はば、兎も角も謀を廻らし、誅伐仕るべき由。」申しければ、帝大きに驚かせ給ひて、公卿殿上人を召され、「此の事は如何あるべしとの僉議まちくなり。其上將門叛逆の事、東國より重ねて奏聞申しければ、「此の上は猶豫すべからず、秀郷は東國の案内を存じたる者なれば、先づ彼を討手に差下され、其の後大勢の討手を遣はさるべきか。」と有りしかば、此の議尤も然るべしとて、乃ち藤太を禁庭に召され、「今度梟賊追伐の事、然しながら汝が謀を頼み思召すなり、急ぎ罷り下りて、能く手段を廻らし、逆臣を誅伐し、君豊かに民安からしめよ、軍功は功によるべし、如何様諸軍勢を重ねて後より下さるべし、汝は夜を日につぎて急ぎ下るべし。」と宣へば、藤太宣言を承り、「弓矢の面目何事か是に若かむ。」と、勇みをなして退出す。さらば時刻を廻らさず急ぎ下るべしとて、都をばまだ夜をこめて白川や、粟田口をも打過ぎて、日岡峠に差掛れ

○梟賊 惡賊。  
 ○軍功は 褒賞は。  
 ○日岡峠 京都粟田口から山科へ通ずる坂路。山を粟田と云ひ、村を日岡と云ふ

○四の宮河原 山城宇治郡山科村にある仁明帝の第四子人麿親王の館址であるから斯く稱する。  
 ○三惡道に返し給ふな 三惡道に行かじめ給ふな。  
 ○大威徳の法 大威徳明王の御修法を稱する。大威徳明王は五大明王の一、西方に配し、本地を阿彌陀とする。三面六臂大白牛に乗つて居る。  
 ○横川 叡山三塔の一。  
 ○降三世 降三世明王、五大明王の一、四面八臂の忿怒身。  
 ○ごんま 護摩か、一本「ごんま」。  
 ○四天王の法 四天王を本尊とし災厄を攘ひ福徳を招請する修法を云ふ。四天王は帝釋の外將。

ば夜はほのく」と明けにけり。四の宮河原を餘所に見て、關の山路に差掛り、三井寺に参りつゝ、講堂の御前に頭を傾け、「南無彌勒大菩薩、此度もし秀郷が敵の爲に討たるゝとも、頼みを掛けし一念の功力によりて、三惡道に返し給ふな。」と祈念し、それより新羅大明神の御前に参り、歸命頂禮大明神、願はくは藤太が謀に御力を添へられ、難なく敵を打平らけ、君も豊かに民榮え、國土安全長久の御世と爲し給へ、然らば我々が一門永く當社の氏子となつて、社頭に頭を傾け奉るべし。」と、丹心の誠を抽んで暫く祈り給へば、誠に神慮も御納受まし、御風なうして御前の斗帳も搖き、左右に向へる獅子狛犬も動く氣色に見えければ、藤太有り難く尊く覺えて信心再拜す。それよりも藤太は駒に鞭を打つて、東國指して下りける。去る程に内裏には公卿會議まし、今度將門が亂逆について、神佛の擁護を頼まずば、速かに靜謐すべからず。」とて、諸寺諸山の碩徳に仰せて、調伏の法行はせられ給ふべしとて、先づ天台座主法性房の阿闍梨尊意僧正は比叡山に壇を構へ、大威徳の法を行はる。金剛寺の淨藏貴所は横川に壇を構へて、降三世の法を行はる。根本中堂には碩徳ごんまを焚き、美作の明達は、神宮寺に壇を構へて、四天王の法を行はる。これ皆朝家有驗碩徳なれば、行法何れも成就して、朝敵滅亡疑ひあらじと、頼もしく

○せつと 節刀か。  
 ○ぶよう 武勇の詔  
 ○殊更多勢の者 特に部下の多い者。  
 ○南殿 宮城中、紫宸殿の稱。  
 ○おのの殿 誤りか  
 ○中儀 儀式の規模に大中小ある、その中の中儀。  
 ○弓場殿 宮中にある弓射る御殿。又天子賭弓など見らるゝ所。  
 ○巳午 午前十時から午後客時の間。  
 ○路次 道中。

ぞ覺えける。斯くて東國の討手には源平兩家の氏族の中に、文武二道の器量を選んで、大將軍の宣旨を下され、せつとを賜はるべしとて、先づ宇治の民部卿藤原の忠文を召さる。又鎮守府の將軍國香が嫡男上平太貞盛父がぶようをついで、殊更多勢の者なれば、副將軍にぞ召されつる。それ將軍にせつとを賜はり、外土へ赴くには、定まれる儀式の侍れば、主上南殿に出御なる。關白殿はおのの殿に出でさせ給ふ。大臣は九條殿、其の外大納言中納言八座七辨諸司八省、階に陣を張り、中儀の節會を行はれ、せつとを出さる。時に大將軍副將軍威儀を正しくして参内し、禮儀をなして是を賜はり、弓場殿の南の小門より揺めいて出らるゝ、嚴めしかりし有様なり。  
 時は朱雀院の御宇、天慶三年正月十八日巳午の刻の事なるに、今日諸大將朝敵追伐の爲に、東國へ發向せらるゝ由聞えしかば、近き邊は申すにや及ぶ、遠國他國の道俗男女上下聞き及ぶに従つて、袖を連ね踵をついで、我もくと巷に羣集す。都をこの平安城へ移されてより以來、未だ四海の激浪もなければ、武士は弓矢を知らざるが如し、今初めて干戈を動かす珍らしさに、馬、物具、太刀、刀、邊も輝くばかりに出立ちければ、何れもゆゑしき見物なり。路次に少しも障りなければ、多くの難所を馳せ越えて、やうく二月の初

○つくり大將軍 詩  
文にすぐれた武將の  
意。

○大事のせん 大事  
の戦であらう。

○たゞくゞき 迫り  
迫り。

めには駿河の國清見ヶ關に著きにけり。此處にして大將忠文は暫く休らひ、富士の絶景、三保の入海、田子の浦の眺望を見物し給ふ折節、清原のしけふちといへる者、つくり大將軍にて侍りしが、此の浦の有様を感じて、「漁舟の火の影はすさまじうして波を焼く、驛路の鈴の聲夜山を過ぐ。」と作られければ、大將も士卒も感涙をなして、喜びの袖を濡らしたまふ。茲に副將軍平の貞盛は、家の子郎従を近づけ、「汝等は何とか思ふ、かくて大軍と同じく路次に日數を経るならば、大事のせんには遇ふべからず、殊更此の將門は朝敵たる上に、我が身の爲には親の敵なれば、自餘に抽んで、勝負を決せずしては叶はぬ儀なり、彼の藤太は謀賢き者なるが、先陣に向うたり、若し彼一人の高名となしなば、我等弓矢の瑕瑾なるべし、然る時は悔ゆとも益あらじ、いざや此處を馳せ過ぎて、夜を日につぎて藤太が勢に加はらむ。」と宣へば、兵共、「實にも此の儀尤もなり。」と申して、駒を早め打ちにける程に、足柄箱根のさかしき山路を、朧月夜にたどくと駒に任せて急ぎけり。  
去る程に平の貞盛は、官兵二千餘騎を従へ、足柄箱根を夜の中に打越え、天慶九年二月十三日と申すには、武藏野に著きにけり。こゝにして秀郷の勢と合はせて三千餘騎、利根川を打渡して、明くれば二月十四日下總の國磯橋に陣を取る。將門此の由聞くよりも、我

○土も木も我が大君の國なれば云々 古歌に「草も木も我が大君の國なればいづくか鬼のすみかなるべき。」  
○たいよう 對應か  
○かつら 且。  
○からりと打番ひ からは矢と弓と相觸る、音、弦に矢をつける事。  
○胸板 鎧の胸の胸に當る所。  
○馬の三途 馬の急所の一。馬の臀部の百會の後、百會とは背の後の高い部分。

が城へ入らせては叶ふまじとて、舍弟下野守將頼、同じく大葦原の四郎將平に、上總常陸の勢四千餘騎を相添へ、同じ日の午の刻に辛島の郡北山といふ所に出して陣を取らる。貞盛敵の陣に馳せ寄せ、大音揚げて申す様、「只今爰に進み出でたる兵を、如何なる者とか思ふらむ、近くは目にも見よ、遠からむ者は音にも聞け、人王五十代の帝の後胤鎮守府の將軍平の國香が一男上平太貞盛なり、梟賊の亂逆を静めむ爲に、一天の君の宣旨を蒙り、只今爰に向うたり、土も木も我が大君の國なれば、何處か兇徒の住處ならむ、速かに弓を伏せ兇を脱いで、君の御方に參るべし。」と呼ばはりけり。將頼聞いて呵々と打笑ひ、「正しき兄弟を捨てて君に參らば、忠臣とや申すべき、聖代の昔は王位も重くましますらむ、當時將門の威勢に、十善の君と申すとも、争でかたいようし給ふべき、かつらは軍神の御手向に、只一矢受けて見給へ。」といふ儘に、五人張に十五束、劔のやうに磨いたるを取つて、からりと打番ひかなぐり放ちに放ちけり。胸板に弦や塞かれけむ、思ふ矢壺には中らず、貞盛が乗つたる馬の三途に中つてつと貫けにけり。馬は屏風を反す如くに倒れければ、貞盛は副馬に乗つたりけり。將頼一の矢を射損じ、安からず思へば、三尺八寸の打物抜いて貞盛を目に掛けて打つて掛る。官軍には貞盛の兄弟村岡の二郎忠頼、同二郎頼高、余五の

○常陸守つるもち  
支度の訓。

○著長 大将の誓る  
大形の鎧。

○魯陽が日を返し  
淮南子に魯陽公韓  
戦ひ、日が暮れか  
つた時戈を以て日を  
招き返した事が出て  
居る。

○項王が三將を離け  
し勢ひ 漢楚軍談な  
ごに出て居る、漢の  
三將を自ら討つた事  
○未の時より申の刻  
に及ぶまで 午後二  
時から四時になるま  
で。  
○官軍を欺き あな  
ざり。

維盛維茂などとして、一人當千の兵三百餘人打つて掛る。敵の方よりも將頼討たすなとて常陸守つるもち、武藏守興世、坂上の近高以下の兵一萬餘騎、我もくくと攻め戦ふ程に、山河草木動搖して、ゆ、しかりし有様なり。平親王將門は此の由を聞召し、「左程の奴輩を我が領内に引入れて、駒の蹄をかけさすこそ奇怪なれ、斯様の奴輩を一々に首切つて捨てむ。」とて、御著長を召されつ、葦毛の馬に打乗つて、鞭を揚げて出で給ふ、その有様殊に世の常ならず、身長は七尺に餘りて、五體は悉く鐵なり、左の御眼に瞳二つあり。將門に相も變らぬ人體同じく六人あり。されば何れを將門と見分けたる者は無かりけり。將門打つて出で給へば、將武、將爲以下の軍兵一千餘人前後左右に従ひ、寄手の真中へ會釋もなく打つて入る其の氣色、魯陽が日を返し、項王が三將を靡けし勢ひにも越えたれば、面を合はする敵もなし。されば未の時より申の刻に及ぶまで、討たる、官軍八十餘人、疵を蒙る者數百人、其の外半落ち失せて、今は戦ふに術無かりしかば、貞盛は後陣を待ちて戦はむと思ひ、其の夜武藏の國へ引退きぬ。將門は元來驕れる人なれば、官軍を欺き、何程の事が有るべしとて、そのまゝ逃ぐるをも追はず、勝鬨を作りて城の中へぞ入り給ふ。さる程に藤太秀郷は、將門の有様を見て、是は人間の振舞には有らず、日本國を合はせ

○謀短かうして謀  
がなく。

○ぶきう 武勇の誤  
りか。  
○淡海公 藤原鎌足  
の子藤原不比等。

○内侍 主殿の周圍  
の板敷に、塵を敷い  
た所。侍所にも云ふ

て戦ふとも、此の人に勝負をせむ事は叶ふまじ、元より將門は謀短かうして智慧淺き人と聞けば如何にも方便を廻らし、たばかり討たむには如かじと思ひ、貞盛に能くく言ひ合はせ、自らは只一人相馬の館へ行かれけり。將門は藤太に對面して様々に響應さる。藤太滔ひて申す様、「君の御有様を見るに、誠に四天王の御勢ひにも越え給ふ、其の上正しく葛原の親王の御子孫にて坐せば、十善の位を踐み給ふに憚りなし、一天四海を治め給はむ事程近く候べし、物の數に候はねども、此の藤太が身をも一方の御役に召使はれ候はば、弓矢の本意にて候べし。」と誠しかやに申しければ、將門心淺く悦びて申さる、「殊に各の力を頼んで一天を治め侍り、先祖のぶきうを耀かさむと思ふなり、御邊とても先祖を問へば正しく淡海公の流れぞかし、國土太平の後には、君臣和合の政を爲すべし。」とて、數獻の興に及びけり。理なるかな、將門は我が身悉く金體なり、敵にあうて恐るゝ所無ければ、今藤太が来るをも憚り給はぬは、兎角申すに及ばず、運命の末と淺ましかりし有様なり。藤太は館の南なる寢殿を預りつ、朝夕許り出仕しけり。或る時藤太内侍へ出でたりしに、年の齡は二十許りと覺えし上藤の、優に艶しきが、西の對の簾中より見出し給ふ事あり。藤太此の有様を一目見參らせ、夢現やる方かたなく、そゝろに覺えければ、宿

○由なかりける戀路なりと不都合な戀の路であること。  
○そよひ 一十の。

○御心を置かせ給ふなよ 御遠慮なさるよ。

○閻浮の塵 閻浮は植物の名、穢と譯すその果甘美であること云ふ、露とならば閻浮に宿りたいと云ふ意。

○されはこそ自らが賢くも云々 そりやこそ私がうまく見ぬいた事ですよ。

所に歸りて前後を知らず臥したりけり。是や誠に夏の蟲の炤に身を焦す思ひなれば、由なかりける戀路なりと思ひ返せど、さすがに猶そよと見染めし顔容の忘れもやらず苦しければ、せめては斯くと知らせなば、死ぬる命も惜しからじと、思ひ沈みて居たりけり。爰にまた時雨と申して館より通ひ物する女房あり、秀郷の許に來りて言ふ様は、「御有様を見参らするに、徒事とも覺えず、思召す事あらば、妾に仰せられ候へかし、力に叶ふ事ならば叶へ奉るべし、御心を置かせ給ふなよ。」と懇に申すなり。藤太此の由聞きて嬉しくも問ひ寄る物かな、人の心はいさしら雪の餘所にして、わり無き事を語り出し、とても叶はぬ物故に、身を亡き物と成し果てなば、後代の嘲りなるべしと思ひ廻らしけるが、まて暫し我が心誰か百年の齡を越えし人やある、露とならば閻浮の塵、秋の鹿の笛に寄るも、妻戀ふ故ぞかし、我も此の人故と思はば、捨つる命も惜しからじと思ひ定めつゝ、起き來りて私語きけるは、「恥かしや、思ひ内にあれば色外に現はるゝとは斯様の例や申すらむ、自らが思ひの種をば如何なる事とか申すらむ、日外御前へ参りし御局の、簾中より見出されたる上臈の、御立姿を一目見しより戀の病となり、死生定めぬ我が身の風情、誰か哀れと問ふべきや。」と潸然と泣きければ、時雨此の由聞きて、偽りならぬ思ひの色哀れに思ひ、「さ

○御事 御方。

○薄様 うすい鳥の子紙。

ればこそ自らが賢くも見知り参らせたるものかな、其の御事は我が主の御乳母子にておはします小宰相の御方にてましますなり、色には人の染む事もあり、思召す言の葉あらば、一筆遊ばし給はれかし、参らせて見む。」と言へば、藤太いと嬉しくて、取る手も薫る許りなる紫の薄様に、中々言葉は無くて、

戀ひ死なばやすかりぬべき露の身のあふを限りにながらへぞする

と書きて、引結びて渡しけり。時雨この玉章を取りて、小宰相の御方へ持ちて参り、「是々の物を拾ひて候、讀みて給はれ。」と申しければ、小宰相何心もなく開きて見給ひつ、「これは忍ぶ戀の心を詠める歌なり。」と仰せられければ、時雨さし寄りて、「何をか包み申すべき、云々の方より御前へ捧け奉り、一筆の御返事をも伺ひて得させよと頼むに辭み難くて恐れながら捧け奉るなり、何かは苦しう候べき、笹の小笹の露の間の御情はあれかし。」と侘ぶれば、女房顔打赤めて、中々物も宣はず、時雨重ねて申す様「夷心の分く方なくて戀ひ死なば、長き世の御物思ひとなるべし、天竺のじゆつばが后を戀ひ、思ひの炤に身を焦しける例思し知らずや。」と、漸うに言ひ慰むる程に、女房も流石岩木にあらねば、人の思ひの積りなば、末如何ならむと悲しくて、かの玉章の端に、一筆書きて引結びて出され

○分く方なく 分別もなく。

○天竺のじゆつばが じゆつばがの誤り。大智度論に天竺の衛婆伽と云ふ漁天王女を戀じて閻死した話が出て居る。



たり。時雨嬉しく思ひて、やがて藤太の許に來りて渡しけり。藤太取る手もたどくしく開きて見れば、

○人はいさ云々人の心は變るかも知れぬが。

人はいさかはるも知らでいかばかり心のするをとけて契らむ

○御心に染みて思しければ 印象深く残つて悪心となつたら。

と遊ばしけるを見て、喜ぶ事は限りなし。それより忍びくくに参りつゝ、わりなき中とぞなりにけり。此の事深く包隠しければ、御所中に知る人更になし。去る程に平親王將門常に此の女房の扮装御覽じて、御心に染みて思しければ、時々此の御局へは通せ給ふが、折節親王此の局におはしける時、秀郷参り合ふたり。怪しく思つて物の隙間より窺ひ見れば、同じ男體の上藤束帯にて七人ひとしく座し給ふ。こは不思議の事かなと思つて、其の夜は歸りけり。明の夜また御局へ参りて、様々に睦まじき事も言ひかはして後、藤太「叔も過ぎし夜この御局に人音のしけるを、誰人やらむと差寄りて、物の隙より見てあれば、さしも氣高き上藤のおはしまして候は、誰人やらむ。」と問はれければ、小宰相「それこそ將門の君にておはしませ、見紛ひたまふにや。」と宣へば、藤太重ねて申す様、「殿ならば只御一人こそおはすべけれ、同じ體配の上藤七人見えおはしつるこそ不思議なれ。」と申す時に、小宰相「叔は未だ知召さずや、殿は世の常に越え、御形は一人なれども、御影の六體

○上藤 こゝでは貴族。

○さしも あんなに歎賞する意。

まします故に、人目には七人に見え給ふなり。「藤太奇異の思ひをなし、」さて御本體には御見知りの候や。」と問はれて、女房「夢現人に語らぬ事なれども、御身なれば申すなり、うはの空に思召し、他人に漏し給ふなよ、かの將門は御形七人にて、御振舞かはる事なしと雖も、本體には日に向ひ、燈火に向ふ時、御影映り給ふ、六體には影なし、叔又御身體悉く金なりと雖も、御耳の側に、蟀谷といふ所こそ、肉身なり。」と語らせ給へば、藤太よく聞きて、「天晴大事をも聞きつる物かな、是こそ誠に我が生國の大明神御託宣にてあるべし。」と、いと有難くて、そなたの方に向つて、祈念の氣色をしたりけり。叔は此の後將門を、只一矢に射伏せむ事は、案の内と思ひとり、其の後は夜なく彼の御局へまるるには、竊に弓と矢を挟み忍び窺ひけり。案の如く又將門彼の御局へ入らせ給うて、打解けて御物語などし給へり。藤太物の隙より能く見れば、實にも六人には燈火に映る影もなし、本體には影のありと言ふについて、目を澄まし見れば、時々彼の蟀谷といふ所動きけり。藤太天晴幸がなと弓と矢を打番ひ、ひようと射たりけり。元來秀郷は精兵の巧手、養由が百歩の藝にも越えたる上、矢頃は閒近し、何かは以て射損すべき、小耳の根と思ふ所を彼方へづんと射通しければ、さしもに猛き將門も仰向に倒れて空しくなれば、残る六

○夢現人に語らぬ事なれども 決して人に云はぬ事であるが  
○うはの空に思召し しい加減に考へられて。  
○蟀谷 耳の上部眼の側部、物をかめは動く所。顯顯。

○案の内 計謀の内

○養由 支那の月の名人。

人の形も電光石火の如くにて光と共に失せにけり。

さる程に將門亡びぬれば、貞盛秀郷は悦びの眉を開き、打取る處の首竝に捕虜共を召し連れ、さゞめかいて上らる、威勢の程こそゆゝしけれ。道遠ければ、王城へは誠の左右は未だ聞えず、官軍は戦に打負け、將門はすでに帝都へ攻入るなどと聞えければ、主上大きに驚かせ給ひつゝ、諸寺諸山に救使立て、調伏の法頻りに行ふべき由、宣下せらるゝ。中にも八坂の淨藏貴所は、「今度將門が攻上るといふ事は、全くもつて虚言なるべし、若しさもなくば、法驗徒事なるべし、但し彼の首の上り候にや。」と救答申されけるが、果して四月二十五日、貞盛秀郷の兩人、將門の首を持ちて上洛せられけり。これによつて君も御物思ひを安められ、臣も悦び勇みつゝ、一天四海の人民安堵の思ひをなしたりけり。則ち檢非違使を遣はされ、將門以下の首受取らせて、大路を渡し左の獄門の木に懸けさせけるに、將門一人の首は、未だ眼も枯れず、色も變ぜず、時々は切齒をなして怒る景色なり、恐ろしといふばかりなり。これを或從者の者が見て、

將門はこめかみよりも射られけりたはら藤太がはかりごとにてと詠みければ、此の首呵々と笑ひて、其の後色も變じ、眼も閉がりけるとかや。

○さゞめかいて賑やかに話し合つて。○誠の左右 全くの事實。

○將門はこめかみよりも射られけり云々 此の落首は平治物語に出て居る。こめと依の洒落である。

さる程に内裏には、公卿、殿上人参内し給ひて、今度兇徒退治につき、恩賞を行はる。僧衆には尊意僧正、僧都淨藏貴所なり。これ皆武士の賞に抽んでらるゝには、平の貞盛無位より正五位上に任じて將軍に任すべき由の宣旨を下され、藤原の秀郷は從四位下に任じて、武藏下野兩國を賜はり、貞盛秀郷の兩人を召されて、宣旨を賜はる。儀式誠にゆゝし、子々孫々弓矢の面目とぞ見えし。

さても依藤太秀郷は宣旨を頂戴し、一門を引具して、下野に下りつゝ、本領に安堵し給ふ。其の繁昌は月日に増りて、門外に駒の立所もなく、堂上に酒宴の暇もなし。國中の萬民忠ある者をば、望まざるに過分の恩賞を當て行はる。罪ある者をば、速かに是を懲らさしめ、賞罰正しければ、人の懐き従ふ事際限もなかりけり。其の上子孫もゆゝしくて、後將軍に任ず。次に小山の二郎、宇都宮の三郎、足利の四郎、結城の五郎などとして、男子數十人に及べり、嚴めしかりし榮華なり。

抑、依藤太秀郷の將門を打亡ほし、東國に威勢を施し給ふこと、偏に龍神の擁護し給ふなるべし。それを如何にと申すに、龍神は女人に變化し給ふなれば、彼の小宰相の御局又時雨と申す女房、いさしら雲の餘所にして、秀郷大切に可愛しみ、大事を語り聞かせて、

○嚴めしかりし榮華なり すはらしい繁昌である。○いさしら雲の餘所にして云々 他も知らず、宮殿中の奉公をよそにして唯ひたすら秀郷のみを大切にし。

高名を極めさせし事、能くく思へば、彼の女の心に龍神入り代り給ふか、覺束なし。其の上三井寺の御本尊彌勒薩埵の御恵み深き故、子孫の繁昌相續す。日本六十餘州に弓矢を取りて、藤原と名告る家、おそらくば秀郷の後胤たらぬは無かるべし。嚴めしかりし例なり。

びしやもんの本地

○羅婁國 羅婁は狗盧、鳩婁など同じ須彌山の四方にある四大洲の中、北方の大洲の名。恐らく夫を用ゐたのであらう

びしやもんの本地

昔、天竺に國あり、名を羅婁國とぞ申しける。其の國に王一人おはします、御名をばせんさい王とぞ申しける。萬めでたき事人に勝れておはします。時に從ひ寶の降る事雨の如くなり。何れも一天下におろかなる事おはせねども、是を例證なき事にぞ申しける。天が下なびかぬ草木もなし。寶日に從ひて降り下り、白銀黄金の築地に黄金の扉をたて、庭には金銀琉璃を敷き、黄金の砂を鏤め、泉水の木立は光りを交へたる心地して、面白き事申す許りもなし。内裏には鷲の羽鷹の羽にて、宴室造りにぞ葺かれたり。金の瓦に銀の床を並べ、錦の几帳を立てられたり。百八十間の御簾に金の鈿を百二十丈に組まれたり。其の内に壹萬人の公卿大臣、三千人の女房達に圍繞せられておはします有様、例すくなくぞ見えさせ給ふ。されども行末千秋萬歳を有たせ給ふべきと思召すとも、老いの身は人も嫌はぬことなれば、大王も后も齡傾きまします事ぞ哀れなる。既に大王は御歳九十にぞならせ給ふ。后は六十にならせ給へども、末の世を繼がせ給ふべき皇子一人もなし、せめ

○金議 今の會議。  
 ○申子 神佛に祈つて申し請ひたる子。  
 ○利生 利益衆生。  
 ○梵王 大梵天王の異語。淫欲を離れて清淨潔白な佛。  
 ○千僧供養 佛語。千人の僧侶を集めて佛を供養する事。  
 ○忌々しき 重大なすはらしい。  
 ○少し繕ひ 少し威儀を正し。  
 ○六天 欲界の六天四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天。  
 ○南洲 南瞻部洲の異、須彌の四洲の一。  
 ○龜施行引きつる 食物を貧民に施す事引くは實行をする意に用ゐた。

て姫宮にてもおはしまさねば、めでたき御中にも、事の外なる騒ぎにてぞおはします。公卿會議有るやうは、「昔よりこのかた、人は申子をする事ぞと傳へたり。末の世を繼がせ給ふべき皇子一人もましまさねば、國の煩ひなるべし。」と申させ給へば、御帝實にもと思召し利生あらたにまします梵王へぞ參らせ給ひける。されども效も無し。其の時寶を傾け參らせむとて、白銀千兩、黄金千兩、絹綾千匹參らせて、其の上に一萬五千兩を寄せ給ふ。また善を爲れば協ふとて、千僧供養をして、九重の塔を建て、忌々しき願に申させ給ふ。三七日と申す夜半ばかりなるに、御戸を押開きたまひて、御とし八十ばかりなる翁殿杖にすがり給ひて、少し繕ひて申させ給ふ様、「御身の子種を天に昇り地に入り、六天を初めて三千大千世界を尋ねれども、更に無し。取らむとすれば水となり、火となり候。いはれば君は昔小鷹にて、よろづ鳥類翼の命を取り給ひしが、或僧のあらたに經讀みたまひしを、聽聞したまひし故に、南洲の國にきんわうといふ民に生れて、誓ひをたてしこと、我が世にあらむ間、僧を空しく通さじといふ願を立て、常に龜施行引きつるにより、この國の大王と生れたまひけり。心ざし深きは富貴の家にうまる。然りと雖も、過去に物の命を殺しつるにより、今子の種有らず、后は前の世は日本美濃の國の二尋の蛇にてありしが、

○十方淨土 上下八方に諸佛の淨土が無量無邊に存するを云ふ。  
 ○如意寶珠 如意寶珠の事。其の寶珠から諸種の自分の望む所の物を出し得るからかく稱する。龍王の腦中から出で或は佛舍利の變じて成つたものであると云ふ。  
 ○北の政所 關白なごの夫人を云ふ。  
 ○それならず それのみならず。  
 ○申すも愚かなり 云うても云ひ盡せない。

物の命を殺しつるが、法華經の御聲を耳に觸れしにより、かたじけなくも後の位に生れ給へども、子種能はず。汝が思ふより、予が尋ぬるは苦しきなり。」と仰せければ、大王畏まつて申し給ふ。「假令佛の御子なりとも賜はり候ひつるものならば、七寶の堂を黄金白銀にて組みて參らせむ。」とて、肝膽を碎き祈り申させ給へば、十方淨土へ參り、佛に申し得がたき子種を申し請けて、如意珠の玉を一つ申し下しけると、御覽じて、殊に光り目出度きを後の左の御袖に賜はり候と、思召して、やがてそれよりして、いつしか后御懷妊ありて悦ばせ給ふ事限りなし。さまざまの御祈りども日に増し、漸々月滿ち其の氣色つかせ給ひて、安々と御有様光る程の姫宮にてぞ渡らせ給ふ。大王悦び給ふ事限りなし。御名をば天帝玉姫と申し、關白の北の政所を乳母に定め、さまざまの御事、申すもおろかならず。さて猶不思議の事有り。大王の御年九十にてましますが、この姫君出來給へば二十ばかりに若く成り給ふ。后は六十にておはしますが、十七八にぞ見え給ふ。關白殿の北の御方は、乳母にて五十許りなるが、それも十七八にぞ見え給ふ。それならず此の姫宮拜み申す人、若きは愛敬つき、老いたるは若くなる。人々申し給ふ様は、御帝此の姫宮出で來させ給ひてより、后も皆々若くならせ給ふ事、有難き御事と申すも愚かなり。されば高きも賤しき

○いかで人には云々  
 姫を一目見ると病  
 氣全快するため、衆  
 生は皆見たがるから  
 かく云ふのである。  
 ○淨飯大王 迦毘羅  
 衛國王で、釋尊の父  
 王。

○檀特山 北印度健  
 駄羅國に在る山。須  
 大摩太子が菩薩行を  
 修した所。佛傳説で  
 は釋尊即ち悉達太子  
 の苦行所となつて居  
 る。

○摩耶國 南天竺摩  
 利伽羅國に摩羅耶山  
 がある。夫を採つた  
 のか、摩訶摩耶經と  
 云ふ經文の名を採つ  
 たのであらう。

も参りて拜み申しけり。悦ぶ事限りなし。偏に地獄の衆生を、佛の救はせたまふにも劣ら  
 ず。みかど、「衆生を憐み給ふ事はさる事なれども、さのみはいかで人には見すべき。」と宣  
 旨ありければ、公卿大臣申されけるは、「釋迦如來は中天竺の主、淨飯大王の御子悉達太子  
 とて、辱き御事なれども、世を厭ひ王城を出で、御姿をやつし、檀特山に籠り、難行苦  
 行したまひてこそ、正覺を遂げさせ給ひしも、しかしながら衆生の爲なり、されば善を爲  
 る者は、三世の諸佛歡びおはしますなり、民百姓なりとも、ゆめく隔てあるまじ。」と申  
 されければ、さらば参り拜み参らせけること限り無し。年寄りたるは若くなる、若きは敬  
 愛つきて歸りければ、例少なくぞ申すなる。

さる程にならびの國に摩耶國とて國あり。それも王まします、この姫宮の御事聞召し  
 及ばせ給ひて、「われ此の國の主なれども、年の行くを駐めぬことこそ口惜しけれ。それに  
 つけても、末の世を繼ぐべき皇子一人も無し、如何すべき。瞿婁國の姫宮迎へ奉り、年若  
 くなりてこの國をも譲り参らせむ。」との宣旨なり。それは然るべしとて、馳て瞿婁國へ敕  
 使を立てけり。その道三年に行くなり。瞿婁國の大王この文を御覽じて仰せけるは、「われ  
 姫宮に片時も離れがたし、其の上片道三年に行くなれば、立離れむも悲しきなり。逢ひ見

む事も難かるべし。」とて、御涙を流させ給ひけり。御返事には、「遙かの雲居を隔てて承り  
 候事、御いたはしくは候へども、姫君は未だ幼なく候。其の上只一人にましますば、協ふ  
 まじき。」由御返事ありけり。摩耶國の大王此の由聞召し、大きに怒り仰せありけるは、「瞿  
 婁國は小國なり、摩耶國は十八萬騎の所なり。瞿婁國を討ち取りて、姫宮取らむ。」と宣旨  
 あり。瞿婁國の大王聞召し、「姫宮設けて昨日まではよろこび、今日は歎くことあり。」とて  
 御涙流し給ふ。

姫宮御年十三にならせ給へば、ひかり差添ふ心地して、美しさ限りなし、御心ばへもお  
 となくして、顔打赤め宣ふやう、「妾故にて候へば、何をか惜しませ給ふぞ、摩耶國は十八  
 萬騎の大國なり。瞿婁國は小國なれば、討ち取られむは、一定なり。自ら故に候へば、國  
 の亂れあらむ事あさましく候へば、摩耶國へ行き、大王の御心を止め侍るべし。」と申し給  
 へば、大王實にもとや思召しけむ、その出立をぞいと名み給ふ。姫宮かくなむ、

ながらへぬ契りぞ今はあだになる心つゞきて逢ふよしもなし  
 たらちをにけふは別る、道なりとあすをゆきあふはしとなりなむ  
 后かくなむ、

○ひかり差添ふ 美  
 しくつて光が加はる  
 やうに感ずる。差は  
 接頭語。  
 ○御心はへ 氣だて  
 御性格。  
 ○おまなく 大人  
 のやうで。  
 ○いさなみ給ふ 用  
 意をなさる。  
 ○たらちを 父親。  
 ○道なりと 筋道で  
 あつたとしても。  
 ○はし 端緒、いと  
 ぐち。

○玉手箱 美しい手箱、二見浦の枕詞。

○二見の浦 伊勢の地名、蓋、中身、裏ミ、箱の縁語ミをかけたのである。

○おきながら 置きながらと沖ミをかけた。

○懸子 他の箱の縁にかけて、その中にはいるやうに作つた箱。こゝでは自分の子にかけた。

○すゑながら 置いたま。

○十五ばかり 拾十五枚重ね。

○薄色 淡紫色。

○なまめかしき 上品な。

○萬壽樂 萬秋樂の誤り。婆羅門の傳へて居る祭調の雜樂

玉手箱二見の浦のおきながらなかの懸子のはなるべきかな

姫宮、

なにとてか二人の親をす忍ながら中の懸子のはなれはつべき

かやうに詠じ給ひて、姫宮は白き生絹十五ばかりに、紫の三ばかりに、薄色の御装束に、

白き袴のなまめかしきに、扇さし翳しておはしませば、偏に天人かと思えさせ給ひける。

御顔は生れ落ちさせ給ひしよりも薫り、花の匂ひ薫じて、ありがたき御事なり。さても大王

王をはじめ奉り、留まらせ給ふ人々御名残を惜しみ、引被き悲しみ給ひしこと限りなし。

御ともの人々は勇みをなされけり。公卿殿上人五位の侍と申すまで、二千人まで参らせ給

ふ。日數七日と申す時、忍所に御泊りにて、をりふし初秋の月隈なくて清かなりければ、

琴を掻き鳴らして、故郷戀しくおほしめして、かくぞ詠め給ふ。

旅のそら月をたよりに出でぬればいと心はすみ渡るなり

と詠め給ひて、萬壽樂といふ樂を弾き給へば、面白しとも中々おろかなり。聞く人涙をながしける。さる程に月隈なく澄み上るに、摩耶國の方より村雲一村引覆ひけり。姫宮御覽

じて、哀れ摩耶國より寄する勢やらむと思召して、かぐぞのたまふ。

天津そら雲の通ひぢ踏みわけて月ならずして誰か行くらむ

と詠め給ひて、「いかなる人の何方へおはしますぞと、いと優しく侍る様かな。」と宣へば、

村雲の中より人おり下り、かく、

棚機たなはたのくも居のそらにすむみづの君ゆる今はおちまさるかな

とて、落ちくる人を見給へば、年十七八許りなる人なり。御直衣の美しきに、紅くれないの生絹

の指貫さしぬきに、白き下襲したかさはめ忌々しく髪びんざら吹き流し給ひたるやう、たゞ人とも覺えず見えさせ給ふ

が宣ふは、「君はいかなる人にてましますせば、御聲空ごこゑそらの雲まで愛でたく聞えさせ給へば、思

ひの外ほかに天下あまたるなり。」と仰せありければ、姫宮のたまふ様、「われは瞿婁國くわろこくの大王の女子大

玉姫たまひめといふなり。われいかなる事にか、見る人年若くなり、若き人は愛敬づくにより、摩

耶國の大王聞召して、我を迎へとり、御とし若くなり給はむとて、御使あり。父の大王へ

度々遣はされけり。父の大王も母后もたゞ一人ある子を、いかゞ遣はさるべきとて、惜し

ませ給ふことかぎりなし。さて摩耶國の大王は怒りをなして、其の義ぎならば瞿婁國を討ち

とらむ、摩耶國は十八萬騎の所なり、瞿婁國は拾萬騎の所なり、いかでか立て合ふべきと

て、大王も后も歎き給ふ、十八萬騎の勢には責めらるゝとも、自らを遣はすまじきと侍

○棚機 棚機つ女の

器で織女星、こゝでは雲居の枕詞。

○直衣 貴族の通常服。袍の短小な物。

○指貫 裾にくる紐のある貴族の袴。

○下襲 袍の下に著る著物であるが、こゝでは單に下著。

○髪 年少者が髪を分けて耳元に結び垂れしもの。

○いかでが立て合ふべき ぐうして抵抗できよう。たてつけよう。

○月の入るさの山  
月の入り際の山と、  
入佐山をかけた。  
入佐山は但馬にある  
○羅曼國 羅曼居士  
から探つたのか。

○重ねても見む 再  
び逢はんと云ふ心と  
衣を重ねて見んと云  
ふのをかけた。  
○きぬのつまかな  
きぬはきぬの別の別  
れにかけ、つまは著  
物の袴と妻ををかけ  
た。  
○忌々しくも 姫の  
歌に今日を限りとあ  
るのを忌んだのであ  
る。

れども、親おやの孝養に進み出でたり、されども心苦しき旅の空、月の入るさの山もゆかしく眺めつるなり。」と答へさせ給へば、其の時天下り給ふ御方おんかた仰せけるは、「予はこれ羅曼國ゆるまんこくの主金色太子あるじこんじきと申す者なり、羅曼國の大王、姫宮御惜しみのよし承り及びまらせ候。予に契りをなし給はば、姫宮を是れより羅曼國へかへし、摩耶國を我一人行きて退治し奉らむ。」とのたまへば、姫宮御親の名残惜しみ給ひし事を悲しみ、故郷へ歸りたらば、さぞ大王も后もよろこび給ふべしと思召し、太子に御契りをむすび、さて太子は、「摩耶國の王を退治し、羅曼國の軍を止めむ事一定なり。それを如何にと申すに、われ劍を持ちたり、一寸抜けば一千人が首くびおちけり、二寸抜き給へば、二千人が首落つる劍ある。」と仰せらる。さる程に姫宮は太子と御契りある。いつしか御名残惜しみ給ふ。太子摩耶國へぞ赴き給ふ。太子かくなむ、

いつかまた重ねても見む旅衣あかで別る、きぬのつまかな  
姫宮、

重ねてもいつかきて見む旅衣今日を限りの道と思へば  
太子仰せけるは、「忌々しくも侍るものかな。」とて、

○よにもかはるこも  
現世來世と世が變  
つてもと非常に變つ  
てもをかけた。

○後生 後生善所。  
○はかなき後の契り  
や たよりのない未來  
の約束。

○行きあはむ 出逢  
はんと、著物の袴が  
合ふをかけた。

諸共に姿はよにもかはるとも結ぶ契りの朽ちぬべきかな  
又姫宮かくなむ、

朽ちもせぬ契りときけば頼まるゝ迷はむのちはいと忘れじ  
かやうに宣ひて立別れむとし給ふ時、太子仰せけるは、「今よりして三年待たせ給ふべし、それ過ぎなば空しくなりぬると思召し、後生弔ひてたび給へ。」と仰せければ、姫宮「はかなき後の契りや。」とて、御袖を絞り給ふ。いみじく哀あはれなり。この有様を見る人悲しまずといふ事なし。

別れ路を思へばもろき涙かなまた行きあはむ袖やくちなむ  
ひめ宮もかくなむ、

頼めおく契りのすゑのふかければ枕にきえむ露の命に  
かやうに詠じ給ひて、別れ給ふ御心の中おし量り、歸り給ふ人々騒ぎあへり。

大王急ぎ問ひ給へば、御供の人々此の由ありの儘に申す。大王聞召して、「さては太子眞まことの道に入り給ふやと、姫宮に契りを結び給ふ故にや。」とて、御涙を流させ坐おはします。姫宮歸らせ坐おはします事、御喜び限りなし。お喜びの中にも、姫宮は太子に契り給ふ年月も重なりぬ

○日に添へて 日増しにいよ／＼。  
○金麗駒 金色の美しい馬。

○北面の侍 元來は上皇守衛の武士。ここでは單に皇居守衛の武士であらう。

○細き流れを云々 此に脱落の句があるらしい。少し續かない。

るに、日に添へて戀しく、遙かなる道の程と痛はしく思召し、袖の干るまも坐さず。さても悲しかるべきとて、多くの御供の人々をば皆返したまひ、金麗駒に打騎りて摩耶國へぞおもむき給ふ。太子御覽するに、水の流れも潔よく、木立も面白く生えかゝり、雲も霞も籠めたる内裏あり。幡鈴を立て雙べ人の數多かりけり。太子たゞ一人坐して、「内裏の御際にて申さむ。」と宣へば、公卿殿上人おほく竝み居て此の由を聞き、北面の侍を出して、「何事ぞ。」と申せば、太子仰せけるやうは、「汝に言ふべき事に非ず、然るべき大臣を出し候へ。」と仰せければ、大臣出で聞き給ふに、太子仰せらるゝやう。「是れは瞿婁國の大王よりの使なり、瞿婁國へ御勢を立てらるべきと承り候。これにて我一人して防ぎ申すべき爲に参り候なり。急ぎ御勢を出させおはしませ。」と申させ給へば、公卿大臣これ聞き、「此の國の勢を一人して留め申さむ事のをかしさよ。」とて、人々笑ひける。太子大きに御腹を立ち、「唯申し入れさせ給へ。」とありければ、臆て大王に申上げければ、「何、瞿婁國の勢を一人して留めむとや、いかに此の國の勢を亡ほさむ、愚かなり。」とて、笑はせ給へば、太子御腹を立て、「いかにや大王聞き給へ、摩耶國は大國なりと申せども、其れには依るべからず。」細き流れを人々見参らせて、さこそをかしく哀れに見えさせ給ふ。太子は些

も騒ぎ給はず、勇み給ひて名乗らせ給ふ、「遠くは音にも聞け、近くは目にも見よ。我はこれ維曼國の主の獨り子に、金色太子といふ者なり。瞿婁國の大王の宣旨を蒙りて向へり。生年十九になる、屍は摩耶國に曝し、名を後代に揚ぐべし。」とて、大刀といふ劔を抜きて振り給へば、一千人が首悉く落ちけり。大王も大臣も恟れ騒ぎ、又重ねて三千人が首前の如く落ちけり。是れを見て續くものども肝を消し、震ひ戦き悲しむ事かぎりなし。大王も斯くては如何せむと思召し、大臣に向ひ宣ふやうは、「我凡夫の身とてかやうの事をば知らずして、多くの人を亡ひつるこそ無念なれ。瞿婁國の姫宮迎へて、我が世を譲らむが爲なり。今は姫宮も何にか爲む、太子にこそ譲り参らすべければ、何事も赦し給へ。今よりして太子に世を譲り奉らむ。」とて、大王は太子の召したる金麗駒の口をひかへ、内へ入れ奉り、儲の君に備へむとて、奥殿と申す内裏をこしらへたてまつり、人々参り喜ぶこと限りなし。されども太子は姫宮の御事のみ思召して、御暇を申させ給ひけり。大王仰せに、「然らば瞿婁國の姫宮これへ迎へ取り給へ。」と申させ給へども、如何すべきと、今日明日と思ひ暮し給ふほどに、はや三年なりけり。姫宮思しける様は、「太子は三年待て、其れを過ぎばこの世に亡きと思召せと承り候ひつるに、はや三とせあまれども見えたまはず。いかな

○口をひかへ 馬の口をとり。  
○儲けの君 あまごりの君。こゝでは皇太子の君。



○仇なる命の云々  
はかない自分の命が  
うせもしないで。  
○せめての事にや  
せめての心慰めであ  
らう。

る太子なれば、たゞ假初の契りゆゑ、はかなく成らせ給ふらむ。みづから仇なる命の消え  
やらで、物のみ思ふこそ悲しけれ。」とて、袖を絞らせ給ふこそ痛はしけれ。せめての事に  
や花園に立ちいで給ひて、花の散るを御覽じて、我が身の上と思召して、かくぞ詠む、  
あさましや世をうき風にさそはれて花より先にわれぞ散るべき  
かやうに詠め給ひて、如何に成らせ給ふべき御身ぞと歎かれけり。止まらぬ月日なれば、  
三年も過ぎ行く。姫宮十六にならせ給ふ。あてになほ美しく見えさせたまふ。ひかり差添  
ふ心地して見えさせ給へば、いとゞ太子の御事思召しけり。姫宮山の端の月を御覽じてか  
くぞ詠め給ふ、

山の端の傾く月にも問はむ別れし人はありやなしやと

太子の後世を申はむとこそ仰せられしにとて、忌々しき御弔ひどもせさせ給ふ。姫宮自  
ら御経遊ばして詠め給ふ。

限りある別れなりとも此の世にて今ひとたびの逢ふよしもがな  
かやうに朝夕詠め給ふ。今又かくなむ、

朝顔をなにはかなしと思ふらむ花よりさきにわれぞ散るべき

○限りある別れ 現  
世にては、人の命に  
かぎりあるから別る  
べきであるが。

○月に曇り有らすな  
月を佛の本體に喩  
へ、自分の情仰の曇  
らぬを祈つたのであ  
る。

○世の常の人さへ  
平凡な人間ですら死  
ぬるのを惜しむのが  
人の習ひである。

○有り難き不死の薬  
の如くに云々 尊い  
不老不死の薬のやう  
な薬であられるから  
姫を一目見る人々  
が若やぐのをさす。

○須彌山 一名蘇迷  
盧。佛説で、此の世  
界は八山八海から成  
りその中心の高山が  
此の須彌山であるこ  
考へられて居る。

と遊ばして、朝夕御心に隙もなく歎き給ふ程に、御心も煩ひ、ながらへ給ふべきやうもな  
く見えさせ給ふ。御前の人々皆々これを歎き申す事限り無し。或時、姫宮西に向ひ給ひ、  
念佛高聲に申し、「冥き道に入りぬとも、心は月に曇り有らすな、元より極樂を願ふ身なれ  
ば。」とて、御念佛を申し給ひ、眠る様にて遂にはかなく成らせ給ふ。其の時乳母御手を取  
らへ參らせ、「いかに〜。」と申して、聲を惜します泣き給ふ。大王も后も御心惑ひ歎き悲  
しみ給ふこと限りなし。「日頃もいかにと思ひながら、けふ此の頃斯様にはあらじと思ひし  
に、斯かる憂き目を見る事よ。」とて御歎きあり。世の常の人さへ惜しむ習ひなり。況して  
や有り難き不死の薬の如くにましませば、光、浮雲に隠るゝが如くにて、歎き悲しみ給ふ  
事限りなし。

さる程に太子は、摩耶國にて姫宮の隠れさせ給ふをば夢にも知らせ給はで、はや三年は  
立ちぬ。前世の御契りうすかりけむ、姫宮の御事のみにて明し暮し給ふ。千人の后も御心  
に入らせ給ふは、一人もおはしませず、たゞ姫宮の御事のみにて明し給ふ。三月十日頃に  
成りぬれば、花もやう〜散り初めて、景色も哀れなりける折節、ひるの御轉寢に寂しく  
あり、「姫宮は。」と問はせたまへば、「これにはおはしませず、これより西に須彌山と申す所

○暫はぬ旅 慣れぬ旅、即ち死出の旅を意味する。

○夢のつらさは 夢である悲しさには。

○打驚かせ給ひ 夢が醒められて。

○おほつかなく たよりなく。不安に。

○餘り急ぐとて 非常に急ぐからと云つて。

におはします。」と申す。馳て須彌山の麓へ行き御覽するに、廣々とある所に、唯一人行き迷ひ、太子、姫宮に向ひ宣ふやう、「君はなにとて獨り是れにはおはするぞ。」と宣ふ。姫宮仰せある様、「誰れ故と思召すぞ、御身故に斯様に候。」とて、御袖を御顔にあて、御涙堰きあへ給はず、「太子は未だ此の世におはしますに、自らは斯かる習はぬ旅に獨り赴く事の悲しさよ。」とて、さめぐと泣き給ふ。御有様かねて見しより猶も美しく見えさせ給ふ。太子爲む方無く思召し、「忘るゝことは侍らねども、斯く過ぎ行くまゝに、今まで音づれ参らせ候はで、物憂くこそ侍れ。」とて、摩耶國にての御事かき口説き語りたまひけるに、夢のつらさは馳て打驚かせ給ひ、御涙堰きあへ給はず、淺ましや三年待たせおはしませと、深く契り奉りし、さこそおほつかなく思召すらむとて、胸打騒ぎ、やがて大王へ御暇を申させ給ひければ、「暫し待たせたまへ、御供の者用意せむ。」と仰せければ、餘り急ぐとて、御供の人々も連れさせ給はず、たゞ一人金麗駒こんれいこまに打ちのり、數の鞭を當て給へば、村雲の中へ混れ入りぬ。かた道三年に行くを急がせ給へば、六日に飛び著かせ給ひ、瞿婁國の大王に参り案内を乞はせ給へば、人々申すやう、「姫宮はこのほどはかなく成らせ給ひ、大王の御歎き申す計り無し。」とありければ、さればこそ夢の醒めぬる如くよとて、御涙に咽ば

○申すもおろかなり 太子の悲歎は云ひきれない。  
○消え入り給ふ 悲しみのため絶え入る意。  
○御心の中爲む方なく 心中やる方なく心の苦痛悩みをこくすべなく。  
○書きすさみたる 書き散らした。  
○眞木柱 眞木と云ふ植物の柱。めぐりにかけて巻きこぶつたのである。

せたまふ。稍ありて、大王に向ひ申させ給ふやう、「吾は維曼國ひまんこくの主、金色太子と申す者なり。」と宣へば、大王驚かせ給ひ、「これへく。」と請じ給ひ、對面あり。互に御涙堰きあへたまはず。稍ありて大王、太子に向ひ宣ふやう、「然るべき御事にや、國の軍を止め、姫宮二度返し給ひ、此の三四年添ひ奉る事、偏に太子の御威徳なり。姫ゆゑにかやうに成らせ給ふぞとて、御弔ひ淺からず申し候ひつるに、遂に空しくなり候て、けふ七日になり候。」と宣へば、太子涙を押へて、我が摩耶國にて夢に見奉りし事を、細やかに語り給ふこと、申すもおろかなり。姫宮の御姿を其のまゝ置き奉り候。太子宣ふ様、「變る御姿なりとも、今一目見参らせたまき。」と有りければ、住み給ひし御所へぞ入れたてまつる。乳母の女房達は太子を見参らせ、姫宮の御事を歎き悲しび、皆わつと消え入り給ふ。太子姫宮の錦の褥を引き明けて御覽じければ、唯寢入りたる様に見えさせ給ふ。猶色白く面瘦せ給ふ。露ばかりも變りたるけしきなく、美しくぞ成らせ給ふ。太子御覽じて御心の中爲む方なく思召しけり。御側を見給へば、書きすさみたる物あり。御らんするに、戀ひわびて野邊の煙となりぬるを誰かうきよに哀れとは見む廻りあふことしなければ眞木柱つひのなごりのはてしなりけり

○理ぞ申しあへる  
 姫の乳母の女房達が噂し合ふのである  
 ○解けやか うち解けた風の意であらう  
 ○娑婆世界 此の人間世界。

○我を具し給へ 我を作ひ給へ。

○御聲に驚かせ給ふ 大王の聲に眼が醒めた。

○むはたまの 夢の枕詞。植物の名。  
 ○現 正氣。

と遊ばしけるを見るに付けても、いと哀れぞ増りける。太子あまりの御歎きにや、姫宮の御側に生きたる人の様に添ひ臥し給へる御姿、いと美しく見えさせたまへば、姫宮の戀ひ悲しび給ひしも、理とぞ申しあへる。太子暫しまどろみ給へば、御夢に姫宮在りし時より猶解けやかに成らせ給ひ、「あな淺ましや、太子は未だ此の世におはしますものを、自ら契りを深く頼みたる故に、世を空しく成りしなり。太子變らぬ御心ざし深くましまさば、みづからを今一度御覽せむと思召し候はば、自らを尋ねて來り給ふべし。われは娑婆世界と申す所にはや生れ候なり。この世にて逢ひ參らせ候ことは難く侍るとて、自らは歸り候なり。とくく訪はせ給へ。」とて、さめくと泣き給ふ。かくなむ、

此の世こそ二たび逢はぬ中なりとつひには君に逢ふよしもがな  
 かやうに宣ふ程に、御袖を控へて、「我を具し給へ。」とて、御返り事申さむとし給へば、大王、太子を慰め參らせむとや思召しけむ、「然のみ歎かせ給ひそ。」と仰せられける。御聲に驚かせ給ふ。太子かくなむ、

むはたまの夢に姿はありつれどさむる現におもかけはなし  
 と仰せられて、この由を大王へも后へも申させ給へば、いと御歎き申す許りなし。太子

○これへ渡らせ給へ 此處に居り給へ。

○左右 單に左右の事。こゝでは兩方相俟つての義。

は彼の所へ尋ねて行かむと仰せける。大王宣ふやう、「仰せはさる事なれども、如何にしてさやうの所へは尋ねて入らせ給ふべき、これへ渡らせ給へ、姫宮の御姿を見奉らむ、其れゆる維曼國の父母の御歎きも罪深し。」とて、止め申させ給へども、維曼國の大王后の御方へは、文ども細々と遊ばし參らせられけり。摩耶國へも文あり、思ひかけぬ御情に預かりつるなんと、遊ばし送り給ふ。瞿婁國の大王申させ給ふやう、「我命有らむ間、如何ならむ道までも尋ね奉らむ。」とて、御涙の際よりかくなむ、

生きてわかれ死にてわかる、思ひゆる左右に物ぞかなしき  
 と宣ひて、歎き給ふ。さて太子は金麗駒に打向ひ宣ふは、「畜生も物の心は知るものなり。汝は駒と雖も其の故あり、我は然るべき所へ行かばやと思ひ立ちぬるなり。送り著くべきか。」と仰せければ、伏し轉びつ、嬉しげに見えけり。太子喜び給ひて打乗り、霞の鞭を西に向き打ち給へば、何處とも無く空に上り、夜晝ともなく三年までと馳せ給ふ程に、高き山あり打登り見給へば、僧一人本尊に燈かき添へて、頸に懸けたるに逢ひ給へり。太子は御心細く思召し、人に逢へかし、知らぬ山路を問はむと思召しけれども、つやく逢ふ人も無く、如何に成り行く身の果てぞと思召しけるに、此の御僧に逢ひて嬉しく思召し、馬

○つやく 全く。

びしやもんの本地

○有漏の身 佛語。煩惱のため、色界、無色界を脱離する事の出来ない凡夫の稱一般の人間。  
○實やかに しんみりとして。

○長庚星 ゆふづ、金星。或は宵の明星の明星とも云ふ。太白星。

より下りさせ給ひ問はせ給ふ様、「思ひ寄らぬ事にて候へども、大梵王宮の黄金の筒井と申す所や知らせ給ふや。」と問ひ給へば、この僧大いに驚きける體にて、「如何なる人にておはするぞ、この道は有漏の身にては通らぬ道なり。昔より今に魂より外は通らぬ道なり。」と宣へば、太子申させ給ふ様、「然るべき契り有りて、斯様の途に赴き候。よくよく教へてたび候へ。」と仰せありければ、僧仰せあるやう、「實やかに哀れにはべり、さりながら此の道は容易く入らせ給ふべき様有るべからず、思召し止まり、これより歸らせ給へかし、我が身もさやうの所をば傳へ承りて候へども、委しき事は知らぬ。」よし、申させ給へば、太子これまで思ひ立つかひもなく、歸るべき事はあるべからず、命あらむかぎりは尋ねて見むと、御涙を流させ給へば、僧も袖を濡らし給ふ。其の時僧宣ふ様、「其れ程に思召す事ならば是より西に向はせ給ひ、九月おはして御覽じ、犬二三匹腰に付けたる人に逢ひ給はむ。これ迄は誰か教へて入らせ給ふと問はせ給はば、娑婆世界にては、一切衆生を孝養菩薩、又長庚星とも申す僧の教へと宣へ。」と仰せければ、教への如く九月行きて御覽するに、犬一二匹腰に付けたる僧、清けにて見えさせ給ふ。太子馬より下りさせ給ひ、「物申さむ。」と宣へば、僧、「何事ぞ。」と答へたまふ。太子、「娑婆世界にて契りし女人淨梵王の使と申す所

○予もはかなき事云云 明らかに牽牛星が自分の身の上を語つて居るのである。

○三百由旬 一由旬は帝王一日行軍の里程で、或は四十里、或は三十里と云つて居る。

○右近の橋左近の櫻 宮城内紫宸殿の階下、左右に櫻と橘とがある。櫻は左近衛府、橘は右近衛府が擔任して培養するので此の名稱がある。

に生れたるよし、夢に告げ侍る、彼の所へ尋ね行くなり、教へてたび候へ。」と宣へば、「昔より今に此の道は有漏の身ながら通る事無し、不思議にぞ覺えたる、さやうの所傳へ承り候へども委しくは知り參らせず、哀れなる事哉。予もはかなき事に化されて、年に一夜の契りを頼み待ち兼ねたる歎きに思ひ知られて、痛はしくこそ候へ。」とて教へ給ふ。「是より西におはして、大きな川あり、其の川の早き事限りなし。かの所へ三年して行き著く道なり、川の廣きは三百由旬なり、如何にしても渡るべき様更に無し、其の川の邊りに、右近の橋、左近の櫻とて木あり、其所に幼き男子一人女子一人を左右に置き、愛し居たる女人あるべし、問はせ給へ、是までは誰が教へて入らせ給ふと問ひ給はば、彦星の教へぞと仰せ候へ。」と、太子に向ひ申させ給へば、嬉しく思召し、駒に乗らせ給ひ、三年の途を三十日の間に著き給ひて御覽すれば、大きな川あり、更に渡るべき様なし、然らばとて歸るべきにもあらずとて、霞の鞭を當て給へば、向ひの岸に程無くつき給ふ。教への如く二人の愛人を愛したる女人有り。美しく見えけり。太子馬より下りさせ給ひ、「黄金の筒井といふ所や知らせ給へ。」と申させ給へば、女人宣ふ様、「いかなる人の教へにてこれまで渡り給ふ。」と問はせ給へば、「彦星の教へにて侍るなり。」實に然る事有り。來る秋毎の言葉

を契り、いつとなく心細き住居にて、愛者共慰むる事も侍らず、不思議の音信を承り候。』  
 とて笑はせ給へば、太子申させ給ひけるは、「娑婆にて假初の契りを結びたる女人に引かさ  
 れて、尋ぬる心の苦しさを哀れと思召せ、哀れさやうの所を教へて給ひおはしませ。」と宣  
 へば、「左様の所有りとは承りて候へども、委しき事は知り候はず、是より西に向ひて、三  
 年途をおはして、僧の愛でたきに逢はせ給はむに問ひ給へ、如何なる人の教へと此の間に脱  
 文あるかおほせられよ。」とありければ、太子御涙を流し給ひて、かくぞ、  
 あさましやいかゞ迷へる道なればいづく限りにたづねゆくべき  
 いと哀れけに宣へば、女房もかくぞよみ給ふ。

今更になにをなけくぞうき事を斯かる道とはかねて知らずや  
 とて、「如何にもして、平らかに坐せ。」とて、御涙を流させ給ひけり。太子御名残惜しま  
 せ給ひけり。さて馬に召して三年の道を行き過ぎて御覽するに、ゆゝしけなる僧七八人あ  
 ひ奉り、太子馬より下りさせ給ひて、「斯くの如くの所や知らせ給ふ。」と問はせ給へば、僧  
 大いに驚き給ひて宣ひけるは、「昔よりこの道は有漏の身ながら行く事更になし、怪しくも  
 侍るものかな。」と宣へば、太子、「然るべく候はば、彼の處教へて給ひ候へ、知らぬ道をた

○いづく限りにたづ  
 ねゆくべき 何處を  
 はてして尋ね行く  
 べきであらう。  
 ○平らかに坐せ 無  
 事にお行きなさい。  
 ○ゆゝしけなる僧  
 立派な坊主。

○そこはかきもなき  
 山 されどあてもな  
 い山。  
 ○香染 丁子で染め  
 た淡紅に黄を帯びた  
 色。

○七曜の星 支那の  
 天文説で、日月と火  
 水、木、金、土の五  
 星を併せ稱する。  
 ○龍 今までは金龍  
 駒であつたが、いつ  
 の間にか、龍になつ  
 たのである、龍馬な  
 ど云つて關係深く  
 考へられるからであ  
 らう。

○又それを四十九日  
 云々 以下に脱文が  
 あるらしい。  
 ○焦熱大焦熱 八大  
 地獄の第七を極熱地  
 獄と云ふ。別名が焦  
 熱大焦熱である、或  
 は第六の説もある  
 ○南無能滿諸願大悲  
 虚空藏菩薩 願くは  
 我を救ひ、諸願をよ  
 く満たしめ給へ、悪  
 み深き虚空藏菩薩よ

どりのゆく事、露の命も惜しからず。」とて、御涙を流し給へば、僧御覽じて、「哀れなる事に  
 て侍るぞ、これより三十三年おはして、猶空へおはしまして、そこはかともなき山の中を  
 三七日おはしまし候はむするに、黄金の足駄はき黄金の杖を突き、香染の袈裟を掛け、衣  
 著給へる僧に逢ひ給はむに、此の僧彼の處をよく知り給へる、問ひ給へ。たれが教しへぞ  
 と問はば、七曜の星のをしへにて候と申させ給へ。」と仰せければ、太子御涙を流し給ひ、  
 「はかなかりける契りかな。」とてかくなむ、

しらぬ道に思ひ入りけむかなしさは戀路ならずは誰かゆくべき

と宣ひて、今更歸るべきにもあらずとて、龍に打乗り三年にゆく道を十三年に行き著き給  
 ひければ、須彌山の如くなる山有り。火の山とて炎燃え焦がる、事隙なし、「又それを四十  
 九日おはして、この山を南に御覽じて、焦熱大焦熱のしくを西へ行き給ふべし、其れを過  
 ぎて長夜の闇とて、此の道こそ一切衆生の魂迷ひあるき候なり。罪深き者は後悔悲しび合  
 へり。此の苦しびは大焦熱の苦しびに劣らずして、後も前も知らず候へば、痛はしくこそ  
 候へ。但し太子は妄念の罪をば受けさせ給へども、大焦熱の苦しびは受け給はず、罪ふか  
 き者を思召し遣らせ給へ。彼の道をおはしたまはむ時は、南無能滿諸願大悲虚空藏菩薩と

○隨身 護衛の兵。

○明星星 金星で長庚星と同じものであるのを、別物と考へたのだ。

○長夜の闇 人生の迷ひに満てる事を長夜の闇に喩へたのである。

念じ給へ、光を放ち参らせむ。光についておはしませ。これを行き過ぎ給ひ、竹の林あるべし、其の内を十三日おはしまして、ゆゝしくいつくしきなり。後の三里許りおはして御覽候へ、隨身二千人許り棚引いて、銀の輿に召されておはします人に、逢ひ給ひて問はせ給へ、これまでは如何なる人の教へにておはしますぞと問はせ給はば、娑婆にて一切衆生を照らし給ふ明星星、又冥途にては虚空藏菩薩と申す僧の教へと仰せ候へ。」と宣へば、太子、「細かに御教へ候へば、遙かの道に迷ひしも晴るゝ心地して、嬉しくこそ候へ、返す返す導きおはしませ。」とて、馬に打乗り給ひけり。さて錐の林、劔の山を過ぎ給ひて、長夜の闇を過ぎ給ふ。其の山暗き事限りなし。罪深き者の迷ふ事心中推し量るべし。其の時教への如く南無能滿諸願大悲虚空藏菩薩と唱へ給へば、光を放ち太子を照らし給ふ。太子うれしく思召し、されども行末心細くて、かくなむ、

我がこひは夢の夢路にまよふかな晴るゝ夜もなき心地こそすれ

さても乗り給へる龍堪へかねて臥しぬ。其の時太子御涙を流し給ひ、「いかにや汝畜生なりといふとも、我此の道に迷ふべき由を、世に嬉しけにて在りしにより思ひ立ちぬる、自らを何と成れと思ふぞ、假令堪へ難くとも、これまで來つるに、殊に長夜の闇にすて置くべきか。」とて、紅の涙を流し給ふ。龍も黄なる涙をぞ流しける。其の時、龍、物を申しける、「誠に御痛はしく候へば、送り著け参らせむと思ひ参らせ候へども、龍は三年畜はねば息止まる習ひなり、腹筋切れて息止まる。」とて、世に苦しけにて見えければ、太子右の御袖を押し切りて口に含め給へば、口にくゝみたるを御覽じて、嬉しく思召して、かくなむ、

さりともと頼む心のつよければこひこそ人の命なりけれ

さて又太子龍に乗り給へば、飛びてゆくを哀れに思召して、かくなむ、

心なきけだものまでも戀路には哀れをそへてたよりとぞなる

太子常に南無阿彌陀佛と申させ給へり。又南無能滿諸願大悲虚空藏菩薩と念じ給へば、光を放ち給へり。さしも闇暗なれども、日の光の如く照らし給へば、太子嬉しく思召して漸う行き給へば、白濱の原に出でさせ給ひ、此の道を十日おはしまして御覽ぜよ、美しき小松三里ばかりおはして、涼しき風ふきていと面白くおはしければ、隨身千人ばかりたなびきて、白銀の車に乗らせ給へる人に逢ひ給へる。太子馬より下り給ひて申させ給ふやう、

「大梵王宮の御許に黄金の筒井と申す所や知らせ給へる。」と問はせ給へば、白銀のくはまの籠を揚げさせておはする御姿を御覽すれば、冠直衣の御姿美はしく、愛でたき上臈の、

○三年畜はねば 三年食を與へないぞ。

○さりともと頼む心のつよければ ひよつとしたら逢へるであらうと頼みにする戀の心が強いから。

○くはまの籠 未詳 籠脱字があらう。

○上臈 貴婦人。

○まめやかに 此の草子では誠にこの意に用ゐてあるやうだ。

○月光菩薩 藥師如来二脇土の一、左手に蓮華の上に月形あるを持つ。月光王とも稱する。

○南無歸命頂禮 南無歸命は、信心の至極を表現する佛語。又頂禮は神佛の足を自分の頂上に戴いて禮拜する意。歸命は精神的禮拜、頂禮は肉體的禮拜。

○勢至菩薩 阿彌陀三尊の一。阿彌陀如来の右脇に侍し、佛の智門を掌る。

○便なき申し事 失禮な申し事。便なきは不都合な。

○はかなき縁 たよりのない縁。

○いつを限りの逢瀬 とも知らず 何時になれ逢へるといふ時機もはつきりわかつてゐない。

○耶須多羅女 耶輸陀羅の事。悉達太子の夫人、羅睺羅の母

日光菩薩 日天子  
或は寶光天子とも云ふ。觀世音菩薩の變化身で、太陽の中に住む。

車より下りさせ給ひて仰せけるは、「これまで尋ね來り給ふは、まめやかに不思議にこそ候へ。」と仰せければ、太子、「暫しの縁に結ほれて候ひし女人故に、これまで迷ひ候なり。」とて、御涙を流させたまへば、「誠に痛はしく見え奉るなり。自らも委しき事は知らねども、これより西に向ひて、四五日おはしませ、白濱の様に霞かけて日の光も長閑にて、いと懐しく風吹きて、山の景色、木々の景色も面白き所を、七里許りおはしたる時、大臣公卿を三千人たなびき、黄金の車に乗り給ふ、やんごとなきに逢ひ給はば、御尋ね候へ、彼の所へ常に行き通ふ人なり。問ひ給へ、是れまではいかなる人の教へ給ふぞと問はせ給はば、娑婆世界を照らし給ふ月光菩薩の教へにて候、冥途にては太子菩薩と仰せ候へ。彼の渺々とある所をそこはかとも無く迷はせ給はば、南無歸命頂禮天子本地太子菩薩の御上に差し參らせむ。」と仰せければ、太子嬉しく思召して、御馬に打乗りて西をさしてゆき給ふ。御教への如く白濱の如く霞掛けてそこはかともなく、地は水精の如くにて、行く道も覺えさせ給はず。其の時歸命頂禮月光天子、菩薩天子本地勢至菩薩と念せられければ、西と思しき所より黄なる日、光を太子の御上に差しまるらせ給ふ。これを案内にておはしければ、公卿三千人ばかり引具して、黄金の車に乗りたる人に逢ひたり。太子馬より下りさせたま

ひ、「便なき申し事にて候へども、娑婆にて契りし人大梵王宮黄金の筒井と申す所に生れたると、夢に告げ侍るなり。尋ね行くなり、願はくは大慈悲の御志を以て教へさせ給へ。」車の簾打揚げて下りさせ給ひて宣ふやう、「實に怪しく有り難くこそ候へ、有漏の身是れまでは不思議にこそおはしましたれ、御身尋ね給ふ所は自らも委しく知らず。」と宣へば、太子の宣ふ様は、「はかなき縁に引かれ、いつを限りの逢瀬とも知らず、心苦しき。」とて御涙を流させ給ふ。「昔釋尊は凡夫の時、耶須多羅女を捨てさせ給ひてこそ、凡夫の繼をば一大事と思召せ、されども釋尊は衆生利益せむがために、方便に世に出でさせたまへり。太子は未だ凡夫の御身にてましませば、いかに悲しく思召すらむと、御心の内御痛はしくこそ候へ。是より西に向ひて行き給はむ時、世に熱き風吹きて、冥宮の焰の燃え焦がる、を見るに心も消えぬべし。又大なる川あり、渡るべき様更に無し。向ひの岸に木三本有り、下にはたけ拾六丈の姫鬼あり。此方の岸には僧一人おはします。此の僧一人に逢ひ給へ。いかなる人の教へぞと問はせ給はば、娑婆にては日光菩薩とて、一切衆生の願ひを満て給ふ、大慈大悲の觀世音の教へと仰せ候へ。其の僧は尋ね給ふ所よく知り給へり。道にて心細く思召さば、其の時歸命頂禮日天々と唱へ給ひて、過ぎさせ給ふべし。」と、太子に委しく教

○めうくわつ 猛火聚の訛。みやうくわじゆ。猛火の聚團、多淫の人が成ると云ふ。

○申すも便無く候へども 申上げるのも不都合な事でありますが。

へたまふ。嬉しき限りなし。又龍に打乗りて、七八里もおはしますらむと思召す時、熱き風吹きて、めうくわつの焰燃え焦がる、を御覽じて、太子歸命頂禮日天々と唱へ給ひて過ぎ給へり。又大いなる川あり。近く打寄り見給へば、廣さ一萬由旬、浪は焰にて浪の間にば毒蛇羣りて、或は人を呑み人を捕へけり。渡るべき様もなし。川の端に二十二三許りなる僧、香染の袈裟にて錫杖を杖に突き給へり。まことに美しくおはしけり。太子馬より下りさせ給ひて、「物申さむ。」と宣へば、僧、「何事ぞ。」と問ひ給ふ。「大梵王宮の黄金の筒井と申す所を知り給へるか。」と申し給へば、僧、「いかなる人なれば、有漏の身ながら此の道にはおはしましけるぞや。」太子、「申すも便無く候へども、袈裟にて唯假初の契りを結びし女人を尋ねて是れまで來り候。是れより歸るべきにも非ず。」とて、御涙を流させ給へば、僧も哀れと思召し、御涙をぞ流させ給ふ。川を渡らむとし給ふとて、かくぞ詠み給ふ。  
いざさらば有漏のこの身をすて果てむ後はまよはぬ道もありやと  
われ有漏の身にてかなはずば、生を替へても逢ひやせむと、川へ身を投げむと思召しければ、御僧かく詠み給ふぞ有り難き。  
有漏の身をすても今はなにかせむ心かはらでにしへゆくべし

○十惡 殺生、偷盜邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見。  
○五逆 種類があるが、普通稱するものは、俱舍論ので、一者害母、二者害父、三者害阿羅漢、四者破和合僧、五者惡心出佛身血。  
○四生 衆生の生れる形式の四種、胎生、濕生、卵生、化生。  
○紅蓮大紅蓮 八寒地獄の第八を紅蓮大紅蓮と稱する。寒氣のため皮肉分裂し紅蓮華のやうになるからである。  
○善根 善い果を得べき所業。

と仰せありて、「教への如くおはしまし、深く頼み給はば、などか三世の諸佛も護り給はずらむ、またかひなくしからずとも、この法師を頼み給はば、われ昔願を立て、十惡五逆の罪作らむ衆生を導かむと思ふなり、釋迦如來三界の衆生の苦に逢はむも、一人も惡所に落すべからずと承り候ひしにより、此のかた地獄にすみはべり。又六道四生におもむくはじめ、此の川の端にて定まり候なり。この故に自ら川の端を去らずして、一切衆生を救ふなり。罪ふかき罪人は獄卒も媚び賺す。餘りに重き罪人は苦に代り候なり。焰に燃え焦がる、者は、人に無きこと云ひ付けて歎かせし者なり。毒蛇に吞まる、者は、袈裟にて欲心に執して、人の物を多くして取り、我が物をば惜しみ、或は男女に心を懸け、妄執深くある故に、身の内より炎燃え出で歎き候人なり。又鐵の觜ある鳥に突かれ候は、好き物をば我が飲み喰ひ、人には惜しみたる故なり。紅蓮大紅蓮の水に閉ぢられて歎くなり。或は人の著たる物を剥ぎ取り、海、川の魚くづを捕りてよを渡り、佛法など耳に觸る、事もなく過ぐる人なり。彼に橋三ツあり、黄金の橋は上品往生の人の渡るなり、又銅の橋は善根を爲るに未遂けぬ人渡るなり、太子の迷ひ給ふ故なり。さりながら大梵王宮を尋ねておはします人ならば、此の川を渡らせ給ふべきこそ痛はしく。」と宣へば、太子仰せには、「假令



○惡魔眞金剛智即  
惡魔に逢つても堅利  
なる事金剛の如き佛  
智を以て當るの意。  
○地藏菩薩 無佛世  
界で六道の衆生を救  
化する大悲の菩薩。  
○慳貪邪見 物を惜  
しんで人に與へず食  
つて飽きず、慈悲な  
く慘酷に人を扱ふ事  
○乾の方 西北。  
○西南方二佛 西方  
安樂世界を支配する  
無量壽佛(阿彌陀如  
來)南方歡喜世界を  
支配する寶相佛(寶  
生如來)  
○ゆゝしき道 大變  
な道。  
○ゆめく 決して  
決して。

この川にて命を失ひ候とも、歸るべきにもあらず、願はくば御僧助けて給ひおはしませ。」  
とありければ、答へ宣ふは、「御心に念じ給はむ事は、惡魔眞金剛智即と呪して、御心を剛  
く持たせ給ひて渡らせ給へ。川の彼方の岸に坐して、南無地藏菩薩と唱へて向はせたま  
へ。又一由旬の木三本あり、下に長十六丈ばかりの鬼神あり。頭は赤く毛は空へ生えて、  
眉毛は三十丈ばかり生ひ下りて、齒は上下へ生ひ違ひ、頬は鐵の如くにて眼大にして目を  
出せり。恐ろしさ限りなし。罪人の衣を剥ぎとりて、かの木の枝に掛くるなり。かの鬼神  
は罪人の煩惱の衣厚きがゆるゑに剥ぎとるなり。鬼神は昔の業因なり、人のため吉きことを  
猜み妬み、凶しきことを喜び、病有る人を憐まず、慳貪邪見なりし者なり。思ひ知るべき  
事なり。かの三本の木のもとを乾の方に御覽じておはしませ候はば、此の鬼神これへく  
と招くとも、南無地藏菩薩と御唱へ候て、西に向ひて三日おはしまして、ゆゝしき所へお  
はしましたらむに、六ツの道有りて、何れとも辨へ難くあらむ時、西南方二佛と念じて、  
猶ほ西に向ひておはしませば、南に向きてゆゝしき道の候はむするを御覽じられ給はば、  
誠に世界も廣く清けに見えて、美しき尼女房多くありて、これこそ愛でたき所にて候とて  
招き候とも、ゆめく渡らせたまふべからず。造作五逆罪などと念じ給ひ候て坐せ。

○巽の方 東南方。  
○蹈みしだき 蹈み  
にじり。  
○魔狀 魔縁。人を  
惑亂し佛道に入る障  
碍をなす惡魔。  
○光明遍照 佛の智  
慧の遍く十方世界を  
照す意。  
○橋慢地獄 自ら高  
ぶり他を凌ぐ心を地  
獄に喻へた。  
○未申の方 西南。  
○八萬地獄 八萬四  
千地獄の畧、多くの  
地獄。  
○丑寅 辰。東北。  
○腫にも はつきり  
せず。  
○憎くとも 氣がふ  
さいでも。

「この女房尼は皆恐ろしき人なり。又巽の方にゆゝしき世界あり。皆白銀黄金の家を作り  
竝べ、九重の塔を建て七寶修營の堂もあり。菩薩聖衆舞ひ遊び黄金の塔を建てたる内より  
美しき女房の紅の袴を蹈みしだき、扇さし翳して、いかにや往生人ならば、これへ參ら  
せ給へ、一切衆生の願ふ所なりとて招き奉らむに、ゆめく坐すべからず。佛と覺しき  
光は右に光を放ち給ふ。魔狀の光は左に周り、光の色も黄に見え候。極樂も斯くやと覺え  
候なり。光明遍照と唱へさせ給ひて通らせ給ふべし。此の世界は橋慢地獄と申すなり。  
未申の方へ向きて、いみじく作り廣けたる道あり。門の内には内裏などの様に美しく作り  
廣けたる、ゆゝしき女房殿上人など集まりて、紅の扇差して、これへくと招き奉る  
べし。これこそ八萬地獄の初めに候へとて、即得往生と念じ給ひて、過ぎさせたまへ。  
又丑寅の方に當り、恐ろしく草生ひ茂り、腫にも人の蹈みたりとも見えぬ道、憎くとも此  
の道をおはしませ。美しき白濱へ出でて御覽せむに、白銀の地を蹈み給ひて、一日ばかり  
おはしますと思召さむ時、やうく涼しき風吹き、紫の林、紅の林あるべし。それを過ぎ  
ては異香薫じ、色々の花咲き亂れて宮殿樓閣玉を瑩きけり。或は伎樂歌唱の所もあり、或  
は座禪説法の床もあり、何れもめでたき所なり。これを過ぎさせたまひて、遙かに空へ上

○兜卒の内殿 天の名。兜卒天、二つに分れ、天處内處云ふ、その内處即ち内殿は彌勒菩薩の淨土天處即ち外院は天衆の欲樂處。

○聖衆 多くの佛達  
○弘誓の舟 衆生を弘く救はん誓はれた舟。佛の慈悲の象徴。

○十方 天地四方  
○左右なく 容易く

り給ひて御覽ぜむに、それは兜卒の内殿と申す所へ参らせたまふべし。菩薩聖衆の法の如くに連なりて、空には音楽を奏し、植木の下には鳥鴈鴛鴦の囀る聲皆法音なり。池の邊には色々聖衆舞ひ遊び、弘誓の舟を浮べ調へ、面白しとも尊きとも中々申すも限りなし。これをも過ぎ給ひて、猶空へ昇らせたまひて御覽せば、黄金の門あるべし、その邊に龍をば繋がせ給ひて、扉押開きて御覽ぜよ、柀檀の木あるべし、其の木の下にこそ黄金の筒井あるべし、其の上の梅檀の木に上らせ給ひて、かの女房を待ち給へ。」と、さまざま細やかに教へたまふ。太子嬉しく思召し暇申したまひ、龍に乗り、南無十方三世の諸佛と念じ給ひて、川にうちいり給ふ。渡らせ給へば、左右なく向ひの岸に著き給ふ。地藏菩薩をしへさせ給ふ如く、鐵の木三本有り、下に十丈許りの鬼神あり。彼を乾の方へ御覽じて、過ぎさせ給へば、かの鬼神此方へ入らせ給へと招きけれども、南無大悲地藏菩薩と念じ煩ひなく過ぎさせたまふ。西に向きて三日許り坐して、御覽すれば、ゆゝしき作り道六ツあり、西南方二佛と唱へて過ぎさせ給ふ。又南の方にゆゝしき世界あり、美しき女房集まり此方へと招きければ、太子五逆災難念じて過ぎさせ給ふ。又巽の方にゆゝしき世界あり、て、白銀黄金の内裏を造りたり。人の姿を見れば、菩薩聖衆もかくやと覺えたり。美しき

○往生人 死せし人

○無間地獄 八熱地獄の一。阿鼻旨とも云ふ。五逆罪の一を犯した者が此の地獄に墮し、一劫の間苦を受くること、間が無いからかく名づけた。

○ちようくわ 朝霞

女房 紅の袴を踏みしだき申すやう、「これこそ一切衆生の願ふ所にて候へ、入らせ給へ。」と招きけり。太子これは地藏菩薩の教へ給ひし憍慢地獄と覺え、光明遍照と唱へて過ぎさせたまふ。又坤の方には、婆娑にて内裏のごとくに美しく造り廣けたる宮の邊に、法師なんどは數多見えたり。道は青く美しく、門の左右には、若き殿上人女房あまた並みたり。「往生人ならば是れへ参らせ給へ。これこそ極樂淨土にて候へ。」三途の川の端にて墨染の衣きて、何とも知らぬ修行者法師の筋とも無き道を教へ給ひて、「其方へ入らせ給ふは無間地獄へ赴く道にはや入らせ給へ。」とて、請じけれども、太子は即得往生と唱へ過ぎさせ給ふ。太子思召すやうは、地藏菩薩の教へたまひし地獄なり。御教へなくばかの所へ行かむことよと思召し、八萬地獄の口なりとて、急ぎ過ぎたまふ。又巽の方に向きておはしませば、草深く膾氣にも、人の蹈みたりとも見えず。地藏菩薩の教へ給ひしまゝに、愷候へども、叢を分け入りたまふ。三日許りおはしまして御覽すれば、美しき白濱あり。それを御覽すればいと涼しき風吹きて、小松生ひ並びたり。地を見れば金銀瑠璃にして、御影も映るほどなり。心すみて嬉しく思召して、次第におはしますほどに、紫の林、紅の林を過ぎたまへば、赤椿の林にもなりぬれば、異香薫じて光を交へ、宮殿樓閣ちようく

びしやもんの本地

○天蓋幡 佛像棺などにかけずかさど、裝飾したはた。幡扉  
 ○人定 禪定に入る意。心を一處に定め身口意の三業を止息すること。  
 ○供養 こゝでは極樂の人々の互に慰め合ふ事を云つたのだ  
 ○さて有るべき事ならねは、そのまゝで居るべき事でないから。

わに見えて、或は伎樂をなし、或は説法衆會の所もあり。池の中に蓮花咲き亂れ、尊しとも中々申す許りなし。めしたる駒の足音も、所から御法の聲にぞ聞えける。かやうの所を御覽すれば、御心の止まる事限りなし。さて有るべき事ならねば過ぎさせ給ふ。猶空へ昇り給ひて御覽すれば、大なる門あり金銀瑠璃なり。「之は兜卒の内院なり。」とぞ仰せける。委しく御覽すれば、七寶の塔を立て竝べ、天蓋幡は天に翻り、宮殿樓閣重々にして菩薩聖衆かすをしらず、植木の下には鳧、鴛鴦、迦陵頻といふ鳥囀づる聲皆法の聲なり。池の中に蓮花咲き亂れて勻ひを交へ、弘誓の船に棹さして、天人、聖衆、法師の如くに列なり、天の樂を奏し舞ひ遊びたまひ、或は法音の降る場もあり、或は座禪入定の床もあり、或は始めて往生する人の互に供養をなし、娑婆にて憂かりしことを語り合ふ者もあり、潔き風吹きて勻ひ満ちたり。太子これを御覽すれば御心とまりて、哀れ姫宮を尋ねぬ身ならば、斯様の貴き所に有らまほしくて、暫く御心を止めておはしませども、さて有るべき事ならねば、爰をも過ぎさせ給ひ、姫宮を尋ねずば、斯かる有り難き所をいかでか見むと思召して、また猶空へ昇り給ふ。やうく近づき見給へば、白銀、黄金の築地をつき、黄金の門を立てたり。即て門をば此の間落門に立て給ひて、内へいりて御覽すれば、實に

○此の頃 日頃。

○妄念 あやまつた心、妄執の念。

○夢の夢路 夢の中の又夢で、はかなさを喻へたのだ。

○現に見奉る 夢ではない正氣で逢ひ奉る。

黄金の筒井あり。其の井の許に赤梅檀の木あり、高さ一由旬あり。高く聳え上りて更に上る様もなし。されども太子は上らせ給ひ、井の許を下し姫宮の渡らせ給ふやと、久しく待たせ給へば、や、久しくありて、此の頃戀ひ悲しびて尋ね給ふ姫宮と思しが、黄金の花籠に黄金の花を摘みて持たせ給ひて、おはしますを御覽すれば、娑婆にて御覽じ給ふより猶美しく光指し添ふ心地して、玉の簪、玉の篋り鮮かにして、筒井の許に臨みて花をすすがむとて、水を掬ひ上げむとし給ふに、池水にうつり、昔契りし太子の御面影見えければ、姫宮不思議に思召し、「我已に大梵王宮に生れながら、猶も妄念の心にや、昔契りし人の見えけるぞや、恥かし。」などと獨りいひ給ひて、かくぞ詠じ給ふ。

むかし見し夢の夢路に見し人の筒井の水にうつるはかなさ

と宣ひて、梅檀の木を見上げさせ給へば、太子と御目を合はせ給ひ、「こはいかに夢かや、昔の人の此の井に映る不思議やと思ひしに、現に見奉る事不思議さよ。」とて、御涙せきあへ給はず。太子は木より下りさせ給ひて、有りし御事ども語り給ふ。姫宮仰せけるは、一太子有漏の身ながら、何にとて是れまでは坐し候ぞ。御志の有り難さよ。」とて御涙許りなり。太子摩耶國の事、瞿婁國へ参り大王に對面申して姫宮の隠れ給ふを歎き給ひし事

○花香 佛へさぐる花と香料。

○腫け人 意思のしつかりしない人。いい加減な心の人。

○理も知らず 理由もよく知らず。

○幾久しく存ふべき 身なれども 長壽すべき私であるが。

夢の告げありて御心を盡し給ひし事様々語り給ひ、姫宮御側ま近く寄り給へば、姫宮仰せけるは、「自らに近くは寄り給ふべからず、昔こそ迷ひの凡夫にて候へ、今は大梵王宮とて有り難き所に生れて候へば、朝夕花香を供へ奉る身にて候へば、只今も此の花灌ぎて参らせむとて是れまで参り候へばこそ、逢ひ参らせて候。自らは天の飛行と申す物を持ちたり、太子は未だ有漏の御身なり。暫く御待ち候へ、天人達選び候はば、是れより歸らせ給ふべし。」と仰せければ、太子御恨みの涙を流し給ふ。仰せには、「哀れ人の爲まじきものは戀なり。此の道と申すは、腫け人の通るべき道にても侍らず。われ不思議に諸天諸佛の御憐みにより、煩ひなく此の道を尋ね参り逢ひ奉るかひもなく、如何なる天人なりとも、などか憐みを懸げざらむ、是れ程の御心を中々恨みても何かせむ。」とて、御袖を絞り給ふ事限りなし。「いかにもして本の道へ歸りなむ。」と宣へば、其の時姫宮宣ふ様、「理も知らず恨み給ふぞや、自らは太子に猶増りて思ひ奉りしなり。太子は猶も摩耶國にて、千人の后にも慰みておはししが、自らは太子を待ち侘び歎きし事たとへなし、幾久しく存ふべき身なれども、纒か十五六になる世を空しくなり、親にも物を思はせ、心を盡し参らせしも、誰が故ぞや、自ら不思議に縁ありて、大梵王宮に生れて候へども、猶煩惱の紐や強かりけむ、

○乏しき事 不自由な事。

○褻ぎ 水注ぎて身を清める事。

○相好 人相。容貌

○深き契り 深い因縁。

女人の身を變へずして生る、こそ悲しけれ。苦しき事も無く乏しき事候はねども、女と云はれ候なり。君は暫し待たせ坐せ、大梵王に参りて此の由申すべし。」とて、黄金の空殿に参らせ給ひぬ。太子姫宮宣ふも誠に道理と思召して、彌御涙堰きあへ給はず。さても姫宮は大梵王に参り申し給ふやう、「婆婆にて契りし維曼國の金色太子、是れまで尋ね來り候。」有りし事ども細やかに語り申させ給へば、大梵王も委しく聞召して哀れと思召し、「昔より戀する人多しと雖も、有漏の身ながら是れまで尋ね來たる人を歸すべきにもあらず、黄金の筒井の水にて身を褻ぎ、天の羽衣を着せて具してまるれ。」と宣へば、姫宮大きに喜び、此の由申させ給へば、太子嬉しく有り難く思召して、黄金の筒井の水を浴び、天の羽衣召し給ひ御覽すれば、大梵王は實に相好氣高く坐し、玉の冠鮮かにして、黄金の床の上に御座を敷きて坐し給へり。太子は床より下の座におはしませば、床の上へ引きあげ給ひ、太子をつくくと御覽じて、慈悲の御眼より御涙を流し給ひて、「如何なる人にていらせ給ふぞ。」と問はせ給へば、「我は維曼國の者なり。姫宮故に是れまで尋ね参りたり。」と申させ給へば、大梵王宣ふ様、「姫宮は元より此の國の人なり、假に人間に生れたり、如寶珠とは此の人の事なり。太子に深き契り有りて、辱くもこの許に生れながら、又逢ふ事

○太子に心ざし深き故に 太子を思ふ心が深いために。  
 ○吉祥天女 功德天とも云ふ、本來娑羅門の神であつたのを佛教にまじり入れた。父は徳叉迦、母は鬼子母神、或は毘沙門の後妃と云ひ傳へて居る。  
 ○四王天 六欲天の第一、四天王の住む所であるから、かく名づける。須彌山の半腹に在つて、天の最初。  
 ○普賢菩薩 一切衆生の理定行の三徳を掌り、白象に乗つて釋迦如來の右方に侍する佛。  
 ○楊柳觀音 三十三觀音の一、楊柳を以て三昧耶形となし、柔順を象徴して居る佛。  
 を得たり。女人の身を改めて菩薩の位に昇るべき人なれども、太子に心ざし深き故に、未だ天女の位にておはします。太子は未だ有漏の御身なれば、是れにおはしまし候べきにあらず、これより東に福德山といふ山あり、何事も是に劣らず樂しみ榮えたる所なり。其の山へ坐して毘沙門天王と顯はれ給ひて、一切衆生を導き給へ。姫宮は吉祥天女と顯はれ給ひて、毘沙門の傍におはしまして、絶えぬ契りを結び給へ。毘沙門天女と顯はれて、萬の人の福を願はむとき、此の箱の蓋をあげ給ふべし。」とて、三つある箱の中に、少し小さきを取り出し、太子に奉りたまふ。姫宮には飛行の玉を奉りたまふ。「一切衆生の願はむ時は是れを蒔き給へ。」と仰せければ、姫宮も太子も喜び給ふ事限りなし。さて福德山におはしまして御覽すれば、白銀黄金を鏤めて木立美しく、宮殿樓閣重々にして、十方淨土も斯くやと覺えてめでたかりけり。さてこの山の主に成り給ひて、毘沙門天王と顯はれ給ふ。姫宮は吉祥天女と顯はれ給ひ、一切衆生の人の願ひを満て給へり。四王天の丑寅の方に、毘沙門天王とは此の事なり。さて太子の父大王は、三百五十歳を保ち給ひて、普賢菩薩と顯はれ給ふ。瞿婁國の大王は五百歳を保ちて、惡魔降伏と顯はれ給ふ。母后は楊柳觀音と顯はれ給ふ。摩耶國の大王は三百歳を保ちて、勢至菩薩と顯はれ給ふ。太子摩耶國にての

千人の後は、みな星の如く顯はれ給ふ。何れもたゞ人にておはしませず、斯かる貴き菩薩と顯はれ給ふ。一切衆生の佛と顯はれ給ひ、凡夫を救はむ爲なり。有り難きとも中々申すは愚かなり。これを見む人々は、皆三寶を敬ひ父母に心ざしを盡し、君に仕へむ者は、忠節を爲し、我より下の者には慈悲を爲し、情無き事を振舞ふべからず。殊に慈悲有りてこの毘沙門を信ぜむ人は、現世にては福德を爲し、後の世にては必ずく佛道に生れ仕ふべし。何ぞ世の中の仇なるに報いむや。この冊子見終らむ人は、毘沙門の眞言におんへいらまんなやそわかと、三返南無吉祥天女と唱へ給ふべし。

○仇なるに はか  
 いのに。  
 ○おんへいらま  
 なや 未詳。呪文の  
 句。

貴船の本地

○寛平法皇 宇多帝  
 ○御覺えも畏く 御  
 寵愛深く。  
 ○宣旨 教旨をのべ  
 傳ふること。こゝで  
 は單に仰せのある事  
 ○てう 蝶か、美人  
 を蝶に喩へたのか、  
 誤脱字があるのであ  
 らう。  
 ○夫妻 こゝでは單  
 に良人。  
 ○いけ 以外。  
 ○籠りの日見す 物  
 忌にこもつた日は人  
 に逢はずの意であら  
 う。そんな日でも姫  
 達には逢ふ意。  
 ○みめ 眉目、容貌  
 の意。  
 ○山木の相 山木は  
 心のまゝに高くのび  
 るから、かく云ふ。

中頃都に天子おはしけり。御名をば寛平法皇とぞ申しける。其のころ大臣一人おはしま  
 す。宇治の大臣とぞ申しける。御子をば本院の中將定平とぞ申しける。帝の御覺えも畏く  
 て、殿上にて肩を並ぶる人も無し、朝夕御前を離れずしてぞおはしける。法皇御感の餘り  
 にや、中將に宣旨なりけるやう、いかに定平承れ、何といふとも汝の榮花には、みめよき  
 てうに近付きてたはふれたるにしかじ。都の中にみめよからむ人有らば、假令夫妻有りと  
 いふとも、汝に許す。」と宣旨なる。中將いけの公達方、籠りの日見すなどといふとも、姫  
 君達よきと聞くをば迎へ取りて御覽じけるに、されども御氣に合ふ人無かりけり。迎へて  
 は送り迎へては送り、三年が中にはその姫君數を知らず迎へ送り給ふ。されば唯も遣り給  
 はず、一々難をぞつけられける。髪長のきを蛇身の相、餘りに短かきは鬼神の相、色の黒  
 きは牛の相、餘り白きは臆めたる相、みめは好けれど心無し、心あれどみめ悪し、脊の高  
 きは山木の相、餘り少さきは貧相なりと、宣ひてこそ送られけれ。されば都の中には心に

○扇合 遊戯の一種  
 左右に別れ、互に意  
 匠をこらした扇を出  
 し、判者その優劣を  
 定める。  
 ○蟹目 扇の骨を極  
 るくさび。要。

○骨の尋常さよ 扇  
 の骨の形のよさよ。  
 ○さて人間に住む  
 ならは ぞうせ人間  
 世界に暮して行くの  
 なら。  
 ○假初 かりのもの  
 ○大法 佛教の修法  
 の一。大城燈光法、  
 七佛藥師王、普賢延  
 命法等の稱。

貴船の本地

叶ふ人も無し。心のみ澄して、春は花の本にて日を暮し、秋は月の前にて夜を明す、御膳  
 も定まり給はず。その頃内裏に三十日の花の連歌ありけり。諸官の司まりて扇合ありけ  
 り。中にも中將殿の父方に源氏の大臣殿の御扇は、銀の彫り骨黄の蟹目、都に聞えける  
 雙びなき畫かきを召して、黄金二十兩賜びて、「視目を驚かすほどの繪をかけ。」と仰せけれ  
 ば、承りて、目を驚かす程の畫は見めよき如く、みめよき女房をぞかきたりける。魂を入  
 れて物をいはせ、笑みを含み動くほどにぞ畫きたりける。法皇御覧ありて多くの扇ある  
 と雖も、この扇に上越すはよも有らじ、朕が寶に思せども、中將に御宣旨なる。開けて御  
 覽じて思召しけるやう、あはれ扇や、骨の尋常さよ。蟹目の愛たさよ。かきたる畫の美し  
 さよ。いかなる筆のかきたるぞ、主ある人を見てかきたるか、いかなる定平なれば、九百  
 六十人の女房の中にも、是れ程にみめ美き人の無かるらむ。とても人間に住むならば、か  
 やうの人に相馴れて、一夜をも明してこそ、今生の榮花とも思ふべけれ。扇を開きて見給  
 ひて、たゞ假初と思へども、戀といふ二文字のはかなき事は、逢ふより外にや止むべきこ  
 こぞ無からまし。中將一間どころにおはしつゝ、内裏の出仕もなかりけり。法皇此の由聞  
 召し、山々寺々に祈りをかけ、大法祕法を盡せども、その效更になかりけり。戀の病なれ

○嗚呼がましき馬  
鹿らしい。

○物越しに見て  
物を隔てて見て。

○心ききで  
気が利いて。

○上品  
淨土九品の分類に擬した、最上等。

○鞍馬  
鞍馬山は山城愛宕郡鞍馬村に在る。京都の北方三里山の中腹に鞍馬寺がありその西北に貴船神社がある。鞍馬寺は延暦十五年創建、本尊は毘沙門天。  
○僧正が谷  
寺の西北十町に在る。  
○丑寅  
東北。

ば、逢はではいかで止みなまし。扇の畫を戀ひ給ふなり。いつくの時逢ひ見むとも思はず、せめて扇のぬしの許に行き、何處にある人を見てかきたるぞ、尋ねばやなどと思ひ、大臣殿へ坐しければ、人相をさとる人にて、「如何に中將どのは面瘦せて見え給ふ。戀をさせ給ふか。」と仰せあれば、中將恥かしながら此の詞につきて申す。「嗚呼がましき事にて候へども、過ぎにし頃内裏にての、扇の畫を見てより此の方、戀路に迷ひ候なり。その畫かきは何處にや候はむ、尋ねばや。」と申し給へば、大臣殿打笑ひ給ひて、「それこそ殿の正體無き戀なれ、人の戀するといふは、よき人の姿を物越しに見て、あはれ餘所に見初めて戀ひもし、逢うて逢はざるが戀し、又は互に忍び忍ばるれども、親の惜しみて戀しなどといふことこそ候へ、畫かきが心ききでみめよき人をかきたればとて、それを戀ふるといふものや候べき。如何に中將殿、戀慰めにみめよき女房の物語りせむ。聞きていかほど戀しきを忘れたまふべき。」と仰せありければ、中將申す様、「上品に語り給はば、三月は慰むべし。」と申し給へば大臣殿聞召して、「さらば語りて聞かせ申さむ。是れより鞍馬に参り給ひて、大門より南に細道あり。これを遙かに行きて見れば、僧正が谷の奥に大なる池あり、名をばみぞろ池といふ。この池の丑寅に方りて岩あり。岩の邊に穴あり。穴の底を三里許

○毘沙門  
四天王の一。普通には甲冑を著、左掌に塔、右掌に寶棒を持つた坐像  
○吉祥天女  
功德天とも云ふ、父は徳叉迦、母は鬼子母、毘沙門天の妹或は后妃と考へられてる。  
○三十二相  
佛の具備する云ふ三十二の相好。轉じて美人の條件となつた。  
○清水  
京都の東南坂上田村廣創建。  
○太秦  
京都の西二里、廣隆寺が在る。  
○長樂寺  
東山に在る。天台宗別院。  
○蓮花王院  
現存俗に三十三間堂。  
○平野  
京都の北に在る神社、桓武帝外戚の四神を祭る。  
○三十三へん云々  
法華經に説いてある觀音菩薩は三十三種の變化身をなして衆生を救はんと誓はれた。

り行きて國あり。國の名をば鬼國と云ふ。大王一人あり。名をばらんとはそうと云ふ。此の女二人あり。姉をば十郎御前と云ふ。年十六歳なり。妹をば龍女の宮と云ふ。年十三になり給ふ。みめよき事、漢家本朝にも有り難し。毘沙門の妹吉祥天女にも勝れたり。三十二相足らひて扇の畫に十勝りて美しきぞよ承れ中將。」とありければ、中將申し給ふ様、「左様の人には何として行き逢ひ候べき。」と申し給へば、「凡夫境界にては叶ふまじ、佛神三寶に祈誓申さば、夢現にも見せ給ふべきか。」とあれば、中將之を聞きては、恨めしかりける世の中かな。無しと思はば、さても止みなむに、有るぞと聞けば戀しさのみぞ増りける。中將歸りて、夢の明燈菩薩を掛け奉り、夢の中に見せ給ふべしと申せども、夢にも見えず、佛神三寶に申して、行き逢ふべしとぞ大臣殿御物語り有りければとて、内々束帶脱ぎ置きて、白き淨衣に立烏帽子召して、又大臣に暇申して三條を出で給ふ。清水に七日籠り給ひ、南無歸命頂禮若我誓願大悲觀世音然るべくは所願成就し給ふべしと申せども、その驗も更になし。それよりして太秦、長樂寺、蓮花王院、北野、平野、稻荷、祇園、賀茂、春日、住吉、佛法始まる天王寺、伊勢大神宮の靈佛靈社残りなく参り廻る程に、程なく三年にも成りにけり。長谷に参りて申す様、「觀音は三十三べん衆生の願を満てむと誓ひ給ふ

○湖の山 脱文あらん。

○多聞天 毘沙門天の別稱。

○示現 佛菩薩が機縁に應じ種々身を現する事。

○三十六天 佛教の三十六部神、無量の眷屬を率ゐて衆生を守護する神。

○大門 寺の正門。

○利生 利益衆生の約語。

○不思議なる所望 變つた希望。

○由ある人 それ相應のおもむきある人

なり。定平が所望を叶へさせたまへ。」と申し給へば、七日と申すに觀音の示現を蒙りたまふやう、「みづからは近江の湖の山となり、諸方を見たれども、汝が婦妻のゆくへを知らず、鞍馬へ参りて申せ、それこそ汝が願意成就すべけれ。」と有りければ、中將打驚きて悦びけり。三百三十三度の禮拜奉り給ふ。明くれば鞍馬へ参り、南無大慈大悲多聞天、定平が申す所願成就し給へと、七日籠り申させ給へども示現も更に無からまし。三七日籠りて、「恨めしや多聞天是より北の方七萬八千里あなたに三十六天の中に、衆生の願ひを満て給ふ、この願成就せぬ物ならば、御堂に火を掛けて佛を焼き奉らむ、定平は大門にて腹切り、末代の佛に利生なしとて一切衆生に披露せむ、この寺の惡漢となるべし。」と申しければ、毘沙門立出で給ひて仰せある様、「汝は何と申すぞ。」と示現ある。中將畏まりて申させ給ふ様、「寛平法皇に扇合のありしに、源氏の大臣殿の扇の畫に女房かきたるを見て、定平由なき戀路に迷ひ佛神三寶に祈誓申し候へば、長谷の觀音より鞍馬へ参れと御示現候ほどに、この三七日參籠申し、婦妻の所望を申す。」とぞ宣ひければ、毘沙門からくと打笑ひ給ひて、「それこそ汝が不思議なる所望よ。語りて聞かせむ。戀といふことは人間の中に、由ある人を見て戀しといふこそ叶ふなれ、云はれぬ戀の仕様かな。されども左様に逢

○空なる事かな ここでは、はかない事よの意。

○中天竺 印度の中郡。

○伽毘羅城 加毘羅婆蘇都、城の名、悉多太子の生處。

○ミウれん 未詳。

○非想天 非想非非想天の畧、無色界に四天あり、その第四天で三界の最頂、有頂天とも云ふ。

○胸打騒ぎ 胸が動悸はしくなるほどに動搖して。

はむには、宿世結びの身ならずとも、一度は逢はせてとらすべし、之は畫をみて心を惱ます、空なる事かな。さりながら、戀慰めに身の毛もよだつ程の物語りして聽かせむ。」と、新に御示現あり。「自らは中天竺に伽毘羅城といふ所に渡りて見しかば、鬼の丈十六丈、居丈は八丈、横さま七反、面は八面、口八つ、眼十六、奥齒これは大とうれん小とうれんといふ劍の如し。物をいひければ肝を消す、その色赤し、火を燈したるが如し。鬼、腹を立つれば青き赤き色皆白くなり、口にて物を言へば一度に八つの口吾劣らじと動き、其の聲百千の雷の如し。上は非想天、下は海龍宮まで響き渡る程の鬼の娘、戀しいか中將よ。」と示現あり。中將夢の中に畏まりて申させ給ふやう、「左様の鬼の娘にても候へ、見めだに好く候はばと存じ候。」と申し給へば、毘沙門聞召し、「さらば汝に取らすべし、汝参り候べし。明日は鬼國へ下向せむ、正面の戸を開きて見よ。」と御示現ありければ、中將胸打騒ぎて悦び、白月西に傾きければ、御門を入りて正面へぞ参りける。見れば誠に天人の影向も斯くやとぞ思ひける。光る程の女人なり。一目見しよりして肝心も身に添はず、三十二相限りも無し。片脇に立ちよりて、懐より扇とり出して、開きて此の女房に見合はせければ、畫にかきたる姿には、又十増りて美しきこと限りなし。日頃は扇を打ちも置かれず思



○具足せず 連れな  
い。  
○面にある 扇の面  
に畫いてある。  
○五障 女人の五障  
礙。一梵天王なる  
を得ず 二帝釋、三  
魔王、四轉輪聖王、  
五佛身となるを得ず  
○三障 正道を障へ  
て善心を害するもの  
三、一に煩惱障。二  
に業障、三に報障。  
○懸念無量劫 懸念  
無量劫の訛。唯一念  
の妄惑が五百生の果  
を生ずる義。  
○ぢちに 實に。  
○治定 必定の意に  
用ゐてある。

ひて、肌こそへて持ち給へるが、美しき姿を見てより、はやいつしか心移りて、かの扇をば腰に指してぞおはしける。中將さし寄りて宣ひけるは、「何處の人にて渡らせたまひ候へば、たゞ一人まゐり給ふぞ、男の身さへこれ程山深くして荒涼じく候に。」とありければ、宮このよし聞召し、「妾鬼國と申す所の者、人一人も具足せず。」と宣へば、中將申し給ふやう、「この御堂に三七日籠り婦妻を所望申し候へば、この曉の御示現に面にある女房を、汝が婦妻たるべしと御示現を蒙りて候。いづくの里までも御供。」の由申されければ、龍女聞召し、「妾が住家と申すは佛法も無く人もなし、左様の所へおはすべきか。」とありければ、中將、「いかやうにも候へ、佛の御計らひにて候へば、何處の里までも参り候べし。」と宣へば、宮この由聞き給ひて仰せけるは、「さなきだに女房は五障三障とて罪深く、五障の雲厚くして晴れ難く懸念無量劫とて人の愛念著ぬる物は五百生に生れあはして其の苦しむ止む事なし、されば妾數ならぬ身をば惜しまねども、殿を見奉るにぢちに一人の子なり。妾伴ひ給ひて候はば、五日十日ならでは存命へ給ふべからず中將殿。」と語り給へば、中將此の由聞き給ひて、「宮を見奉りてよりは、止まりても思ひ死にに死なむ事治定なり、御供申してこそ死ぬべけれ、火の中水の底までも、御供。」と申されければ、宮もさすがに振り棄て

○汀の水解けむ 氷  
の解けるのこ、心を  
うち解けむさにか  
け  
た。  
○わりなき物 理窟  
のない物。

○命こそ限りなれ  
命があつての事であ  
る。命が一番大切た  
○力及ばず 仕方な  
く。

○心詞も及ばれず  
想像にも言にも現は  
すこゝも出来ない。  
○築地 こゝでは單  
に堀。  
○總門 正門

難く思召し、「佛の御計らひならば。」とて、中將を打連れて、汀の水解けむとて、男女の契りの程を思へば、わりなき物はよもあらじ、唯かりそめの心地して、鬼國を指してぞ行きたまふ。鞍馬の奥僧正の谷岩間をつたひ尋ね入り、みぞろ池の端に行きて、丑寅に岩屋あり。此は穴の端にて、宮は中將の袂にすがりのたまひけるやう、「これより中將殿かへり給へ、かく申すまじと思へども、此の穴へ入る者の千人に壹人もかへる事なし、鞍馬へは月毎に参らむするなり。命こそ限りなれ、常に逢ひ奉るべき。」と宣へば、中將、「御身故に死なむ命は露塵とも思はず、何處の雲の果てまでも。」と宣へば、力及ばずして岩の底へ打連れて入り給ふ。穴の底へ入り給ふより、月日の光も見え給はず、長夜の闇の如し。足に任せて尋ね入り、暗き闇路に迷ひつゝ、思ふ妻故なれば、是も飽かずぞ覺えける。穴の底五十里許り入りて見れば大なる國あり。「これこそ自らが住家鬼國と申す國にて候へ。」と宮宣ひける。高き所へ登りて見れば、日本國を五ツ六ツ取並べたるとも、いかでかこれ程廣かるべきやと覺えたり。稍遙かに行きて見れば大なる川あり、汀の白砂などの面白く、邊も耀き渡りて心詞も及ばれず。この橋を打渡り遙かに行きて見給へば、鐵の築地あり、高さ十丈許りあり、「これ妾が父大王のまします鬼國の總門にて候へ。」とあり。築地の上を

○水精 水晶に同じ  
 ○真木柱 真木ミ云ふ植物を用ひた柱。  
 ○守殿 主殿が正しい。寢殿(母屋)の事  
 ○遠侍 主殿から遠く離れ、中門の際などに設けた番所、當番の侍など詰める。  
 ○比翼の語らひ 白樂天の長恨歌、「在天願作比翼鳥。」  
 ○卿相 三位以上の貴族、公卿。  
 ○雲客 通常四位五位以上昇殿を許された貴族。殿上人。  
 ○呼子鳥 深山に住み鳩に似た鳥ミ云ふ  
 ○打詠めける うち吟じ出す義。

十町許り歩み給へば、銅の築地あり、之も十町に築きあけたり。同じく門をぞ立てたりける。「これこそ大王の中門にて侍れ。」とありしを、六七里許り歩みて行けば、白銀の築地あり、これも十町に築き上げ同じく門をぞ立てにけり。「これこそ大王の花の都の中にて候へ。」と宣へば、見るに實に詞にも及ばれず、金銀瑠璃をのべたるとは、續かる事にや申すらむ、水精の真木柱、中の桁組白銀にて、天井同じく張りて回し、七間四面の守殿九間の渡り廊下、十二三間の遠侍、銅をのべて立て續け、瑠璃玻璃をのべて板に敷き、白銀黄金綾錦を以て張り、玉を連ねて簾に懸け、黄金の扉七重の屏風、八重の几帳、九重十重の臺に心詞も及ばれず。二世の契り比翼の語らひをなしてぞましくける。宮宣ひける様、「君は花の都の人なれば、卿相雲客の遊びに戯れてやおはすらむに、斯かる物憂き所にて、いかゞ寂しく思すらむ。四方の景色御覽ぜよ。」とて、中將を誘ひて行きければ、青黄赤の色を現はし、草木枝をならべ、梅や櫻は咲き亂れ、遠山の霞にかゝる鷹がねも、遙かに渡る呼子鳥、谷間を傳ふ鶯の、初音を聞くや珍らしき。中將かくやと打詠めける、  
 たち渡るかすみのうちの鶯は花のふきに迷ひてぞなく  
 とかやうに打詠めつ、又南を見給へば、松にかゝる藤の花、岸間を傳ふ青柳の絲亂れ、

○蟬丸 單に蟬をかく戯れて擬人法で呼んだのである。  
 ○聲ども 聲の複数聲々。  
 ○うつほ草 青葱の異稱。

○渡らせ給ひしか 居られますかの意。  
 ○九獻 杯を三獻づつ三度さすことから轉じて、酒の異名。  
 ○精進 こゝでは精力をこめ、佛道を修め勤める事。

山吹、おそ櫻、卯の花、常夏、あやめ草、晴天の蟬丸は聲ども惜しまずぞ叫びける。これや夏かと見えにけり。西を眺め給ふに、紫苑、龍膽、うつほ草、露おもけなる女郎花、松蟲、鈴蟲、戀蟲、かれなく鳴くやきりなく、紅葉の落葉散り積り、秋の名残や惜しむらむ。北を眺め給へば、時雨霰は暇も無く、松の緑に霧降りて、池に鴛鴦浮寝して、庭に白雪降り積もりつらなるは蓬萊宮とも云つべし。斯かるめでたき所に袂袖重ねて、何時迄も斯くてぞ契りける所に、龍女の宮の御色打變り、しをくとみえさせ給ひけり。「妾が住家に只今不思議の物参らむする、忍びて見給へ。」とありければ、障子の内にて御覽するに、雷鳴り落ち天地震動して動き渡る。さる程に御門の外に五丈許りの鬼神動き出で申すやう、「宮は渡らせ給ひしか、大王より急ぎ渡らせ給へとの御使なり。」と申せば、宮此の由聞召し、「妾此の程鞍馬へ参り下向し候程に、聽て参り候はむと申せ。」とありければ、乙磨承りて歸りけるが、御門より立歸りて申しけるは、「大王此の程九獻も御召し無し、生け肉に進らせむ嬉しさよ、人臭く候。」とぞ申しける。宮宣ひけるは、「妾が内にけふ此の比いかなる凡夫のあるべき、これ程精進にて鞍馬へ参りつれば、罪淺き凡夫の踏む土を踏みつれば、左様にあるらむ。見苦し歸れ。」と頻りにありければ、「慥かに人臭く候ものを。」とて

○御厨子 臺所に働く女の稱。  
 ○十四五にもならむずるは 十四五にもならんとするの義。  
 ○參らせ給ふべき程は 行かれる間は。  
 ○果なき事 心細いたよりない事。  
 ○夥しき こゝではすはらしいの意ではない。  
 ○帳臺 一段高く作り、四方に帳を垂れた座敷で、普貴族の寢間に用ゐた。  
 ○五はつぢやうの杖 慧杖。智慧の生ずる杖の義。  
 ○らんは 藍婆。羅刹女の一。女鬼である。

呟きてぞ歸りける。跡にて仰せけるは、「これこそ妾が父大王の内に、屈夜叉とて御厨子の兒にて候。年九になり候。女子にて候。」と語り給へば、「あら恐ろしや、見たりとも覺えず候。九になるさへ、丈五丈ばかりあり、十四五どもにもならむずるは、いかゞ候べき。これを従へさせ給ふ大王の御威勢いか程の事ぞ。」と宣へば、宮宣ひけるは、「大王に面を合はせむには、御命助かり給ふべきか。」と語り給ふ。「さて大王へ參らせ給ふべき程は、何處にて待ち參らせむ。」と宣へば、宮聞き給ひて、「哀れ君は果なき事を仰せ候ものかな、妾が候はぬ時は面四に夥しき鬼神共來りて、手を響かし地を叩き候はむ時は、石の唐櫃に入れ奉り、大地五丈が下に埋みて、いかでか殿の御命候べき。」と有りければ、中將、「恨めしかりける世の中かな。五年十年もなくして、僅にけふ七日添ひ奉りて離れ申さむ事よ。」とて、袖を絞り給ひける。宮は帳臺にいらりて、人を大になし、摩れば小さくなる杖あり、五はつぢやうの杖といふ、これにて摩り給へば、中將俄にその脊三寸許りに成り給ふ。宮肌の守りに納めて、下に掛けさせ給ひ、父大王へ心凄く參り給ひぬ。大王宣ひけるは、「宮は此の程何處へおはしたるぞ。」と宣へば、「此の程精進にて鞍馬へ參りて候。」と宣ふ。「さては精進にてましますか、御酒參らせよ。」とありければ、らんば共見事なる瓶子に酒を入

○なか／＼ こゝでは非常に。  
 ○肝心も云々 定平中將の心中を描いたのだ。

○誰を父ともいはむ 自分亡き後には誰を父と呼ぼうか。

○思はざる外に 意外にも。  
 ○庖丁して 料理して。

○生死を離れむ爲に 生死の妄執を解脱せんために。  
 ○不思議 不可思議 思ひはかるべからずの意。

れて肴調へてぞ參らせける。又御肴にとて一人生きながら取出す。なか／＼肝心も身に添はず、如何なる物ぞよく見ばやと思ひて、守の口に目を當て見れば、中將の母方の従弟二條の花見の少將とて、春は花の本にて日を暮し、秋は月の前にて夜を明す詩歌管絃にも暗からず、竝ぶ人なかりし人なりし、三十一にぞなり給ふ。父母にひとり子にてましますが、父は七十二になり給ふ。母は六十にぞらせ給ひける。又七五になる幼き者あり。誰を父ともいはむ一方ならぬ悲しさよと歎く有様、見るに心も消え入る心地して、定平も是にありと言はまほしけれども、心許りにて、我も／＼あの難を遁るべきとも覺えず、肝魂も身に添はずぞありける。この花見の少將は賀茂の神宮におはしけるが、上の松原より見めよき女房とたはぶれて、心ならず鞍馬のおく僧正が谷みぞろ池の端に岩あり。この岩のはたにおはして、思はざる外に、鬼國へおはし給ふ。さても大王宣ひけるは、「早々庖丁して參らせよ。」とありければ、枝より下し一々に庖丁す。大王、「いかに此の程宮は精進にておはしつらむ、よく／＼宮に參らせよ。」と仰せられければ、宮は本より佛道を願ひ給ふ事にて、「常に佛法近き鞍馬へ參り、生死を離れむ爲に肉食を斷つ。」と申したまへば、大王聞召して、「不思議なり／＼、我等が中に肉じきを止めて、佛にならむといふ物出來たる、

○後の口云々 此の鬼は前に八面と書いてあるから、一面に各一口があるのだ。口の所在を記したの はつまり面の所在になるのだ。

○味はへ 味ひの詠  
○眼を見出して 眼をむき出し怒らせ。

○御前 婦人への尊稱、宮をさす。

○男して越えたる 男具して来たの意であらう。

○強ちに障へ給へば 無理に邪魔をなされは。

○午の刻 晝の正午  
○供御 そなへもの

是れこそ物の始めなれ。」とて笑はれける。「さらば是れへ参らせよ。」とて、後の口前の左右の口頂の口八の口に押入れて、舌にて味はへ酒とりよせて呑んで後、面を赤め、眼を見出して拳を握り膝を押へ、頻りに宮の方を二三度睨み、「御前は日本より男して越えたる。朕に得させよ。生け肉にせむ。」とあれば、宮御顔赤め、夢々候はぬ由申したまへば、大王大いに腹を立て、「中々恥見ぬ先に参らせよ。争はば恥を與へて取るべきなり。速かに参らせよ。」と責められければ、宮は兎角の御詞もなく、「候はぬ。」と許りにてあれば、大きに腹を立て、「悪くさよ、さらば取りて見せむ。」とて、引伏せて雪の肌<sup>はだ</sup>に手を添へて探し給ひける所に、后菲蘭女<sup>きさきひらんじよ</sup>走りより、大王の御腰に抱き付き、「いかに況んや天を翔る翼、地を走る獣<sup>けだもの</sup>も、子を思ふ道何れか劣り勝るべき、如何に申さむや、姫が肌<sup>しも</sup>に父が杖<sup>つゑ</sup>をあてて探すのこそ悲しけれ。一度は隠すとも宥し給へ申し。」と、強ちに障へ給へば、放逸の鬼なれども、后に制せられて、本の座敷に直りけり。宮は水の泡とも消えなばやと、悲しみ給へども、露霜ならねば、消えもせず泣くく立歸り給ひけり。大王重ねて宣ふ様、「餘りに母歎く程に今宵許り赦すなり。速かに名残を惜しみ給へ、あすの午の刻に参らむ、男を惜しくば汝を供御に爲む、二人に一人は必ずとるべきぞ。」と責められける。宮わが所に歸りて慧

○あへなさまよ はかかなさまよ。はりあひなさまよ。  
○程なくとも 時間が短くとも。  
○無去世界 地獄道の異稱。むこせかいの訛。  
○奈落の底 地獄の最下部。

○波羅奈比國 波羅奈斯國であらう。恆河の流域にある國。鹿野園此の中におり現今ベナレスミ稱する。

發杖の杖を出し中將を撫で給へば、本の脊にぞなり給ふ。手に手を取組みて泣きつ、中將殿語り給ひける、「見初め奉り鬼國まで御供申し死なむ命は惜しからず、今更驚くべきにあらず、去りながら逢ひ奉りて今夜七日の契りにて、程なく離れ参らせむ事のあへなさまよ。夫妻は二世の契りなれば、今の世こそ程なくとも、來世にては待ち奉るべし、後世よく弔ひてたびたまへ。」と宣へば、果なや君の空しくなり給ひて後は、此の國は無去世界の所にて、佛法も無く人間も無し、定めて僧の一人も供養し難く經の一部も讀む事叶ふまじ、然らば殿の奈落の底に落ち給はむ事の悲しさよ。二世の契りと申す共、妾命は四萬歳、殿の命は百二十年は過ぎ候はず、去れば君は是れより都へ歸り給へ、我が身の後世を弔らひ給へ。われ殿の御命に代り、父の餌食<sup>えじき</sup>になり候はむ中將。」と宣へば、「返し給ふとも、逆も御行末の事を思はむに、五日三日も存ふまじ、何處にても死なむ命は同じ事なるべし、我こそ御先に立ち候はめ。」と宣へば、宮宣ひけるは、「君の先だち給ひては、誰か御跡を弔ふべき。妾が申さむ事よく聞き給へ、御身の先だち給ひたりとも、我も此の難を遁るべしとも覺えず、其の上妾が姉十郎御前も波羅奈比國より妾を語らひて來たり。二人ながら生肉にとられ、是を思ふにも、只君は都へ歸らせ給ひて、後の世を弔ひてたび給へ。」と宣へ

○九丈の錫杖 僧侶修驗者の持つ杖、頭は塔婆の形で環があつて聲を發する。九丈は九條の誦。九節の筒を唱へつゝ、振るから九條云ふ。  
 ○五部の大乘經 天台大師の撰定したもの。華嚴、大集、大品般若、法華、涅槃の五經。  
 ○善知識 こゝでは人を佛道へ導くよい案内者。  
 ○半挿 湯、水など注ぐに用ゐる器具。  
 ○孝養 供養と同じ意で、亡き人を弔ふ事。  
 ○天台山 比叡山を云ふ。天台宗の延暦寺があるからだ。  
 ○沙門 梵語を漢字で寫したもの、動息と譯す。僧侶。

ば、中將、「われ故父の餌食になりたまはむに、吾が生きていかでかこらのべき、たゞ諸共に。」とありければ、「うたての殿の仰せに候や、一道に赴きては、如何して二世は浮むかべき。奈落の底に沈まむ事の悲しさよ、御志も盡きせずば、都へ歸らせたまへ、佛法のふところにて、九丈の錫杖を修し、千部の經を讀み、五部の大乘經を開き、堂塔をたて佛を供養し、一日經をかき給ひて、五戒を有ち給ひ候はむに何の疑ひ候べき、妾ほとけに爲るならば、二世の契りを結び九品の蓮臺に生れ逢はむ事疑ひあるべからず。君の御爲善知識とこそ思ひ候へ。」と申し給へば、實にもとて中將も二條の御所に送られ給ひける。宮は泣く泣く鬼國に歸り給ふ。中將は宮に名残を惜しみて暫く申すべき事ありとて、互に手に手を取組み、今はいつの世の何時にか逢ひ奉るべき、又空しく成らせ給はむ臨終をば、いかでか知り奉るべき。」と申し給へば、「吾等が最後はあすの午の時なるべし、吾が叫ばむ聲は人こそ聞かずとも、君の御耳へは聞ゆべし、實を知らむと思召さば、半挿に水を入れ前におかせ給へ、水の色紅の如く血になるべし、その時を必ず臨終の時と思召さるべし、妾が孝養には、天台山より千人の沙門を請じて、九丈の錫杖を修し五部の大乘經を讀み給はむに、などか成佛せざるべき。」と宣へば、中將重ねて申させ給ふ様は、宮の戀しく思ひ候は

○僧老同穴 夫婦の契りの變らぬ事。生きて共に老い、死んで共に葬られる意。  
 ○さてもあるべきならねは さうして居られるべきでないの意。  
 ○最後の道 一番終りの事。  
 ○邪見 佛語。不正な見識の意。邪慳と混同し無慈悲、殘酷の意に用ゐる。  
 ○あらいしや あらまいよ。いしは味よい。  
 ○中々おろかなり とても説明し足らぬほどである。

む時は何を記念に見奉るべきや。」と申されければ、實にもとて肌のを取出し「中より切り、片方を中將殿に奉り守りにぞ納め給ひける。宮は、「暇申すぞ中將殿。」とて遙かに出でさせ給ひけるが、又逢ふべきと思ふだに、妹背の中は悲しきに、況んや偕老同穴の契りと思ひしに、長き別れと成りにける。恨めしかりける憂世かな。今を限りの事なれば、互の心哀れなり。中將、宮を遙かに送りつゝ、宮、中將を送り、互ひに送り送られて、行きもやらず止まりもせず、さてもあるべきならねば、宮は早鬼國へ歸り給ひける。懐かしき妻の別れといひ、けふを最後の道なれば、一方ならぬ歎きにて急ぐとなけれども、足に任せてゆく程に、鬼國に歸り給ひけり。大王この由見給ひて宣ひけるは、「あら憎くや男送りて歸りたる憎くさよ。」とて、八人のらんば共に仰せ付け、手とり足とり十二重をはぎとり、紅の袴許りを許して丈なる御髪を邪見の手に打搦みて、五尺の鐵の俎に引伏せて、庖丁するこそ無慙なれ。さて大王は一々に庖丁させて八の口に押入れて味はひ、「あらいしや此の十三年が程育てたる子なれば、日本の凡夫めが味には増したる。」とて、舌打ちをぞし給ひける。后菲蘭女の思ひ中々おろかなり。月日の如くなりし二人の姫君失はれて、生きたるかひもなきぞと思はれける。さて中將は都に留まり給ひて歎き給ふぞ哀れなり。宮

○俗の身ならはさても 俗の身なればさても 俗の身であつても。

○即身成佛 人がその肉身のまゝ佛なるを云ふ。

○王威 天皇の御命令の意。

○蓮臺野 北野の東紫野の西、洛外七野の一で、火葬地。

○無常堂 瀕死の病者を置いて無常を觀ぜしむる所。或は無常院、涅槃堂、延壽堂など宗旨により名稱が異なつて居る。

○かたわ 片端に佛語の片輪が混じたもの、不具。

の臨終明日の午の刻と仰せられしとて、半挿に水を入れて御前におきて見給ふに、宮の御聲と覺えて、はつと叫び給ふ音、爰まで聞えけるは今ぞ臨終なりけると、肝心も惑ひつ、暫くありて心を鎮め御覽すれば、はんざふの水、紅の如くなり。見るに涙も止まらず、今は亡き人の後世をとぶらばむと思召して、法皇へ出家御暇を申されける。みかどの宣旨には、「汝失ひてこの三年が閑戀しゆかしと思召しつるに、いかで御許し有るべき。」とぞ宣旨なり。力及ばず、俗の身ならばとても戒を保ち給ひける。殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒これ五つの戒なり。是れをたもち、宮の遺言の如く孝養をぞせられける。天台山より千人の僧を請じて、九丈の錫杖を修し、五部の大乘經をよみ、一日は經を誦し即身成佛弔ひ給ひける。さて中將晝は王威に従ひ、夜は星を頂きて夜とともに蓮臺野の無常堂に行きて念佛を申し、宮の後世をぞ弔ひ給ひける。さてしも中將殿父方の伯母二條の御局とておはしけるが、懷妊し給ひて、七月と申すに御産あり。見奉れば三十二相のかたちをうけたる姫宮左の御ゆび一つまします。さる程にこのよし御覽じて、かたわなりとて、乳母に仰せつけ、蓮臺野に捨てられける。折節中將殿の出でなされ、泣く聲聞き給ひて、殺生戒とて、物の命を殺さぬなり、殊に一門なり、爰にて忽ちに失は定平が五戒破れなむと、

○かしづきける程に 大切にそだてるうちに。

○髪のかゝり 髪が垂れさがつた風。

○飽かで 夫婦の契りをあきていやにならないで。

○問ふに辛さの増るかな 續古今集の歌「吹く風も問ふにつらさのまさるかな慰めかぬる秋の山里。」を採つたのだ。尋ねられるので苦しさがいやまさるの意。

○梵天帝釋 色界の大梵天王と初利天主たる帝釋天王との二佛を併稱したもの

二條へ歸り乳母を付けてかしづきける程に、きのふけふとは思へども、はや年月送りける程に、十三にぞなり給ふ。中將ある夕暮に、この姫君の有様をつくくと御覽じて涙を流し給ひけるが、不思議や鬼國にて離れし宮の御おもかけに、髪のかゝり立居の振舞ひ、目もと唇に至るまで少しも違はず、たれ教へざりけれども詩歌管絃に長じ、春は花の本秋は月の前にて、夜を明す風情、中將よく見給ひて、飽かで別れし宮の御事、いよく思召し出でてぞ涙に咽び給ひけり。姫君此の由見給ひて申させ給ひけるは、「いかに中將殿、いつも御歎きの色深く見えさせ給ふものかな。」と宣ひければ、中將聞き給ひて、「されば姫君聞き給へ、鬼國にてあかで離れし龍女の宮の御姿に、少しも御身の違はせ給はず、それに付けても昔戀しく覺え候。」とて今更涙せきあへず、「問ふに辛さの増るかな」と宣へば、姫君中將の袂にすがり、泣く／＼語り給ふやう、「いかに中將殿たしかに聞き給へ、自らをば如何なる者とか思召す、妾こそ鬼國にて君の命にかはり侍りし、龍女の宮にて候なり。」と申し給へば、中將あきれて聞き給ふ。よく／＼聞かせ給へば、五戒をたもち九丈の錫杖を修し五部の大乘經を讀み、一日經を書き弔はせ給ひつるに因つて、即身成佛して極樂淨土に佛の御まへにてさとりを開き候ひつるを、梵天帝釋の仰せに、娑婆に戀しく思ふ者の

○不興 不快。

○縹の帯 薄い藍色の帯。催馬樂に「石川のごまうごに帯をさられてからき悔いする、いかなる帯ぞはなだの帯のなかほ絶えたる。」とあるを採つたのである。

○現なり 正氣だ。

○袖を引違へ 抱擁する意。

○過去の記念 過去の記念品。

○苦しがるまじ 差支へあるまい。

あり、二世の契りを結びたるものなれば餘りいたはしく候へば。とて、戻されしに、我やどるべき方なくて、君の伯母ごぜんの胎内に宿りて候ひしに、左の手にゆび一つなくて、母の不興をかうぶり捨てられしを、とりあけて育て給ひける、ゆびのなきは飽かて離れ奉りしときの記念を持ちて候。」とて、生れて十三年が間なかりし指を、只今開き給ひける。手の裏に縹の帯の裂を御らんじて、夢かと思へば現なり。まもりの中より縹の帯を取出し合はせて見給へば、記念の帯にて、少し色までも違はずありけり。嬉しきにも涙なり、互に袖を引違へ、昔を語り泣くより外の事ぞなき。されども涙の間より宣ひけるは、「恨めしや更に賤しき賤が腹なりとも、餘所の腹にも宿り給はで、又の契りも有るべきに、昔より今に至るまで一門の契りといふ事なし。」と宣へば、帝その由聞召し宣旨なりけるは、「別れて五年十年ありて行き逢ふだに深き縁とはいふぞかし。況んや一河の流を汲むだにも、五百生の契りといふ、之は十三年にて生れ合ふ、その上過去の記念を持ちて來たらむには、一門なりとも苦しがるまじ。」とて宣旨を下し給ひぬ。又夫婦にぞなり給ひける。悦びの宣旨を蒙りて、こたび比翼の契りを結び給ふなり。斯かりける所、鬼國の鬼これを見て申しけるは、「あら憎くや一度喰はれたるにも懲りよかし、猶も契りを忘れず、又生れて逢ひたる契りを忘れず、又生れて逢ひたる事の悪くさよ。行きて二人ながらとりて喰はむ。」とぞ罵りける。鞍馬の毘沙門之を御覽じて別當に示現ありければ、別當大きに騒ぎて帝へ奏問申されければ、帝王聞召して、明法道の衆徒を召して、例文を開かせ給へば、申す様、「此の鬼は節分の夜來りて、日本の人を喰ふべし。但し此の鬼の渡るまじきことあり、七人の博士にて、七々四十九軒の家の物をとりて、鞍馬のおく僧正が谷みぞろ池の端なる岩穴塞ぎよく封じて、三石三斗の豆を煎りて鬼の目を撲つといふ事をするならば、鬼の十六の眼を潰されて、抱へて歸り候べし、夫れ猶も鬼が人を喰はむとせば、鯛を焼きて串にさして五門にたて侍らば此の焼串を取るべし。」と、例文にぞひきける。七人の博士を召して、四十九軒の家の物にて鞍馬のおく僧正が谷みぞろ池の彼の岩穴を封じて塞ぎ、三石三斗の煎豆にて、鬼の目撲といふ事をいひて目を撲ちければ、眞の眼うたれ抱へて歸りける。らんば總王申しける、「穴をこそ狭ければ、封じ塞ぎけるとも天をばよも塞がじ、いざや行き取らむ。とて、八萬四千の鬼を牽きつれて雲霧の如く渡りけるを、又鞍馬の毘沙門別當に告げ給ふ。急ぎ帝へ奏聞す。又明法道の例文を引かせ給へば、「吾が朝に五節供といふ事を始めて鬼を欺るべし。」と申せば、さらばとて節供を始め給ひぬ。正月七日に若菜を摘みて

○別當 別當は兼任の長官の意であるが寺々によつて住職の名稱に用ゐた。

○明法道 律令格式を講究する學問。四道の一、こゝでは作者が陰陽道と間違へたのらしい。

○例文 ト占で得た判断の文。

○節分 四季の節の變る時を云ふ。特に立春に多く用ゐる。

○博士 こゝでは陰陽博士。

○十六の眼 此の鬼は八面であるから。

○抱へて 頭を抱へて。

○五節供 正月七日 三月三日、五月五日 七月七日、九月九日

る契りを忘れず、又生れて逢ひたる事の悪くさよ。行きて二人ながらとりて喰はむ。」とぞ罵りける。鞍馬の毘沙門之を御覽じて別當に示現ありければ、別當大きに騒ぎて帝へ奏問申されければ、帝王聞召して、明法道の衆徒を召して、例文を開かせ給へば、申す様、「此の鬼は節分の夜來りて、日本の人を喰ふべし。但し此の鬼の渡るまじきことあり、七人の博士にて、七々四十九軒の家の物をとりて、鞍馬のおく僧正が谷みぞろ池の端なる岩穴塞ぎよく封じて、三石三斗の豆を煎りて鬼の目を撲つといふ事をするならば、鬼の十六の眼を潰されて、抱へて歸り候べし、夫れ猶も鬼が人を喰はむとせば、鯛を焼きて串にさして五門にたて侍らば此の焼串を取るべし。」と、例文にぞひきける。七人の博士を召して、四十九軒の家の物にて鞍馬のおく僧正が谷みぞろ池の彼の岩穴を封じて塞ぎ、三石三斗の煎豆にて、鬼の目撲といふ事をいひて目を撲ちければ、眞の眼うたれ抱へて歸りける。らんば總王申しける、「穴をこそ狭ければ、封じ塞ぎけるとも天をばよも塞がじ、いざや行き取らむ。とて、八萬四千の鬼を牽きつれて雲霧の如く渡りけるを、又鞍馬の毘沙門別當に告げ給ふ。急ぎ帝へ奏聞す。又明法道の例文を引かせ給へば、「吾が朝に五節供といふ事を始めて鬼を欺るべし。」と申せば、さらばとて節供を始め給ひぬ。正月七日に若菜を摘みて

○ふし矢 奉射の當時、神事祈禱のため歩立で、神社に於て大的を射る事。  
 ○花しん 花心、花の蕊の異名。  
 ○鬼呑み 酒を飲み始める時、先づ第一杯を毒見さして呑むのをかく云ふ。  
 ○強ちに賢く 非常に聰明で。  
 ○正覺 正しき覺りを開く事。  
 ○客人神 神社にそへて祭らるゝ神をかく云ふ。  
 ○ちうやう 中天。中年で若死する事。  
 ○本地 本地垂跡から出た語、轉じて縁起の義。

七種とて叩き、三寶に奉るべし。ふし矢の的を射る事鬼の眼を射るといふ事これなり。三月三日桃の花しんを取りて、鬼の睫を呑むとて之を呑む。鬼呑みといふ事なり。草の餅は鬼の身の皮とて之を喰ふ。五月五日にあやめの根は鬼の髮髻とて刻み入れて之を呑む。粽を結ひては鬼の鬚とて之を喰ふ。七月七日に素麵、鬼の血筋腸とて之を喰ふ。九月九日の菊の花は鬼の眉毛又は身の毛とて酒に入れて呑む。皆この祭五節供の色々をして、その祝ひにせらるゝ。らんば總王之を見て、力及ばず申すやう、「日本の者は強ちに賢く、心健きぞや。たばかられて叶ふまじ。」とて歸りはんべりけり。宮中將は思ふ願ひをめで給ひてぞありける。その後宮はこゝにて正覺ならむとて、百二十年の齡を保ちて、衆生の願を見むとて、きた山に貴船の大明神と生じましくて現じ給へり。衆生の守りとなり給ひける。中將どのも百八十年の齡をたもち、客人神と顯はれて、衆生を守り給ひぬ。寛平法皇の御代より一門の契りありしなり。されば貴船の大明神を信じ奉らむ人は、病ちうやうを除き、不老不死ともなり、鬼神の難をも遁るべし。妹背の命も長からし、諸願成就すべき事さらしく疑ひあるべからず。それに依つて斯かる本地由來の物語、祕すべし。

鶴のさうし

上

○宰相 參議。  
 ○右兵衛督 右兵衛の長官。  
 ○かけ給ふ かねられる。

○艶きたる 上品な  
 ○心ありて 情こ、ろがあつて。

情深うして、富貴の家と榮ゆる事、中比宰相にて右兵衛督をかけ給ふ人ありけり。父は左大將むねまさとして、世に覺えいみじかりしが、此の宰相は殊更慈悲心深く、飢ゑたる者に食を與へ、簞れたる人に衣裝を取らせ、我が身の上を忘れ給へば、何時しか家貧しくなり、朝餉夕餉の煙も絶え、春夏の衣をも脱ぎ更へむたよりもなし。自然人の交際も薄くなり、親しきも遠ざかりければ、かくて世に生存へ、時めく人に蚩はれむも心憂し、いかなる山林にも籠り、身の隱家を求めむとて、只一人することも知らず、迷ひ出で給ふ。或る山陰に草の庵の有りけるを、一夜の宿と頼みて夜を明し給ふ。

夜明けて里人來り、「是れは人の住む家ならぬに、如何なる人なれば艶きたる容姿にて、この内におはします。」と咎めければ、「我は行方もなき世捨人なれば、汝等心ありて孚みてくれよかし、我が身に叶ふ事をば、如何なる奉公をもし侍らむ。」と宣へば、里人聞くより



も、「御身の姿にて田の草を取り、畑打つ事もなるまじ、只何處へも行かせ給へ。」と申しければ、力及ばぬ次第とて、庵の内を出で給ふが、やうく力弛み足も立たざりければ、一足踏みては畔に倒れ、二足には巖の苔に打轉び、行きやらぬ風情を、里人哀れと思ひければ、「如何に聞召せ、我々一日の營みだにも容易からねば、御身を養ひ奉らむとも叶ひ難し、さりながら餘り御痛はしく候へば、是れに留まり給ひて、晝は稻葉の鳥を追ひ、夜は小男鹿を拂ひて給はらば、此の所に留め申さむ。」と言ひければ、「如何にも孚みて賜びたまへ、嬉しき人々の志かな。」と涙を流し給へば、里人も情深く、柴の庵を設ひて留め奉る。己が食を分けて其の日の飢をば助けてけり。日も漸々暮れければ、里人は皆歸りて物荒涼じき山陰に、唯一人臥し給へば、秋風烈しく身にも染みて、露の手枕安からず、事問ひ交すものとは、虎狼野干の叫ぶ聲、耳に従ひ目に觸れて、昔の夢も結ばねば、何に樂しむ世の中ぞや。傳へ聞く唐土のちやうさうといひしもの、世の交りを疎み果て、七珍萬寶を捨て、山中に籠り居て、悟りの道を得るとかや。我は濁世の凡夫にて、觀念座禪の力もなし、只一念の功力にて、安養淨土の營みには、佛の名號に若しくはなしとて、高らかに念佛して夜を明し給へば、鳥類畜類も其の聲にや静まりけむ、早稻田の稻も食ひ荒さず、晚

○露の手枕安からず  
野宿の如き有様  
悲しく涙こぼる、様  
こをかけた。  
○野干 狐の異名。  
○安養淨土 極樂淨  
土と同じ。

○穂並 穂が並んで  
現はれて居る事。

稻の穂並も其の儘色づく秋となりけり。里人は是れを見て、「あら不思議や、我々終夜鹿返しを立てて鹿を追ひ、鳴子を引きて鳥を拂へども、荒れ果てにたる田面此の如く、始めてかやうに榮ふる事、御身の恵みと覺えたり。是れ菩薩の化身なり。」とて悦ぶ事限りなし。漸うに孚みけれども、粟の飯糰の粥にて貯へ置ける物もなし。晝は來りて慰め奉り、畑を打ち稻を刈り御目にかけて、日數を送り給ふなり。  
ある日の事なるに、柴の庵を立出でて、田面の中道を踏み分けて、落穂を拾ひ、袖に入れ、霜の下草打拂ひ、移ろふ菊を摘みためて、昔の事を思ひ出で、今の浮世を慰みて、四方の梢を眺め給ふ。鋪彩る山の端は、染むる時雨や厭ふらむ、雲居を渡る鴈音は誰が玉章や掛けつらむ、忍ぶ甲斐なき故里も、今更思ひ出でけれども、一度厭ひし浮世なれば、立歸るべき心地もせず、柴の樞の屢も、住めば都の心地して、日も暮れかたになりぬれば、ありし庵に立歸らむとし給ふ處に、何處とも知らず、雛鶴一つ飛び來り、澤邊の小田の片淵に降り居つゝ、漁りしてこそ居たりけれ。宰相熟見給ひて、あらゆるの鳥の姿かな、費長房といふ仙人は、鶴の翼に宿をとり、虚空を翔ける例あり、衛の懿公と言ふ者は、鶴を愛して一生を暮すとかや。我はせめて野鳥の鶴を愛しつゝ、今日の憂き日を慰ま

○柴の樞 柴の扉。  
小さい雜木を束ね編  
んで作つた戸。  
○費長房 續齊諧記  
に出て居る方士、菊  
酒と藥賣りによつて  
豪家桓景の災難を九  
月九日に救つた傳説  
が存する。  
○衛の懿公 國王臣  
下を愛せず鶴のみ愛  
し外國に滅ぼされた

○天の網 細い絹糸を編んだ網、霞網とも云ふ。  
○壽命せんくわ 壽命運化であらう。

むと、岸の隠れに佇みて、驚かさじと見給ふなり。斯かりける處に、男子一人堤傳ひに忍び寄り、天の網を引延へて、彼の鶴を手捕りにして、首を振ちて、羽交の下にぞ敷きにけり。無慙やな雛鶴は、今まで虚空を翔り水を渡り、思ふ事の有りけにも無きに、彼の男に生捕られ、今を最後の一聲は、壽命せんくわと聞えたり。宰相これを聞き給ひ、只今の鳴く聲は、千年の鶴命終ると悲しめり。これを聞きながら目の前にて、殺さむ事我殺生となるべきと思しければ、するく走り寄り、「如何に御身は、何とて其の鶴をば取りて害し給ふぞや、我に得させ候へ、親の孝養に放つべし。」と呼ばはり給へば、男子聞きて呵々と打笑ひ、「和殿は何者なれば、偶捕りたる此の鶴を、得させよと乞ふこそ不思議なれ。我は此の里の傍に住む獵師なるが、明暮江河の鱗を漁り、山野の獸を捕りて、一生を過ぐるなり。此の四五日は如何したりけむ、沖の鷗磯千鳥の一つも捕り得ずして、妻子が飢ゑに臨みしなり。今日偶捕りたる此の鶴は、天の與へと思ひしに、くれよと言ふこそ心得ね、活けて置くにこそ人の怨みも有るべけれ。」と言ふ儘に、鶴の細首引き延べ、己が小脇に引敷きて、力を出して締めたりけり。宰相愈悲しく思召し、獵師に取り付き、「暫く待ち給へ、假令殺し給ふとも我が言ふ事を聞き給へ、釋尊一代の御法にも、人間と生れ

○人の交情をさくる 事 人々との仲のよいのを妨ぐる事。  
○さがなき人 性格のよくない人。  
○在家 僧に對する在俗の人。

○我が餌食ともならはこそ 私の食料品になるのなら我慢もするが。

む者、五戒を保ちて佛果を得る、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒戒是れなり。上代の事は儲置き、五百戒を保ち給へども、末世濁亂の我々は一戒をも保ち難し。それを如何にと言ふに、先づ偷盜戒は盜人の事、手を出しては取らざれども欲しきと思ふ妄念は日々夜々に絶え難し、此の執著の盡きざれば、偷盜戒も破るなり。邪淫戒は夫婦最愛の事なれば、俗體にては保ち難し。妄語戒は虚言を言ひ人の交情をさくる事、さがなき人に交はれば、これも保つに難かるべし。飲酒戒は酒を絶つ事、上一人より下萬民に至るまで、悦びの處には酒を以て富貴をなし、哀傷憂への座敷にも酔ひに化して忘るれば、これも在家は叶ひ難し。其の内殺生戒を第一として、殊に之を戒め給ふ。御身如何なる果報にて、世の營みも多かるべし、生きたる物の命を取り、明日をも知らぬ露の身を、助からむと思ふ心の罪深さよ、其の上鶴は千年の齡を保ち、人間にも勝りたり、假令我が身は鶴に代りて死するとも、助けて給べ。」と宣へば、獵師愈腹を立て、「我は賤しき者なれば、五戒も十戒も辨へず、只價もいらぬ魚を漁り、人も咎めぬ鳥を捕り、調味して喰ふ時は、罪も報いも覺えぬなり、御身の命に代り給ふ共、我が餌食ともならばこそ、由なき人に見付けられ、時を移して妻や子供の待つべきに、こゝ放し給へ。」と怒りければ、宰相聞き給ひ、「實に道理と

○一期の一生涯の  
 ○大きよせんちよ  
 大蔵千町か。  
 ○せめう せんみや  
 う(宣命)の説、室町  
 時代の流行語として  
 せみやうを含ますと  
 云ふ、旨を理解させ  
 る事。

思へども、昔も然る例あり。釋尊の昔薩埵王子と言ひし時、御懷の中へ山鳩一つ飛び入りぬ、後より白斑の鷹追ひ來り、其の鳩出し給へとせめければ力及ばせ給はず、鳩の代りに御身の肉を切りて鷹に與へ給へば、流石鷹、心ありて、御志の有り難さに鳩を助けて歸りしなり。其の善根にて一代の教主釋迦牟尼佛と生れ給ひ、鷹も優しき心にて成佛したると説かれたり。御身殺生し給ふ事、五逆の罪には勝れども、今一念の慈悲心にて無量の罪を滅し、極樂世界に生れ給ふべし、鶴の代りには我重代の守なれどもこれを參らせむ。」とて、肌にししたる金作りの刀をこそ與へ給ふ。さて元より慾心深き者なれば、莞爾と打笑ひ、此の刀を代なしては、一期の貯蓄あるべきと思ひければ、「今日より獵師を止むべきなり、鶴を御身にまゐらする。」とて急ぎ我が家に歸りけり。宰相嬉しく思召し、鶴を抱き取り、「汝心あらば物を聞け。大きよせんちよにいづれば獵師の憂へ有るとは此の事ぞや。唐土の鳳凰は聖人の時世に出で、賤しき者の見る事なし。汝は日本の鳥の王として、此の淺澤に降り居つ、捕られけるこそ淺ましけれ。今より後人なき島に下り、千町が野邊に求食りして、人近づかば飛び去り、小田の傍の稻垣は、天の網と思ふべし。」と能くくせめうを含めつ、鶴を放ち給ふなり。彼の刀と申すは家に傳はる重寶なれば、乞食非人の後ま

○善根 善果を得可  
 き行爲。  
 ○やんごごなき 尊  
 き。  
 ○上臈 貴婦人。  
 ○桂 婦人の唐衣の  
 下に著る衣。

でも、肌を放さじと持ち給ひしかども、慈悲の心を先として、獵師に與へ給ひし御志、例  
 少なき善根なり。宰相暫く鶴の後を見送り給へば、鶴も心ありけるにや後を見返りくつて  
 雲路遙かに上りければ、嬉しく思召し柴の庵に歸り給ふ。明くる日の夕暮に、さもやんご  
 となき上臈の下女一人連れて來り、「此の庵の内に案内申さむ。」とこそ呼ばはりける。誰な  
 るらむとていで給へば、年の程二十許りなる女房の、濃き紅の五つ重に、綾の袿に顔隠  
 して立ち給ふ。宰相御覽じて、あら淺ましや、如何なる變化の物なるぞや。斯かる山中に  
 斯様の人の來るらむ事思ひも寄らぬ事なれば、身の毛も彌立つて覺えけれども、臆したる  
 氣色もなく、「如何なる人ぞ。」と問ひたまへば、女房立寄り、「我は都の者にて候が、故なき  
 人の妬みをうけ、何處ともなく出でけるが、焚く火の光につきて此の處に迷ひ來りたり、  
 一夜の宿を貸し給へ。」と申しければ、宰相聞召し、「よし何處の人にもおはせよかし、此  
 處は人里遠き處にて、我ならで住む者もなし、夜更けぬれば鹿獸の凄じく、嵐烈しき山  
 彦は、雷の如くなれば、いかでか明かさせ給ふべき、何處へなりとも御志の方の侍らば  
 送りて參らせむ。」と言ひければ、女房聞きて、「いやとよ、何處を終の住所とも定めず、頼  
 むべき方も有らざれば、ひらに一夜を明かさせて給ひ給へ、野邊の千草の葉毎にも、露の

○樞の前 戸の前。  
即ち入口の端。  
○いさゞ狭筵の  
よいよ寒いさかけた

○誠の道心 徹底し  
て悟脱した人達の心  
○世の誇りを慎しく  
世間の悪口を憚つ  
て。

○翡翠のかんざし  
當時の流行語と見え  
る、濃い黒髪を云ふ

宿りは有るものを、森の茂みの木隠れは、翼の宿となるぞかし、ましてや御身は世捨人の身の、問ひ寄るこそは他生の縁、庵の内に叶はずば、軒端の下の轉寐に、何か無情くまします。」と、怨み顔に見えければ、宰相も流石岩木の身ならねば、「餘り見苦しき庵の内の恥かしさに否とは申しつれ、さらば此方へ入らせ給へ。」とて庵を開きて入れ給ふ。狭き藁屋の内なれば、女房二人をば奥の間に宿し、我が身は樞の前に臥し給ふ。其の夜は殊に物寂しく、軒端を誘ふ秋風、肌はいとゞ狭筵の、露微睡まむ由もなし。藻屑の烟焚きすさび、世の憂き事を語り給ふ。女房言ひけるは、「御身の容貌を見奉るに、いかさま通常人とも覺えず、流竄人にてましますか、自らも故ある者なれば、今日よりはれに止め置き、妻と定め給ふならば、寶を與へ奉らむ。」とぞ申しける。宰相怪しく思ひながら、元より誠の道心ならず、身の貧なるに従ひて、世の誇りを慎しく、暫しは隠れ給へども、未だ御年廿一、盛りの花の山櫻、雲に隠るゝ風情にて、誘ふにつけて色に愛で、熱々と見給へば、翡翠のかんざし婀娜に、青柳の風を含める装ひ、打頂低れたる顔容は、雨に靡ける海棠の眠れる花の姿なり。我古の清涼殿の御遊の時、數多の女御后を見しかども、斯かるめでたき貌はなし。唐土皇帝の楊貴妃は、一度笑めば百の媚、君が心を迷はして、世の政道を亂すと

○消えかゝりたる肌  
の色 雪のやうに白  
い肌と心が消えうせ  
るやうなさかけた。  
○いをねもならはぬ  
臥し馴れぬ。  
○さかしら 恰情ぶ  
る事。  
○そはひ あまへ戯  
れる。こゝでは光の  
淡くなる事であらう  
○らうたけて 愛ら  
しくて。

○番匠 大工の關西  
語。元は諸國から宮  
中へ勤番した大工。  
○時の景物 その季  
節に出来る物。

なり。我も浮世を厭へども、心は空に憧れて覺えず寄り添ひ給ひつゝ、昔の筵を褥とし、早稻田の稻を枕にて、寢亂髪ねみだれがみの打勻うちなひ、梅の小枝さざえに降る雪の、消えかゝりたる肌の色、いをねもならはぬ下紐したひもを、解けて寢ざりし宵の間の、悔しかりける睦言むつごは、まだ何事も語らばぬに、遠山寺とほやまでらの鐘の聲、物凄ものすさまじく聞えければ、嬌鳥めづめづの浮かれ聲も、今宵こよひしもさかしらと聞きなし給ふ。誠に昨日までは、秋の夜の長き怨みの床の上、今日は引きかへて、千夜ちよを一夜いちやと願ひ給へども、軒端の山に横雲の、引く月星の光も旭日の影にそばひ、夜はほのほのと明けけれども、訪れ通ふ者もあらねば、扇あふの簾すだれ掲げつゝ、尙熟々と見給ふに、言はむ方なくらうたけて、雅やかなる面影おもかげは、立離れむ由もなし。女房も心打解けて、下女に持たせたる袋の内より、黄金千兩取出し、「是れにて萬計らひ給へ。」と言ひければ、宰相悦び給ひ、今まで孚みし里人を近づけ、此の由かくと宣へば、里人めでたき事なりとて、黄金を受取り、番匠數多呼ばんじやうあまたび寄せて、御殿を結構に造り、衣裳を調へ、召使めいしふ男女數多揃あまたへ、或は道具たぐひを拵こしらへ、俄に長者ちやうじやとなり給ふ。此の事里々に隠れなかりければ、處の侍さむらいは申すに及ばず、土民百姓に至るまで、酒肴さけあなを調へて、參る者もあり、時の景物けいぶつなればとて、果實このみを數を盡して、我劣らじと參りつゝ、今日より御内の者

○外様 一族譜代の臣でなくして臣禮を取つて居る者。

○向様 正面から。  
○巳の時 午前十時  
○午の刻 正午。

○ゆ、しき者 すはらしい者。

となり侍らむと、敬ひける事限りなし。其の品々の引出物、絹小袖を賜はる者もあり、金銀を賜はりて悦ぶ事は限りなし。去る程に其の年も暮れ新玉の春にもなりければ、其の國の守護宮崎左衛門督といふ人身内外様の者百餘人召し具して、朝鷹狩に出でにけり。裾野の原の勢子の者、二行に立つてぞ狩り廻る。峯とも谷とも分かずして、雪間の草を采とし尾上の松を目に掛けて、四方の谷より狩り上る。岩を飛ばせ、古木を拂ひければ、雉、山鳥は言ふに及ばず、野干臥猪の床までも、隠れむ方もなかりけり。大鷹小鷹の飛び違ひ、中有にて組んで落つる處を、押へて取るものもあり、兎、貉を目に掛けて、弓矢を取つて追ふもあり、太刀、刀を抜き持つて、猛りてかゝる猪を向様に打つもあり、巳の時の初めより午の刻の下りまで、打留めたる鳥獸、數ふるに違あらず、面白かりし見物なり。各立歸らむとせし時に、春雨濕やかに降り注ぎければ、思ひくく木陰に宿を借り、岩の洞に立隠れて、雨を凌ぎて居たりけり。宮崎殿は、馬に乗り谷に降り給ふが、とある山陰に煙の立上りければ、人里やあると、只一人駒を早めて行き給ふ。堀の船橋打渡り、内の體を見給ふに、四重に塀をかけ、屋形の棟數數多あり。あら不思議や、我が領内に斯かるゆゑ、しき者の有りけるぞや、如何なる者の住むやらむと、小柴垣の陰に休らひて、暫

く佇み給ひける。宰相も北の方も見る人ありとも知らず、南面の廣縁に立出でて、庭の花を見給ふに、梢色添ふ初櫻、かつ散り初むる眺めつゝ、北の方取敢へず、

かぞいろの育てあけにし甲斐もなくいたくも雨の花をうつ音

と口吟み給へば、宰相殿も思ひ續けて、北の方を熟々と見給ひて、如何ばかりの事か思ひ出で給ひけむ、

初櫻色にそめぬる春雨は花の紐とくつまにぞありける

と、打詠じ給へば、北の方打笑みて、

春雨は同じけしきにすさめどもあだにも散りし花の色かな

と戯れ給ふを、左衛門督熟々と見て、あらぬ思ひのつき添ひて、立忍ばむ由もなく、さし現はれて覗き給へば、

中

北の方御覽じて、「あれは誰なるらむ、あら恥かし。」とて、宰相諸共に内に入り給ふ。宮崎殿は今一度見る由もがなと佇み給ふを、人々参りて、「やうく雨も晴れ候へば、歸らせ

○かぞいろ 父母。千載集の歌に、「四方山に木の芽春雨降りぬれはかぞいろはこや雨のたのまむ。」

○思ひ續けて 歌を考へつゞけて。

○あらぬ思ひ 變つた思ひ、今まで感じなかつた戀心。

○心地怪しきと云云 病氣である云ふので馬上にも堪へぬ風であるから、臣下が駒の口をこつたり、主人の腰を抱いたりして漸く邸へ運んだのである。  
○便なれども不都合ではあるが。

○内侍の局 内侍所の掌侍を勤めた婦人を内侍と云ふ。局は婦人の部屋から轉じて婦人の尊稱。

給へ。」と諫めけれども、只茫然として物も更に宣はず、御心地怪しきとて、駒の口を取り御腰を抱き、御内の人々前後に立ちて我が家に歸りたまひけり。今は只管戀の病と臥し沈み、せむ方もなく思ひければ、御内の侍に田邊の七良とて、萬賢しき者の有りけるを呼び出し、「言ひ出すにつけて便なれども、狩場の山の主の女を一目見しより、其の面影の身に添ひて、斯かる病となりけるは、いかゞして薰る煙の胸の中、思ひ消えなむ 謀を、よきに計らひて得させよ。」と有りければ、七良承り、是れは理なき事を思ひより給ふものかなと思ひながら、さも言はば、いとゞ物病にやなり給ひなむ、暫し慰めばやと思ひ、「それこそいと易き事なるべし、男女の習ひ、慕ふに靡かぬ者はなし。我々が伯母に内侍の局と申す者は、元は都に宮仕へして、萬優しき人なるが、此の三ヶ年は、此の處の傍に、さる者と語らひて侍るが、常に彼の家に入る由を承る、此の人を呼びて、事の心を尋ね給へ。」と申しければ、宮崎悦び給ひ、「それこそ然るべき神の御引合はせと覺えたれ、急ぎ呼び寄せ侍れ。」と聞えければ、廳て使立てられけり。局参りて、「何事の御用なれば自らをば召し給ふぞや。」宮崎殿枕元近く呼び寄せ、「扱も此の山の彼方に、いみじく作りし家居には如何なる者の住みけるぞや、主の名をば何と云ふぞ。」と問ひければ、局承り、「自らも去年

○更衣 女御の下に位して天子の寵を受くる女官。

○思ひ所 これは思ふ所。非難缺點。

の冬より折々参り候が、主の御名は誰と知りたる者も候はず、北の方も、去年の秋迎へ給ふと承る、誠に家榮えて、今長者とぞ申しける、只天より降人の様にこそ言ひ習はしはべる。」と語りければ、宮崎聞き給ひ、「扱も其の北の方は年は何歳になり給ふぞや、さこそ情の深からむ、覺束なし。」と問ひたまへば、局承り、「されば御年は二十ばかりにてもや候べき、容顏の美しき事申中々賤しき口にて言ひ難し。我古都にありし時、數多の女御更衣を並べ置き、花の譬にせられしが、御名は定かに言ふに及ばず、先づ初春の梅は雪の内より咲き出でて、其の匂ひ懐かしけれども、枝こちたく、柳は枝嬾かなれども匂ひもなし、花もなし、されば何れに擬へても、思ひ所はあるものを、此の人と申すは、梅が香を櫻の花に匂はせて、柳の枝に咲かせても、春の過ぎむ事をのみ、見る人惜しまでや有るべき。唐土の幽王の世を亂れし褒姒が姿、越王勾踐の再び國を覆されし西施の面影と言ふとも、是れにはよも勝るべき。聲いと匂やかに愛敬ありし 毗は、如何なる鳥の夷なりとも、心を迷はさでは有るべき、哀れ殿の御目に掛けばや。」と、言葉に花を咲かせて申しければ、いとゞだに堪へ難き物思ひに、此の物語を聞くよりも、忍ぶべき心もなく、「さても其の人を如何にも申し媒介して、同じ枕の轉寐こそ叶はずとも、此の思ひを告げて賜ひ給へ、さ

○薄様 薄い紙、鳥の子紙或は雁皮紙のうすいもの。

○仇なる者 輕薄な者。

らば御身の爲も、いかでか疎畧に思ふべき。これは當座の引出物なり。」とて、側にありし綾の小袖を取らせたまへば、局嬉しく思ひながら、主ある人に如何して言ひ寄らむ、由なきことを語り出し、行末いかゞあらむと思へども、「さらば先づ御文を遊ばせ、便りも有らば、御目に掛け侍らむ。」と申しければ、宮崎硯を取出し、紫の薄様に梅花の勻ひを焚き染めたるに、思ふ心の底までも、細々と書き流し、「せめて一筆の御返事もがな。」と、涙を添へて渡し給へば、局、文受取りて急ぎ我が家に歸り、色も妙なる花を折り、宰相殿へ参りける。北の方出で給ひ、「あら珍らしや、如何なる風の誘ひつ、思ひ寄らずの花の色、懐かしき局かな。」とて奥の間に召し入れて、先づ酒肴を調へて饗應したまふ。局申しけるは、「此の程は彼方此方と打紛れ、御訪問も絶え果てて、仇なる者とや思すらむ、只今参る事別の仔細にて侍らず、自ら住み荒したる蓬生も、春は隔てぬ花の宿、夕つ方入らせ給ひて、臘月夜の終夜慰め奉らむと申さむ爲に参つて候。」と申しければ、北の方、「誠に切なる志にて侍れども、假にも立出でたる事もなし、又殿の心も取り難ければ叶ふじまき。」と仰せけり。局企みし志違ひて、斯くと言ひ出すべき言葉もなく、暫し浮世の物語しけるが、懐より玉章を取落したる體にて、「これく御覽候へや、只今まるる途にて、此の文拾ひ

候が、いかさま故ある人の手遊みやらむ、やうがましく認めたり、御慰みに御覽候へ。」と申しければ、北の方受取り給ひ、開きて見給ふに、誠に御言葉を盡しつ、奥に一首の歌あり、

はるくくとめよる宿の櫻花親しからぬも隔つべきやは

と有りければ、「面白き歌の心かな、古き言葉に、遙かに人家を見て、花あれば入る、貴賤と親疎を論ぜずといふ詩の心を引直して詠みたる、いかさま是れは又初々しき人に思ひ亂れたる人の文なるらむ、見るにつけても痛はしく侍るなり。」とて、局に返し給へば、局便宜よしと思ひて、「よし／＼誰人の文なりとも、御手に觸れさせ給ふこと、他生の機縁深かるべし、捨文の返しと思召し、只一筆遊ばして、自らに賜はれかし。」と申しければ、「戯れ言を言ふ人かな。」と打笑ひて、兔角紛らかし給へば、重ねて言ひ出すべき由もなく、日も暮れければ、「又こそ参るべけれ。」とて立歸る。宮崎殿に斯くと申しければ、「扱は我が文を御手に取り見給ふかや、歌の心を感じ給ふ上、などか御心の無情かるらむ、又明日も参りて御返しを取りて賜べ。」と聞ゆれば、局も如何にもしてと思ひければ、それより日毎に参りて、包む氣色もなく、初めよりの事ども灰かし、「あはれ浮世の習ひに、人の心を慰め給

○遙かに人家を見て云々 和漢朗詠集に「遙見人家一有花人、不レ論貴賤與親疎。」

はば、頼む方なき我が身までも、寄る邊も波の助船、焦れて消えむ泡沫の、怨みの程も盡くべきか、其の上思ひ染めし憂き人は此の國の主なれば、一つは情と言ひながら、處にては處に従ふ習ひなれば、もし一筆の御返しもましまさずは、誰か其の怨みを忘るべき。」と申しけれども、「人の聞かむも憚りあり、今日より局まるるべからず。」と、簾中深く入り給ふ。力なく立歸りける。宮崎殿に申しけるは、「如何なる雲の上人も、情の道は知るものを此の人は眉目容貌こそ生れつきたため、心はさすが田舎人、物をも知らぬ人なれば言葉の色をも聞き知らず、自らが使には叶ふべきとも覺えず、只思召し留まり給へかし、面目なく候。」と言ひ捨てて走り歸りければ、今までは使の歸るを便りにて少し心も慰みけるに、頼み寄るべき縁もなし、せむ方なく思ひければ田邊の七良を呼び出し、「もしやと頼みし吾が戀の、空しくなるこそ無念なれ。我が領内にありながら上も恐れぬ女は、押寄せて奪ひ取り、無情き心に思ひ知らせむ、はや打つ立て。」と怒りたまへば、七良由なきことと思へども、氣色變りて見えければ、「尤も然るべき御計らひなり、某一人なりとも忍び行き、奪ひ取らむはいと易き事なれども、彼もさすが故ある者と聞えければ、欺くに及ばず、軍勢を催して、一方の山より攻め下り、東の方を開けておこならば、定めて夫婦郎従も落ちて

○齋ひ入れ奉らむ  
大切にして入れ奉ら  
うの意。  
○きらの兵 綺羅の  
兵、精選の軍兵。  
○庭騎 庭前で馬を  
乗り馴らすこと。

行くなるべし、行かむ處を道に兵を伏せて、男をば切つて捨て、女をば抱き取り、この御館へ齋ひ入れ奉らむ事、今日の日を過すべからず、御心易く思召せ。」とて、頼もしけに申しければ、宮崎悦び給ひ、「片時も早く見奉らむに、軍勢を催せ。」とて、きらの兵三十八騎、雜兵合はせて百五十騎の軍兵を揃へ、今日の暮方に押寄せむとて、馬に鞍を置き、庭騎する者もあり、太刀、刀を磨ぎ、弓の弦を食濕し、日の暮るゝをこそ待ちたりけれ。此の事隠れなかりければ、里へ急ぎ宰相殿に参り、「只今押寄せ申す。」と告げければ、宰相は夢にも知らせ給はず、北の方に云々と語りたまへば、元より我故と思召し、初めよりの事共語り給ふ。「力なき次第なり、誠に御志有り難く侍れども、我故に御身の命を失ひ給はむも心憂し、一先づ彼の方へ行き給ひ、人の心を慰めて夢の浮世を暮し給へ、御心變らずは、二世の契りなりしと聞きければ。」「愚かなる人の言葉かな、賢臣二君に事へず、貞女兩夫に見えずと申す事の候へば、一度たのみし御身を捨て何處へか行くべきぞや、もし軍勢の寄せ來らば、御身を先に立てて切つて出で、思ふ儘に軍して、叶はぬ時は引籠り、刺し違へて死出の山三途の川を、手に手を取りて行くなれば、何の恨み事か候べき。其の上千萬餘騎寄せ來るとも、自らが謀にて追ひ拂ひて見せ申すべし、太刀も刀もいるまじ。」

鶴のさうし

○二世の契り云々  
此の下に脱文があら  
う。  
○三途の川 地獄、  
餓鬼、畜生を三途と  
云ふ、夫れを川に喩  
へた。



○下り拳 弓を下向けて射る弓の術語。

○かみよ 神の意味であらう。

とて、一間所に引籠る。さもゆ、しき姿にて、寄する敵を待たたまふ。去る程に日も西山に傾けば、時分よしとて、宮崎を先として、百五十騎兵等、太刀、薙刀の鞘を外し、さも嶮しき山路を、谷も谷とも崖とも言はずして、三方の峯に馳せ上り、館を目掛けて弓取直して、下り拳に差詰め引詰め散々に射たりけり。其の中に田邊の七良進み出で、味方の軍兵に向つて言ひけるは、「方々は如何心得給ふらむ、弓矢を留め給へ。是れは聊かの怨み言せむため、此の處へ寄せ來りたる人を威さむ其の爲の謀なり、よし敵を射殺さば勳功は儲て置き、かみよの御不審を蒙るべし、今日の軍の大將は此の七良が承りたり。」とて、只一人門外まで馳せ來り、大音揚げて言ひけるは、「只今爰に寄する事別の仔細に候はず、此の山中に隠れ給ひて、夜討、強盜を業として、いみじき有様を聞召されて、討つて參らせよと、忝くも宣旨を帶して參りたり。誠は身の咎の有るならば、尋常に腹を切り給へ、さも無くは主に出でて、其の理由を申し開き給へ。」と呼ばはりければ、籠り居たる若黨共驚き騒ぎ、「寄手は雲霞の如く近づきけるに、何とて臆し給ふぞや、早打出で給へ。」と薙きけれども、宰相殿、北の方に諫められ、少しも驚き給はず。暫くありて北の方「はや敵の寄せ來りたるやらむ、物騒がしく聞えけるぞや、いでさらば防がむ。」とて、何時よりも尋

○夜叉 佛教の猛惡な鬼神、後、佛に歸依し佛教の守護神となる。

○羅刹 佛教の惡魔人を食ふと云ふ惡魔な魔。

○弦をはせ切る 誤りがあらう。

○心經 般若心經。

常に出立ち、皆紅の扇を持ち、廣縁に立出でて虚空を招き給へば、宮崎これを見て、「一人静まりたまへ、わが思ふ敵の立出でて、此方を招くは降參すると覺えたり、御迎へに參れ、七良。」と、獨笑して悦びけり。あら不思議や、俄に山風烈しく吹き、黒雲一羣棚引きて、館の上に立覆ひけるが、雲の内に異類異形の物こそ見えたりけれ。眉目よき女房の具足、兜を鍔ひつ、弓矢を持つて進むもあり、夜叉、羅刹の形にて、矛を持つて振るもあり、鷲、熊鷹の人業に、劍を植ゑたる如くにて、敵の前に飛び行きて、弓の弦をはせ切るところもあり。

蝶、蜻蛉は甲兜の隙間を狙ひ、眼に塞りて、さしにも猛き武夫も、働くべきやうもなし。寄手の人々呆れ果てて、心も消え、そのまゝ、絶入る者もあり、退く事も叶はず、まして進むに及ばねば、馬諸共に立竦み、我助け給へと、天に祈誓し念佛申し、さも哀れなる有様なり。

されども田邊の七良は、文武二道の者なれば、大將の前に馳せ歸る。「さればこそ初めより由なき事と思へども、仰せを背き難きにより是れまで御供申すなり。天より降人と聞きしが、偽りならず覺えたり、如何様佛神の化身なるべし。佛の怒るを鎮むるには、心經に

○高らかに讀み經を。

若くはなし、心の内に祈念して、御經を讀誦し給ひて、惡魔を鎮め給へ。」と高らかに讀みければ、次第々々に雲晴れて、變化の者も失せにけり。人々悦びて危き命助かり、我先にとぞ歸りけり。館に歸り誰々討たれたると思ひ給へば、殊に御經の功德にや、手負うたる者一人もなし。宮崎悦び給ひ、「我邪の働きて、斯かる奇特を見る事よ、偏に佛の方便なれ、これを菩提の種として、今日より浮世を厭ひつ、佛道を願はむ。」とて、日比貯へ置きたる財寶を貧なる者に與へ、慈悲第一の人となり、後生善所の營みは、有り難かりし發心なり。惡に強き人は必ず善にも強き事、今に始めぬ事どもなり。去る間宰相殿は不思議の難を逃れ給ひ、北の方に宣ふやう、「初めより御身は尋常人とは覺えぬに、只今の事どもは人間の業ならず、いか様佛の化身と拜み奉るなり、此の上は包ます名を名告らせ給へ。」と有りければ、「いやとよ、自らが計畧にあらず、御身心素直にして慈悲深き人なれば、佛神の力を添へ給ふ事の有り難さよ、いざさらば自らが父母のもとを見せ奉らむ。」とて、夜に紛れ、只二人忍び出で、山路遙々と分け入りて、嶮しき谷に下り給へば、數千丈高き巖より白き布引延へたる如くなる瀧の白波漲りて落ち、岸根の松は枝垂れて、心凄き苔の細道踏分けて、片山際の洞の中へ入ると思へば、宮殿樓閣は臺を竝べ、七寶莊嚴の眞木柱、

○眞木柱 眞木で造った柱、立派な形容

○咸陽宮 秦の始皇帝の宮殿。

○介錯 介抱する意

○公卿 三位以上の貴族。

○殿上人 昇殿を許されたる貴族、通常五位以上。

○色代 挨拶會釋する事。

○さしをけ 空津保物語の倭寇の諷りであらう。  
○上の空なる戀をして 千載集の歌、「一目見し人は誰さも白雲の上の空なる戀もするかな。」

金銀の瓦を敷き竝べ、咸陽宮の大内裏と申すとも、是れにはよも勝らじと思ひつ、踏む足もしどろにて、めでたう遙かに入り給へば、内よりも青侍官女と思しき者、われ先にと微語き、北の方に取附きて、珍らしくも入らせ給ふものかなとて前後に立つて介錯申し、奥の間に請じければ、又公卿、殿上人と思しき人々走り出で、宰相殿に色代して、是れも同じ座敷に直し、煌々しき體なり。其の中に女御と思しき人、宰相殿の前に寄り、「萬恥がましき我が姫を、留め給ふ御志、何時の世にかは忘るべき、疾く入らせたまへと申すべきを、一日々々と打過ぎ参らせ、明暮御姿を見まほしく思ひしに、遙々これまで渡らせ給ひ御見参に入り奉り、自らが心の内如何許り嬉しく侍ると御推し量りあるべき。それく。」と宣へば、女房達承り、黄金の銚子に杯取添へて出でければ、山海の珍物に國土の菓子を調へて、三々九度の土器は擧ぐるに暇こそなかりけり。「斯かる不思議の處に入らせ給ふ御慰みに、管絃をして聞かせ奉らむ。」とて、琵琶、琴、和琴、簫、箏、篳篥、思ひくく音をとりて、樂の數をぞ盡しける。昔としをけといふ者、唐土にて習ひ傳へし琴の爪、蟬丸といふ世捨人逢坂山に引籠り、琵琶を弾ぜし撥音、用明天皇の古上の空なる戀をして、さんろと呼ばれし時、思ひを晴らす雨の中に、音を取り給ふ笛の音も、是れには争で勝るべき、

○人目つ、まし 人  
目が憚りあり。

○力士 體力の強い  
人。

○後の世かけて 未  
來の世までも。

○仇なる人の心ぞや  
浮薄なる人の心よ

○見届け給はむとも  
思はれず 私の死ぬ  
のを見届けるまで一  
緒につれ添はれよう  
とも思はれない。

只これ極樂世界にて菩薩聖衆の歡喜の時、音樂の曲有り難かりし事どもなり。

かくて夜も明方になりければ、「今宵の御引出物參らせむ。」とて、黄金千兩、銀の盆に積み、綾羅錦繡の巻物を、山の如くに積み上げて、御前に差置き、「夜明けば人目つ、ましければ、御名残惜しく候へども、はや／＼歸らせ給ふべし、我が隠家を初めてお目に掛くる事恥かしく候へども、此の後は常に入らせ給へ。」と、暇乞して出で給へば、「それ／＼送り奉れ。」と承る。」と申して、虚空を翔ける車に、二人の人々乗り給へば、引出物の數々を鳥の翼に乗せ、或は力士に負はせて雲に乗せてぞ送りける。片時の程にて、ありし館に送り著き、皆々立歸りけり。愈其の家繁昌して、近國他國の者共の附き従ふ事限りなし。ある時北の方宣ふは、「申すにつけて恐れなれども、今は父母の許へ歸るべきと思ふなり。假初に馴れ初めて、此の年月の情の色、生々世々に忘るまじ、御名残惜しく候。」とて、打伏して泣きたまへは、宰相聞召し、「あら思ひ寄らずの御言葉かな、後の世かけてと思ひしに、仇なる人の心ぞや、我淺ましき折に問ひ寄り給ふ志、今更何に見落され、捨て給はむとの言葉ぞや。よし／＼それも力なし、御身の父母の有様は、我等加きの凡夫の身を見届け給はむとも思はれず、されども御身は假に浮世に現はれて、語らひ初めし睦言は、隔

○生を變へて 次  
世には人間に生れ替  
つて。

○跡見ゆる事ならじ  
終りが見えますま  
い。盡きますまい。

てぬと思ひしに、せめて三年も添はずして、残り留まる憂きほどは、絶えて存ふべきならず。」と、泣き口説き給へば、北の方聞召し、「その御心の痛はしさに、今まで斯くとも申し得ず、我は誠の人間にあらず、遂に添ひ果つべき身ならねば、先づ此の度は立別れ、生を變へて誠の妻となるべきぞや、御形見の一筆を賜はり、それを知邊とし尋ねたまへ、自らも尋ね奉り、思ふ事なく暮すべし。父母の許にて聞召されし酒は、不老不死の藥にて候、面影も變らず命の終る事も無し。錦金襦の巻物は、如何程裁ちて取り給ふとも、盡くる事も有るまじ、黄金は使ふに従ひて、跡見ゆる事ならじ。いつまで語り侍るとも、名残は愈増るべき、暇申してさらば。」とて、廣縁に出で給ふを、御袖に取りつきて、暫し留め給ひければ、「われをば誰と思召す、澤邊にて獵師に捕られし雛鶴なり、極まる命を助け給ふ、其の恩徳を報ぜむため、人間となりて來りたり、あら恥かしや我が身かな。」と、もとの姿を見えむとて、虚空に飛びてぞ歸りける。宰相はいと哀れに思ひつ、此の二年の情の程、思ひいづれば懐かしく、後を見送り、只茫然と立ち給ふ。

下

○ありし間 元のま  
まの間。  
○遣る方もなき思ひ  
の程 晴らさん方法  
もない戀の程度。

○肘のかゝりまで身  
に添ひて 肘の臂ま  
で身體に附著して。  
○大人しくなるなら  
は 大人に成長する  
ならば。

○姿かゝりより  
姿も髪の様子までも

さて宰相はありし間に立歸り、枕並べし床の上、打著せし中の香の唐衣、今は獨りの手  
枕は、寐覺のたびに別れつゝ、夢にも姿見見えねば、遣る方もなき思ひの程、せめて慰み  
には、身内の者を近づけ、里人を語りひ、春は花の下にて日を暮し、秋は月の前にて夜を  
明し、年月豊かに住みたまふ。其の比三條の内大臣と申すは、君の御伯父にて、時の覺え  
他に異にして、家の繁昌肩を並ぶる人もなし。されども御子の無き事を歎き給ひ、天に祈  
誓し給へば、御納受ましくして、北の御方懐胎し給ひて、程なく姫君を儲け給ふ。されば  
天より具ふ形なれば、耀く玉とも申すべき。父母悦び給ひ、御命長かれとて、玉鶴姫と名  
づけつゝ、數多の乳母をつけ、齋き傅き給ふ程に、愈光増りけり。幼き時は其の心もつ  
かざるが、成人らせ給ふにより、左の腕の肘のかゝりまで身に添ひて、御手自在ならず、  
父母御覽じて、大人しくなるならば、さもあらじと思ひしに、年月に従ひて、斯様に取付  
きてある事は、胎内にての事なるか、産み落したる其の時に、荒く當りし故なるかやと、  
藥を與へて揉み合はせ、色々養生し給へども、其の甲斐なくて憂き事と思ひながら、世の  
人の見る事ならず、只眉目容貌の類なきをば、傍の公卿殿上人聞き傳へく、思ひを掛け  
ぬ人も無し。やうく十三になりたまへば、父母宣ふやう、「姿かゝりより心様も優しけれ

○なみ／＼の人に  
せむも 普通の人の  
妻とするのも。

ば、女御に供へむと思へども、手の叶はぬ事の恥がましければ、御目に掛くるに及びがた  
し、さればとて、なみ／＼の人に見せむも心憂し、如何せむ。」と歎き給ふ折節、關白殿の  
御子に二位の中將と聞えし人、此の姫君を思ひ掛け、人して斯くと宣へば、内大臣嬉しき  
事と思召し、北の方と談合はせ、此の年の八月には必ず參らせんと、御返しありて、其用  
意をぞし給ひける。

○御身偶儲けしこと  
なれば やつこ出来  
た一人兒のお前であ  
るから。

姫君は此の事聞召し、父母に宣ふ、「我は身にも不具候へば、何處へも參るまじ、只御暇  
を賜はれ、片山陰に引籠り、佛道を願ひて靈山淨土に生れむと思ふなり。女御、后も此の  
世許りの樂しみなれば、羨ましく思はれず、ましてそれより下の人に相馴れ侍らむとは、  
更に思ひも寄らず。」とて、歎き悲しみ給ふなり。父母もいとほしき姫君なれば、さのみ愛  
で諫めて、目の前の憂き別れも有らむかと思召し、「菟も角も御身の計らひなるべし、さり  
ながら御身偶儲けしことなれば、片時離れて有るべきかや、我々世にある程は慰めて賜  
び給へ、これ孝行の一つなり、さて亡き後は尙々頼み申すなり。」とて、二位の中將殿への  
營みも差置きて、其の年も暮れ、十四の春にぞなりたまふ。雨の晴間の朝日影、長閑なり  
ける花の色移ろふ東の窓の前に、簾几帳をか、けて、蕾める花に心を痛ましめ、散りぬる

櫻に怨みを添へ、思ひく／＼に花の短冊つけ給ふ。内大臣、

かく散るを見てはくやしき櫻花また來る春は待たじとぞ思ふ

北の方、

雨のうちにはほころびそむる花の色朝日に散るぞ靜心なき

玉鶴姫、

あひいでし若木の櫻さかりぞと見せまくほしき花の色かな

と詠み給ひければ、父母も怪しの歌の心かな、如何なる思ひの有りて、かやうに歌をば詠みけむと思ひながら、心を問はむ由もなし。

おの／＼の歌を、姫君の筆取りにて、短冊に書き留め、庭に下り立ちて、櫻の枝を引き撓めて、結び付けむとし給ひし、其處の枝強くして、姫君の取付き給ふ左の御手を引上げてこそ見えたりけれ。人々驚き、「いかに御手の痛み候や。」とて、庭へ走り下り、御肌を見て、悦びける事斜ならず。さりながら身に取付く事もやと、御肌おんはだに白粉はくかんの煉藥ねりぐすりをつけ給へば、腋わきの下したに玉章たまぎあり。あら不思議やとて、押開き見給へば、只一行ひとくだり、

○あひいでし若木の櫻云々 自分もはや女の盛りになつた人に見せたい。前世の良人宰相を忍ぶ歌である。

○玉章 文字。

いつはらぬ言葉の末を頼みにて

とばかりあり。愈いよいよ不思議におもひ給ひつゝ、姫君に尋ね給へども、「前の世よの事をばいかに知し召めさるべき、自らも知らず候。」とて、顔打赤めておはしける。内大臣殿宣ふは、「此の姫は天より與へたまふ子なれば、如何いか様故よある人の再來さいらいなるべし、斯かる不思議のこともを、下にて計らひ申さむより、ありの儘に奏聞そうもんし奉り、救ちよく詔みことに任せて、免も角も方付かたづき侍らむ。」とて、彼の短冊たんざくを持ちて急ぎ参内さんない申し、初めよりの事ども詳しく申し上げ給へば、帝みかど不思議に思召し、短冊を取らせ給ひ、打返し／＼さ覧らんありけるに、未だ新しき筆の跡なれば、もし見知りたる者やあるとて、大臣、公卿くぎやうの御中へ出し給ふ。其の比才ひさい學優長がくゆうちやうなりし、其の後大將のちといふ人熟々つくづくと見給ひて、「あら不思議や、此の筆は、むねまさの左大將の一子、宰相うじやう右兵衛督みぎべゑのかみが手跡しゆせきに似たる處の候ぞや、此の人は慈悲の心を主として、七珍しちちん萬寶まんぼうを非人に施し、いつしか其の身衰へて、行方ゆかた知らずなり侍るなり。年號を數ふるに今年十五年に罷り成る。内大臣の姫は十四になるなれば、生れぬ先の事なるべし。彼の人世に無き事はよも有らじ、急ぎ尋ね給へ。」と奏聞申されければ、帝愈いよいよ不思議に思召し、「さば官人くわんじんをもつて尋ねよ。」とて、日本六十餘州に宣旨せんじを下し、其の國々の守護しゆごに仰せて、

○救詔 天子の御命令。

○其の後大將といふ人 後大將まで昇進した人。

○なじかは見損じ給ふべき。ごうして見そなひなさう。  
○秋津島が其の中日本國中。

谷、峯、賤が庵まで残る處なくぞ探しける。近國の官人は其の日に歸りて無き由を申し、遠國の國司は五日十日を隔てて、「さやうの人は無し。」といふ。さては此の世に無き身となるかやと、せむ方なく思召すところへ、或る代官の申しけるは、「是れより北山若狭の境の山陰には、天よりの降人とて、此の十五年が閒富み榮えて侍るが、此の人こそ怪しけれ。」と奏しければ、さてはそれなるらむとて、急ぎ敕使を下されけり。其の時の敕使は花園の左中辨とて、宰相の爲には從兄弟なり。彼の處に下り案内もなく入り給へば、宰相はいにしへ二十一にて世を厭ひ給ひし姿、少しも變らざりければ、左中辨なじかは見損じ給ふべき、「如何に御身はこの所におはするかや。此の程さる仔細ありて、秋津島が其の中を處なく尋ね給ふなり、はやく參内あるべし。」とて、取るものも取敢へず、馬に召されければ、宰相殿は夢にも知らぬ事なれば、以ての外に驚き給へども、敕使許し申さず、急ぎ都に上りけり。今までは世を厭ひし人なれば、五位の装束召されしが、いにしへの三位の宰相の装束にて、君の御前に出で給ふ。帝御側へ近く召されて、其の後御物語ども暫く有りて、「さては此の手を見知りたるか。」とて、彼の短冊を出し給ふ。宰相是れを見給ひて、はつと思ひければ、時ならず顔に紅葉を散らし、其の事となく涙浮びて何とも御返しをば

○人々色を見て人宰相の顔の様子を見て  
○思ひ合はする事思ひあたる事。

申さず、頭を地につけてぞおはしける。人々色を見て、さては疑ふ處なし。「御前にて包み給はむも恐れなり、思ひ合はする事あらば、ありの儘に語り給へ。」と、面々申し給へば、宰相申されけるは、「さて此の文は如何なる人の持ち來り、御前には留まり候や、それにつき思ひ合はする事をも、御物語申し上げ候はむ。」と宣へば、「先づ御身の言葉を聞きて、此方にて申すべし、偽りなく語り侍れ。」と仰せければ、ありの儘に申さむと思へども、鶴の變じて契りをこめたる事、誠しからぬ事なれば、少し偽りの申さばやと思ひ、「今は何をか包むべき、某貧しくなり果てて、身の置き所なき儘に、此の十五年以前より、片山里に忍び居て、明暮御經を讀み、後の世を願ひしに、何處とも知らぬ女性の來りつ、自らが妻となり、寶を數多與へけるが、明くる年の春のころ、「我は誠の人ならねば、生を變へて夫婦となり、二世の契りを結ばむ。」とて、互に形見を取交し、其の人の手遊みは是れに持ちて候。」とて、肌の守より、短冊二つ取出し、御前にこそ置きにけり。人々あら不思議やとて見給ふに、

○其の人の手遊みその女性の書いた字

ふた、び生れあはむとぞ思ふ

とあり。初めの短冊と引合はせけるに、紙も同じ紙にて、歌の言葉を讀み續くるに、

いつはらぬ言葉の末を頼みにてふた、び生れあはむとぞ思ふと読み合はせければ、君を始め奉り、御前にあり合ふ大臣、公卿も、あつとばかり感じつつ暫く物も宣はず。

や、ありて救誼ありけるは、「御身心素直にして、慈悲心深くある故に、佛神の御恵みと覺えたり。内大臣それく明し侍れ。」と仰せければ、初めよりの事共、詳しく語り給ひける。斯かる不思議の事どもは、昔も今も末代も有るべき事とも覺えず、急ぎ吉日を選び祝言有るべきとて、昔の屋形をしつらひ、金銀の鏤めて、玉鶴姫を迎へ給ふ。姫君は世の人に見見えむ事を、疎ましく思召しければ、此の宰相とは前世の契りの事なれば、などかは隔て有るべきぞや、何時よりも御心も浮きやかに、悦び給ふよそほひなり。宰相殿は見給ひて、昔契りし面影の、少しも變らざりければ、懐かしとも愚かなり。斯かる目出度き事あらじと、忝くも、君よりの贈物、大臣、公卿の捧物、山の如くにぞ積み上げて、門前には馬車の、所狭きまで見えたりけり。やがて官位を賜はり、左大臣まさあきらとぞ申しける。斯くて其の年の秋に、北の方たゞならずなり給ふが、月日にわづらひなく、明るる五月に、玉の如くなる若君の出で給ひ、それより打續き姫君若君の數五人までこそ出で來

○思召しければ  
れごの誤り。

○何時よりも御心も  
浮きやかに 平常よ  
り心が浮き立つて。

○月日にわづらひな  
く 月日は速く経過  
する事と、その間に  
身體に障りなくをか  
けた。

○不老不思議の藥の  
酒 不老不死と不思  
議をかけた。

○遠國波瀾も 遠い  
國も海中の孤島も。

○出で入る人は袖を  
連ね 出入する人が  
頻繁で、袖と袖とを  
接觸する意。

けれ。何れも容顔勝れければ、あるは后に立ち給ふ御方もあり、あるは關白殿の増にならせ給ふもあり、めでたしとも中々に譬へむ方もなかりけり。去る程に大臣殿は隠里にて羞めける不老不思議の藥の酒の威徳にて、御齡百年に餘り給へども、姿形は老いもせず。元より北の御方は天に稟けたる事なれば、御年重なるに従ひて、花の顔容麗はしく、御恵みの深き事、水に影さす月の如し。されば聖人一人世に出づれば、萬民心素直になりて、いと靜謐なれば、遠國波瀾も穩かにして頼みあり。民の竈も賑はしく、運ぶ貢の道直に、關の閉さぬ御代となりけり。これを以て思ふに、只假初にも夫婦の縁を結ぶ事、前世の契り淺からず、後の世かけても頼もしく、神の定めし中なれば、互に隔たる心もなく、交す情の末遂けて、望まざるに位を進み、貯へざるに財寶をうけ、出で入る人は袖を連ね、ますます富貴繁昌の家とぞなり給ふなり。

いはやのさうし

上

○わりなさは 是非  
なさは。  
○いつきかしづき  
大切にぞだてる。  
○ねびまさり 年よ  
りはませて見える。  
○要文 肝心な文句  
○文珠の化現 文珠  
が此の世に人化し  
て現はれたもの。文  
珠は如来の左に侍し  
智慧を掌る菩薩。

抑おさ清和天皇の御時、三條堀河に中納言有末ありすまの卿と申す人おはしけるが、家富み榮え、何事につけてもとも乏しき事ましまさねば、よろづ御心に叶はぬといふ事なし。しかるに大田の御門みかどの宮白河の姫君と申すを見給ひしより、御心あくがれさま、御心を盡させ給へども、靡かせ給ふ氣色もおはしまさで、明あかし暮くし給ふところに、御志の色深くありしかば、男女なんによのならひのわりなさは、浦吹く風と終に靡かせ給ひけり。たびかさなれば人知りて、誠に雲の上人も、もてなしかしづき奉る。契りくちせぬ習ひにて、宮懐妊し給ひぬ。月日重なれば程なく御産平安させ給ふ。あたりも輝くばかりなる姫君にてぞおはしける。中納言世に嬉しく思召し、いつきかしづき給ふ事限りなし。御年のゆくに隨ひて、いよねびまさり、又琵琶琴などを、十六歳よりうちにて其の源を究め、要文ようもん、法文ほうもん心にかけて、常は御本尊の御前に参り、無常を觀くわんじ、あはれみをなし給ふ。されば文珠もんじゆの化現

○同じ道 同じ死の道。  
○覺束なくて 不安心なので。  
○鳥邊野 山城國京都の東、西大谷の傍にあつた火葬場。  
○まほり給ふ 守られる。  
○めやすく 見苦しからず。  
○西の對 正殿即ち寢殿の西にある家。  
○宮腹 生みの母上が白河の姫宮であつたからかく云ふのだ。  
○めのみ 乳母。對の屋の姫君の乳母。  
○何か苦しう候べき 云々 乳母が中納言に答へた詞、その上の一節の文脈が亂れて居る。

と皆人申合ひにけり。さるあひだ此の姫君、十の御年三月十五日の曉より、母宮風の心地とて惱み給ふが、次第におもりて十八日の曉終にはかなく成り給ふ。御年二十八、惜しかるべき御よはひなり。中納言同じ道にと悲しみ給へども、姫君の御ゆくへ覺束なくて力及ばず。生死無常の習ひ、鳥邊野のほとりに送り、御跡のいとなみ様々とり行ひ給ふ。御形かた見には姫君を明暮あけくれまほり給ふ。繫つながぬ月日なれば、程なく一周忌、第三年も過ぎにけり。さてあるべき事ならずとて、御一門の人々すゝめ給ひて、はじめて北の方を迎へさせ給ふが、姫君に一つ姉なる御娘をもち給へり。我が姫君、人の姫君も隔てなく疎かなるまじとて、迎へ給ひけり。さて北の方めやすくもてなし給へば、中納言世に嬉しくぞ思しける。北の方入らせ給ふ日より、西の對たいをしつらひ、玉の如く磨きたて、宮腹みやはらの姫君をすゑおき給ひけり。それより對の屋の姫君とは申しけれ。明暮母宮あけくれの御事のみ思召して、御本尊の御前にばかりおはします。さて間近まぢかくおはします右大臣と申す人のひとり子四位の少將と申す人、かの對の屋の御事を聞き給ひて、めのとを語らひ中納言殿に申し給へば、いかゞあるべきと思召して申しけるは、「何か苦しう候べき、右大臣の一人子にて御座候へば、愚か候まじ、御同心あれかし」と申せば、さらばとて領承申させ給ひけり。さればいかなる

いはやのさうし



○筑紫の帥 太宰府の帥、即ち長官。  
 ○鎮西 九州に鎮西府があつたため古く九州の名稱として用ゐられた。  
 ○こども 何として。  
 ○こぎ 話相手、徒然なぐさめる者。  
 ○淀 山城久世郡淀川に面した町。  
 ○江口神崎 江口は攝津西成郡、神崎は同じく川邊郡、共に海船の入泊地であつた。  
 ○今様 平安朝末期に、和讃から轉じて出来た新詩形。  
 ○西の宮 攝津武庫郡にある港。  
 ○なんぐう 備中南宮の沖、南宮は吉備津彦神社を云ふ。

不思議のことにや、對の屋十三の御年、父中納言筑紫の帥に成り給ふが、太宰府の旅に赴き給ふが、北の方親子、たいのやの姫君をも具し給ふべきよし聞えければ、四位の少將めのとして中納言殿へ宣ふは、「鎮西までは波の上おほつかなく侍れば、對の屋をば都に留め給へかし、とても御約束のことに候へば。」と申されければ、中納言仰せられるは、「太宰府へ下るべきにはあらねども、對の屋母上に後れて後、いつとなく露おもけなる有様をいつかは晴るべき、しのびかねたる袖の上、ほしあへぬさまのかなしみを、いつ慰むべしともおほえねば、引具して浦々島々をも見せむため、北の御方親子をも、對の屋のときに具するなれば、對の屋とゞめむ事は、ゆめく叶ふまじき。」よしをのたまふ。少將力及ばず。さて都を立ちて淀へつき給へば、少將も淀まで下りて、さまぐ留め申されけれども叶はずして、既にともづな解きて御舟ども出しければ、少將見送り給ひて、泣くく都へ歸られけり。さて帥殿下り給へば、江口神崎の遊君ども参りをり、帥殿御覽じて「われを思はば、對の屋の舟をもてなせ。」とありければ、遊君ども對の屋の御舟に参り、今様面白く歌ひすまじければ、綾羅錦繡を數を知らずたびにけり。西の宮なんぐうの沖をすぎて筑紫へ通り給ふが、帥殿は播磨の國司にておはしければ、播磨の守明石にて御まうけをかま

へもてなし奉る。七日の逗留と披露す。聞ゆる明石の浦なれば、色ある袖にぞ宿りける。光る源氏の大將の須磨より明石の浦づたひ、よせくる波をながむれば、くだけて月ぞやどりけると、ながめしたくなは立つ煙、春霞にぞ似たりける。松吹く風波の音厭ふ嵐の苦やかた、汀にたつえいや聲、あまの釣舟おもしろく、かの行平の中納言藻鹽たれつ、と詠じしも、蟹のたく藻の夕けぶり、さながら薄墨の繪にぞ似たりけり。當國書寫の山、ひろさはより清けなる遊君ども参りたり。「對の屋の舟をもてなせ。」とありければ、彼の御舟にぞあつまりける。くわんざつの袖をひるがへし、ばんみん曲をもよほし、希代の遊びなり。其の時北の方、傳の佐藤左衛門を召して宣ふやう、「われ心に思ふ事あり、叶へむと思はば知らせむ。」とありければ、貞家かしこまりて申す様、「千騎萬騎の敵の中、又いかなる磐石を碎きわりて入る路なりとも、仰せをいかでそぶくべき。」と申しければ、北の方うちゑみ給ひて、「此の事のめく人に知らすな、心の怨みといふは、われも人も只ひとりづゝもちたる姫ぞかし。我れ姫をば親子ともおもはぬ有様にて、たゞ對の屋をのみもてなし給ふこそ本意なけれ、末の世こそ思ひやられるれ、何ともして對の屋を盗み出し、海へ沈めよ。」とありければ、「やすき御事なり。」と申す。北の方此の事叶ひてあらば、自ら母上より賜はり

○みうら みうらの誤りであらう、御内で里から連れて来た臣下。たからの術云ふ説は、下の「それまでも候まじ。」にうまく當てはまらぬと思ふ。  
 ○かいしやく 介錯こゝではかいぞへ。  
 ○果なけれ 淺はかである。  
 ○せがい 船な、船の左右のへり。  
 ○來迎 衆生を極樂へ迎へる意。  
 ○うら山吹 表黄。裏は濃き黄色の五衣のかさね。  
 ○十三 十二單をか云つたのであらう合はせて十三枚になるから。  
 ○うちき 法。唐衣の下に著る衣。

たるみうらを汝が心に任せよ。」とのたまへば、貞家、「それまでも候まじ、さらば夕さり盗み出し参らせ候べし、御心得わたらせ給へ。」と申せば、斜ならず悦び給ふ。さて播磨の守餘りの御もてなしに、けつかうに御湯殿こしらへて、對の屋を入れ奉る。繼母よき事と思ひ、我も御湯殿へ参らむとて、いろくの肴に酒そへてもたせ参り給ひて、めのと、かいしやく、其の外の女房達に至るまで、よくく酒をしひ給ひしかば、皆々申しけるは、「繼母にて渡らせ給へども、父大事に思召す姫君なるにより、かやうにかいしやく遊ばす、斯かる繼母世にあらじ。」と思ひけるこそ果なけれ。さて皆々は前後もしらす酔ひければ、繼母宣ふは、「人々は酒にゑひ給ふ、みづから御かいしやくし奉らむ。」とて入れたまふ。さて上らむとし給へば、今ちとと引きとめて、消え入るほどあつき湯をあびせ給へば、泣く泣くやう／＼あがらせ給ふ。七日にもなりぬれば、あかつき御舟いだすべしとて、各々舟にめしぬ。去る程に夜更けぬれば、佐藤左衛門は小舟にのり、對の屋の御舟に漕ぎつき乗り移り、おのれが舟をせがいに繋ぎて、やかたの内を見れば、三月十八日の夜の事なるに、母宮の御命日とて、來迎の阿彌陀の繪像一幅かけ奉り、焼香の香薫じて、姫君は御本尊の御前に、うら山吹の十三萌黄のうちき、濃き紅の袴めして、御手には金泥の法華經、皆

○やわら やをら。徐ろに。  
 ○つやく 決して全く。

○おこし奉り臨終をすゝめ申さむ 目をさませ、最後の念佛をおすゝめしよう

水晶の數珠とりそへもたせ給へりとおほしきが、御湯にくたびれさせ給ひて、机によりかかりねぶりますが、御經數珠机におちてぞありけり。

佐藤左衛門やわらさしより、御經數珠まづとりて袖にさし入れ、ともしび打消しかきいだし奉る。めのとかとおほしめし、御手をさしのべていだかれ給ふ。つやく御目もあかさせ給はず。佐藤左衛門おのれが舟に乗りうつり、遙かの沖へ漕ぎ出づる。偕てこのまゝ海に入れ奉るべきか、いや／＼おこし奉り臨終をすゝめ申さむと思ひ、起し奉りければ、姫君おどろかせ給ひて、あたりを見給へば、召したる御舟にはあらで、いやしき男一人たり。これは夢かやと思召し、「いかなる事ぞ」とのたまへば、「これは繼母御前の御方に、佐藤左衛門と申すものにて候が、いかなる御咎やらむ、海へしづめよと仰せ候、御臨終の念佛申させ給へ。」と申せば、姫君きこしめし、われ何の咎ありとも覺えず、さりながら、汝こゝろありて臨終を知らする事の嬉しさよ、とても情にしばしのいとまを得させよ、母上におくれ奉りて後、毎日御經よみ奉るに、まゝ母御前けしからず湯をあびせ給ひしかば、その疲れによりて、けふは御經よみはてず、讀みはてなば沉めよ。」と仰せければ、佐藤左衛門、ふところより御經數珠とり出し奉る。姫君うれしくおほしめし、さて御經二卷

○奈落 佛語で地獄と同じ。  
 ○一つはちす 極樂に於ける一蓮託生。  
 ○十惡 殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚癡。  
 ○五逆 殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血。  
 ○上品蓮臺 極樂往生に九品ある、その上品である。  
 ○あなうらをむすはせ給ひ 兩足をうち違へて結繩をする事こ、では佛の御手の上を救ひ上げて貰ふ意。  
 ○つい立ち上り つま勢ひよく立ち上り  
 ○腹々に 一人ならぬ妻妾に。

遊ばして、一卷の御經は此の世にまします父、現世安穩後生善所のため、縱令其の身は奈落に沈み給ふとも、此の御經の功力にて、われく一つはちすの臺に迎へとり給へ、故なき事に繼母御前に、只今海へしづめられ候。此の世にましますば、斯かる憂きめは見候はじものをと戀しく思ふばかりなり。今一卷の御經は、十惡五逆の罪人をも、上品蓮臺にやどし給へ、たとひ此の身は千尋の底に沈むとも、御手の上あなうらをむすばせ給ひて、諸共に一佛淨土の縁となし給へとて伏し拜み、さてのたまひけるは、「何事も思ひおく事はなけれど、今一度父御前とめのとを見たきばかりなり、見むといふとも見せじ、よしそれとても彌陀の來迎にあづからば、いとをしき人々にそひ奉るべし。」と、つい立ち上り袴のそば高くとり、裝束引きつくろひ、きぬの袖引きむすびて肩にかけ、舟ばたに立ちより念佛百べんばかり申して、今やくと待ち給ふ。思召したる體見るに涙もとまらず、貞家つくんと見奉りて、よそながら聞きしは物の數ならず、雪のはだへ隈もなし。あまりの御いたはしさに海へも入れ奉らず、わが身を觀じ、思ひけるは、何しにをのことは生れけむ、をのこの身ならずば、斯かる憂き目はよも見じと淺ましくこそ覺えけれ。我も腹々に子を六人持ちたるが、一人見えぬだに心もとなく思ひつるに、まして此の父只一人もち給

○殿めしき 茲では嚴格な意。

○有り難き御わざ 尊い事。

○繪島が磯 淡路島岩屋町の東端なる岩窟の名稱。

○心づよくもてなし 氣強くふるまひ。

へる姫君、御姿心ばへ優にやさしくましますば、さこそは歎かせ給ふべきと思ひつゝけて申しけるは、「いかに姫君きこしめせ、北の方さまの仰せはそむきがたく候、これまで具し申して候へども、あまりに御いたはしくて、海へも入れ奉らず候、ともかくもみづから御はからひ候へ。」と申せば、「左様に申され候こと嬉しくはさふらへども、自害は罪深き事なれば、ともかくにも汝が手にかからずと思ふなり、夜もあけ人もしらば、繼母御前の御名もたちなむぞ、早くく。」とのたまへば、まことに上臈の御心ほど殿めしき物はなし、下臈ならば、叶はぬまでも助けよとこそ云ふべけれ、かやうの仰せられ事こそまことに有り難き御わざなれ。きこゆる明石の隈なき月も、涙にくれて定かならず、松に時雨れる風の音、汀の波にあらそひて、琴のしらべに異ならず。とかく漕がれゆくほどに、淡路の繪島が磯へぞゆられ行く。佐藤左衛門海の面を見わたせば、大いなる岩ほあり。うれしく思ひて、此の岩穴の上にいだきあけ奉り、「是れにてともかくもみづからにて御はからひ候へ。」御名残をしくは候へども、心づよくもてなし、涙とともに漕ぎてぞ歸りける。姫君は岩ほの上に捨てられて、天にあふぎ地にふし、流涕こがれ給ひけり。はるか波をへだてて、御聲ばかりきこえて、佐藤左衛門も泣くく舟さしもどりけり。さるほどに明石に

○ふすま 衾、上蒲團を意味する。

○紙燭 室内で點ずるたいまつ。松木を細く割り油をぬり、本に紙を巻いたもの

○隨身 高官の公卿につく護衛の近衛舍人。

○雑色 雑役を勤むる身分低い侍。

○御様かへたく 姿を變へたく 即ち僧になりたく。

は、上藤海へ入り給ひぬとて騒ぎければ、帥殿おどろき、急ぎ姫君の御舟に乗りうつり、やかたの内を見給へば、たゞ今までおはしけるとおほえて、ふすまも床もあたゝかなり。急ぎ女房達を起し、「姫君はいかに、まづともしびをかき立てよ。」と有りたれば、めのと、女房達、皆々あわて惑ひ、やうく紙燭一つもち來つて、彼方此方とたづねけれども見え給はねば、一度にわつと泣きあけければ、その聲何にたとへむ方もなし。播磨の守網を百ちやうおろし、そのあたりを引かせけれども死骸もなし。帥殿宣ひけるは、「少將淀まで來てとゞめしを聞かずしてつれて下りたれば、もし盗み取りてや上るらむ。」とて、急ぎ都へ人を上せらる。少將かくとききて、流涕こがれ給ひて、縁の髪をきり、御年二十五と申すに遁世修行に出で給ふ。隨身、侍、雑色、牛飼に至るまで、皆修行にぞ出でにけり。明石には、めのと初め皆々もとゞり切り、思ひくの寺々に上りけり。帥殿も御様かへたく思召したれども、宇佐の宮の御敕使にたち給ひて、心にまかせ給はねば力なく、墨染の袈裟を肌にかけて給ひて、御念佛ありけり。さて有るべきにあらねば、泣くく筑紫へ下り給ふ。姫君は岩の上に五日まで潮にうたれておはしける。片時も生きておはしますまじき事なれども、佛の御計らひとぞ覺えけり。たゞ夢の心地にて思しけるは、いかなる

○なか／＼ 却つて

○來世 あの世。

○影向 佛語、神佛の本體が一時應現する意。こゝでは出現  
○まほり 見まもる  
○熟視する。  
○我を失はむとぞ私を殺さうと思つて。

罪のむくいにて、斯かる憂き目を見る事ぞ、なか／＼佐藤左衛門に海へ沈められなば、今の思ひはあるまじきにと、いつまで物を思ふべき、此の度みちくる潮に引かれて海へ入りなむとおほすに、來世にまします母宮の御聲虚空にありて、「海へ入りなむと思召しそ、今暫し待ちたまへ、夜晝我たち添ひて守るなり。」とのたまへば、扱は母宮にてましますかや、何とて命をとり給はで、生かさせて物を思はせ給ふぞ、とくく迎へとり給へと、祈誓してこそおはしけれ。さる程に明石の蟹潮の満ち干るを窺ひて、漁りしに出でけるが、岩の上を見ければ、繪にかける如くなる上藤見え給ふ。蟹思ふやう、こはいかに只人にはあらじ、天人の影向か、龍女の遊び給ふか、斯かる人をばいまだ見ずと思つて、舟さしとどめつく／＼とまほりけり。姫君は又斯かる者をば見習はせ給はねば、人にてはあらじ、我を失はむとぞ來りたるらむと恐ろしくて、よく／＼見給へば人なり。姫君さめ／＼と泣き給へば、あま舟を漕ぎよせ申すやう、「いかなる人にてましますぞ、斯かる岩の上に只一人おはしました候ぞ。」と申せば、「是れは都の者なるが、通ひ舟より捨てられたり。」と宣へば、「さも候かや御痛はしくこそ候へ、さらば我等が住所へ入り給へ。」と申しければ、「嬉しくこそ候べけれ。」と宣へば、舟に抱き乗せ奉り、我が在所へ漕ぎ戻り、舟よりかきおひ奉

いはやのさうし

○よりまし 物の怪の祈禱する時、他にのりうつる者をつくり、それにのりうつらせて祈る。それをよりましと稱する。

○妄念 妄執の思ひ  
○孝養 孝養すれども云々  
供養と同じ意。花香其の他三施を供して佛を養ふ義、かく供養をうけれど來世に産れ換らない。  
○六道 地獄、畜生、餓鬼、修羅、人間、天上。

り、おのれが岩屋は住みあらしたるとて、うへの岩屋をしつらひ置きまらせけり。  
さる程に帥殿太宰府につかせ給ひて、北の方の風のこ、ちとて、邪氣ありて物くるはしくおはしませば、さるべき行者を請じて祈らせ給へば、よりましにつかすして、北の御方みづから几帳のうちよりとび出で、行者の前へおはしければ、行者數珠おしもみ、「邪氣は物語にぞ來るらむ、何ものぞ、名のれく。」と責めければ、北の御方恥かしけにて、衣引きかつき、さめくくと泣きたまふ。や、しばらくありてかくぞのたまひける。「われはこれ都の者なり、鎮西の行者にみゆべからず、されどもあまりの苦しさにたゞ今まるりたり、大田の御門の二の宮なり、對のやの母にてさふらふ、恩愛の道こそ悲しけれ。對の屋十歳にて無常の風にさそはれて、はかなくなりてさふらふ、姫をすておき冥途の旅に赴く事のかなしさと、思ひし妄念に菩提の道に入らずして、孝養すれども往生せず、又つくる罪なければ地獄にもおちず、六道にたゞよひぬ。朝夕守るかひもなく、何の咎により對の屋をば明石の海へは沈め給ふぞ、あら本意なやうらめしや。」と宣ひて、さめくくとぞ泣き給ひける。

かやうに名のり給へども、北の御方對の屋の御事をば深くなけく色をみせて、御孝養さ

○御ぞ 御衣服。

○めかぶ 海藻の一種。和布蕪。

○尾上高砂 共に播磨加古郡にある名所

○法樂 法味を手向けて神佛を樂しめしめること。

○はかなき親のまよひ あさはかな親の迷ひ。

○さにもかくにもならはや 死なうと思ふ事を婉曲に言ふ語

まざましたまへば、さる事と推したるものもなし。然れども邪氣かくあらはれて、後よく成り給ひけり。さても明石の蟹は姫君の御ぞ、うら山吹の十三うはがさね、御袴など紫竹の竿にかけおきて、朝な夕なかしづき奉る。をつとの蟹はつりをしに出づれば、女のあまおとぎを申し、又男おとぎをして青海苔めかぶ取りに行くもあり、たがひに影の如くそひ奉りけり。明けぬ暮れぬと過ぎゆき給ふ。さて帥殿は三とせにも成りぬれば、姫君の第三年をも明石の浦にてとて、急ぎ上らせ給ひけり。尾上高砂の沖を通らせ給へば、海中に大きな旗ぞ見えける。「あれは何ばたぞ。」と問ひ給へば、「四位の少將近き里の上人達を請じて、莊嚴道場をこしらへて、八軸の法華經をかかれけるみせばた。」とぞ申しける。對の屋この邊にて沈ませ給ふらむとて、海の中へ御法樂したまはりける。帥殿さてはとて恥かしながら、御對面ありければ、少將みるより涙はらくと流し、戀しき人の形見と思ひ、つくくとながめておはします。帥殿宣ひけるは、「筑紫へくだりし時、さまざま姫をおとめありしに、つれて下りし事、かかる難に遭はむためかや、今さら後悔千萬なり、よしそれとても前世の事、還らざる身とは思へども、はかなき親のまよひにて候、姫うせにし時とにもかくにもならばやと、千度百度思ひしかども、われさへ空しく成るならば、草葉の

いはやのさうし

○重きが上のさよ衣云々 新古今集の歌「さなきだに重きが上のさよ衣わが妻ならぬつまな重ねそ」  
 ○憂き目を三瀬川見ると三つしかけた語。三瀬川は三途川と同じい。

○かひなき此の身生きて居てはありあひの無い身分。  
 ○わきまへかねたる風情なり 區別の出來ぬ様子である。

○ゆゑなく 無事に  
 ○綸言 天子の御言葉。  
 ○殿下 時の開白。  
 ○駒くらべ 競馬。  
 ○つき損じ給ふ ついて負傷せられた。

かけにて姫がおもひ、重きが上のさよ衣、かさねて憂き目を三瀬川に、しづみはてむも悲しければ、せめて残りあとの營みし侍らむと、かひなき此の身はとまりぬ。」と宣へば、少將は只泣くより外の事まします。帥殿も御孝養さましくしたまへども、少將はいまだ逢ひみぬ御かたゆゑに、かくとぶらはせ給ふ、あはれなりし御事共、よその袂もしほりかねたる有様なり。さて、いとまごひして立別れ給ふ。筑紫へ御下りの時は上りの時と契りしに、けふ離れての其の後は、又いつの世にめぐりあふべき、戀しき人の形見のいとま、互にぬるゝ袂かな。おつる涙も權のしづくも、わきまへかねたる風情なり。今をかぎりと思へば、輪廻生死の道の古里を、此のたび長くへだてぬる心地して、うき別れ給ひけり。少將は書寫山へ上り給ふ、帥殿は都へ上り給ひ、御門に出家のいとまを頻りに乞ひ給へども叶はず。宇佐の宮の敕使、ゆるなくとけられしかば、御悦びに大納言にぞなされける。辭退申し給へども、綸言なれば喜びの中にもさき立つものは涙なり。さるほどに殿下の御子に二位の中納言と申す人、八月十五日夜の隈なきに、侍あまた召し具して、賀茂の河原に立出でて、駒くらべして遊び給ふが、中將馬より落ちさせ給ひて、左のかひなをつき損じ給ふ。伊豫の國は御領なれば、療治のために下り給ふ。いくほどなくしてよくな

○うたのかしま 備後御調郡にある歌島であらう。

○室 播磨播磨郡室津。古い港として有名である。

○月の出しほ 月の出でんとする時と満潮とをかけた。

○あぢ 味鬼と云ふ鴨の一種、鴨より小さく、羣棲を好んで居る。

○御乳母子 乳母の子、自分と乳兄弟

○よしなし つまらな

○くひせ 木の切株

らせ給ひて、都へはやく上り給ふが、備後のうたのかしまより、播磨の室につき給ふ。月の出しほの夕なぎに、あぢのむら鳥渡るなり。書寫の嵐はけしくて、暮れゆくまゝに風あらく、しどろもどろに波たちて、五艘の船どもみだれけり、心細さは限りなし。船權も舵も叶はずして、風にまかせてゆられ行く。されどもとある島へ吹き付くる。其の時船の纜をとり汀へおりさせ給ひて、浦の者共に、「此の浦は何といふぞ。」と尋ね給へば、島の者、「これは明石の浦と申す。」扱は聞ゆる名所なり、月の光もおもしろし、只今の風に命たすかる悦びに、これこそ西海の思出に、いざや浦まはりして遊ばむとて、御乳母子の六位の臣左近の丞、右京の大夫春經、左京の大夫これらは、御いとこの唐橋の少將殿、中山中納言殿、此の人達を引具して、汀のかたをめぐり給ふ。磯べの松のむらだちて、心詞もおよびれず、物ごとにおもしろし。此のほどの思出など、めん／＼に口ずさみ給ひけり。さるほどにあまの岩屋にありつき給ひて、いざや田舎の下藪の住居みむ、人多くてはよしなし、一三人づゝ見むとて、左近の丞、六位の臣をつれて、中將殿あまの岩屋を忍びやかにのぞき給へば、口には刈藻かきつみて、きりめも見えぬくひせを碎きくべて、袖ももすそもなかりけり。あまの衣を腰のほどにぬぎかけて、男あませなをあぶり、女はあとにゐて

いはやのさうし

○髪のかゝり 髪の垂れ下つた様子。  
○火をあかして 灯をあかくまほして。  
○藻屑云々 一字脱落して歌の調子になつて居ない。藻屑火よりあかすべしとは。か

○阿彌陀の三尊 中央を阿彌陀、右を觀音、左を勢至と相並んで居る三尊。  
○弘徽殿 清涼殿の北にある殿。七間四方。皇后、女御などの居らるゝ所。

釣の糸をよりたりけり。三人の人々これを、御覽じて、「いざや歸らむ、田舎の下藤の住家は、犬の臥戸にさも似たり、こもを軒にかこひたれば、藁屋のうちのむくつけさ、土をふしどの埴生の小屋のいぶせさよ、さりながら上の岩屋みむ。」とて、ひそかに上り給へば、六位の臣ははや歸りぬ。左近の丞とたゞ二人のぞき給へば、思ひもよらぬさもいなりし姫君、御年十五六と見えつるが、髪のかゝりより初めて、姿有様みめいつくしき、あひかがやく氣色にて、ひとり火をあかしておはしけり。こはいかにと思召して、まぢかくよりに見給へども、姫君は知らせ給はで、御聲いとやさしきを打ちあけて、

おもひきや身をあまになしはてて藻屑ひとりあかすべしとは

とうちながめ給ひて、御涙はらくと流させ給ひて、見まはし給ふ御目のうち、あくまで氣高くらうたき事かぎりなし。岩屋の内をよく見給へば、北と西は岩屋なり、南の方に竿をつり、うら山吹の十三にうはがさね、紅の袴そへてかけられたり。岩の上には、來迎の阿彌陀の三尊墨繪にかかれけり。御前には麻の絲にて四季の花を結びて立てられたり。金泥の法華經皆水晶の數珠もたれ給へり。あるかなきかの薄墨にて、要文法文經論かかれたり。かき残せる者もなし。墨繪をかしきに、色々かかれたる風情、弘徽殿の細殿のかか

○うかしくしう 心落ちつかず、何の思慮もなく。  
○始終の人 末長くつれそふ人、即ち妻にせんする人。  
○明けて 夜が明けて。  
○浦そこ 浦底か、浦のはての意であらう。  
○魔縁 佛法の障礙となる魔。  
○かづき 水にもぐつて漁をする事。  
○物の數ならず 何でもなし。

れし清涼殿の屏風もかくやと思ひ知られたり。中將不思議に思しめし、左近の丞申しけるは、「よく御覽じつるか。」と申せば、「よく見つるなり。此の人を見るより胸うち騒ぎ、あはれ一つ蓮とも生ればやと、心ちもうかしくしうなるぞや、いざや内へ入らむ。」とのたまへば、「御覽じてうち捨てむとおほしめさば入らせ給へ、もし始終の人におほしめさば、まづ只今は歸らせ給ひて、明けてともかくも御はからひ候へ。」と申せば、けにもとて歸り給ふ。その夜の明るるを待つも久しく思召して、左近の丞に仰せられけるは、「さるにても浦そこのあま人に、かほどいつくしき人あるべしとも覺えず、たとひいかなる魔縁のものにて、我が爲あしくなりなむとも、つれて上らで叶ふまじ。」とぞ仰せける。

さてほのくと明けければ、かの所の蟹人を召して、「かづきせよ。」と宣へば、「きのふの大風に波しづまらず候へば叶ふまじ。」とぞ申しける。仰せを背くは不思議の者として、汀の松にいましめ付けて、さて左近の丞と只二人、彼の岩屋へ御入りありて、さし入り見給へば、ゆふべ御覽ぜしは物の數ならず、けさは猶みまさりて雪の膚の隈なさは、いふべき様もなかりけり。岩屋の中にあまたある歌の中に、

月はさし波はよせ來てた、く戸をあるじ顔にもあくる東雲

○たちちを 父親。

たちちをいかに知らせむ浦にきて千尋の底をのがれたる身ぞ  
月かけはあまの岩屋に宿れどもながらへはてむことぞ悲しき  
いかにせむ浦のあまなかりせば波の底にて朽ちや果てなむ

○かねぐろ 鐵髮黒齒を黒くそめた貴族の風。

○太眉 眉墨で畫いてある眉。

○御佩刀云々 今までは左近丞がさ、けて居たのであらう。

○いつのならひに 平常通りの習慣で。  
○星の如くに崇め奉りし事、空高く出づる星を仰ぎし如く仰ぎ奉りし意。

かくて姫君昨日今日とは思へども、早四年までこそおはしけれ。さて中將殿さしよりて、「おきさせたまへ。」との給へば、姫君うち驚き給ひて見給へば、織物の狩衣に、かねぐろなるにうす化粧、太眉つくりてあてやかなる人なれば、都の御事きつと思召しいださせ給ひて、夢かやと衣引きかづき臥し給ふ。竿なる御小袖うちかづき参らせて、左近の承かきいだき負ひ奉る。黄金づくりの御佩刀みづからもたせ給ひて歸らせ給ふ。さて風もしづまれば御船ども出さるゝ。又いましめ置かれたるあまども許さる。あまは我が身のいましめられたる事をば歎かて、さこそ姫君待ちかね給ふらむとて走り歸り、「さても不思議の事に、今まで参り候はず、さこそたよりなくおはしますらむ。」と申してみれば居給はず。「いつのならひに片時も出でさせたまふべき、悲しきかなや。」とて、走り廻りもだえこがれけり。餘りの事に海のかたへ向ひていふやう、たとひ龍宮へ御歸り候とも、海の上にて今一度拜まれさせ給へ、天人の影向ならば、雲の上にて見えさせ給へ、此の四年の間月星の如

○月日に關守すわらず 此の一節以上の一節と文脈が徹つて居ない、脱落があらう。  
○ミかくしつらひ行く程に ミヤかく設備して居るうち。  
○田舎女房 地方の婦人。姫をさす。  
○こが 山城乙訓郡久我。  
○作道 鳥羽のつくり道。京都九條羅城門から上鳥羽村へ通ずる大路、京都創建の際につくられたものであらうとの説。  
○らせい門 羅城門或は羅生門、元京都の中央の正門。  
○物見 牛車の左右の立板にある窓。  
○殿下 即ち中將の父。

くに崇め奉りし事、御なさけの程をば、いつの世にかは忘れ候べき。」と、流涕こがれけれどもかひぞなし。さる程に姫をばやかたの中にて、綾羅錦繡のふすま引ききせ奉りて、とかくなぐさめ給へども、泣かせ給ふばかりなり。中將心苦しく思召し、「御顔だにも見せ給はず、かほどに疎まれまるらせて、浮世にありてもせんなし、海にもしづみて底の藻屑とならむ。」とのたまへば、姫君涙のひまよりも、「かくみづからを召しつれられ候て、親の蟹をも召し具し給はぬぞ、あとに残りていか許り歎かむ事の物うさよ。」とのたまへば、中將殿、「いやく蟹の子にてはましまさぬものを、何とてつ、ませ給ふぞ。」と有りければ、姫君、「蟹の子ならずば、何しにかかる所には住みはべるべき。」と宣へば、月日に關守すわらず、とかくしつらひ行く程に、淀へぞつかせ給ひける。人々我もくと御迎へに参る。田舎女房は車にはならはじとて、御馬にのせたまふ。御供には左京大夫、六位の臣、左近の丞、先陣にぞ参りける。御馬には少しもたまり給はねば、こがと云ふ所にて御車にのせ奉りて、作道をらせい門へと早めける。姫君稻荷を伏し拜み、御前にて車の物見をあけて念誦し給ふ。人々怪しくぞ覺えける。さて殿下の御所へ入れ奉るべけれども、それには大臣殿の姫君、此の三年迎へ置きましたせば、飛驒の前司が家に入れ奉るべきと有りければ、

いはやのさうし



○御かひな云々  
 落馬して得た負傷が  
 全快したから。  
 ○ひしめき ひしひ  
 しと羣れ迫る意。

○天にすまは比翼の  
 鳥云々 白樂天の長  
 恨歌の話。  
 ○上達部 公卿と同  
 じ意、三位以上の地  
 位高き貴族。  
 ○一の人 攝政、關  
 白の異稱。

前司、衛門の督といふ侍の家に移りて、我が家をば譲り参らせけり。次日中將殿下の御所へ参り給ひて、御母北の政所に見参りければ、人々申しけるは、「中將殿はそゝろに嬉しげに渡らせ給ふは、いかなる事にか。」といへば、ある女房達の申しけるは、「はやく御かひな直らせ給へば、さこそあらめ。」と申しあひけり。さて中將殿の北の御方へ参り、「中將殿こそ只今これへわたらせ給ひ候へ。」とて、皆々簾几帳をあけ、まうけてひしめきける。中將殿北の御方へは目も見やり給はで、いそぎ飛驒の前司のやかたへ入らせ給ふ。みな人不思議にぞ思ひける。

下

さるほどにつぐ日内裏へ参り給ひて、御門に御見参し給ひて後は、花見の御幸、月見の御會にも出で給はで、天にすまは比翼の鳥、地にあらば連理の枝とならむと、生々世々はなれじとこそ契られけれ。たがひの心ざしなめならずぞ深かりける。並々の上達部の人ならば、あまの娘具したりとて笑ひの、しるべけれども、一の人の公達なれば、とかくの沙汰もなかりけり。

○北の御方へは云々  
 奥方へ中將は色が  
 黒くなつて逢ふのが  
 恥かしいと云ふ口實  
 を云ひやつたのだ。  
 ○思ひまうけたる云  
 云 待ちかまへて居  
 た事だとして。  
 ○北の政所 攝政或  
 は關白などの夫人の  
 尊稱。  
 ○しろく御め云々  
 單に嚴格な顔で見て  
 居られ、ほよい。  
 當には及びますまい  
 ○四人の公達 四人  
 の君達、こゝでは姫  
 君達である。  
 ○やすき程の御事  
 わけない位のこと。  
 ○思ふ中をさけぬれ  
 は 戀中を強ひて裂  
 けは。  
 ○山林に入れば云々  
 遁世出家する意。

さて北の御方へは、「伊豫へ下りて鹽風に吹かれ、色くろみ見苦しく候へば、みみえむ事も恥かしくてまるり候はず、いかばかり御つれぐにぞ候らむ、ふる里へましくて御なぐさみもや候べし。」と、文つかはし給へば、北の方思ひまうけたる事なりとて、時を移さず出で給ふ。殿下とゞめ給へども、終に出でさせ給ふ。其の後殿下殿中將殿を不興とありければ、北の政所の仰せには、「しろく御めみせてこそおかせらるべけれ、御不興はゆめゆめ叶ふまじき御事。」と、色々申し給へば、御不興は許されけり。さて北の政所四人の公達を召して、此の事を歎かせ給ふ。四人の公達と申すは中將殿あね君三人、妹君一人なり。一には時の女御麗景殿、二には中宮の御息女、三には長岡の關白殿の北の政所、四には内大臣殿の北の方。此の公達に向ひ歎きおほしめすやうを語り給へば、きんだち仰せけるやうは、「やすき程の御事なり、中將殿は極めて物はぢする人なり、思ふ中をさけぬれば、其の思ひにあくがれ、山林に入れば親も子も共に身をいたづらになし、長夜の闇にまよふ事あり、たゞこの蟹の子を思ふよしにて、われらが中へ呼びいだし、かたくなしきを事見あらはし、聲々に笑ひの、しらは、などか恥ぢて棄てざるべき、いづくの蟹の子なるらむ、はるぐつれてのほり棄てざるべき事よ。」と宣へば、けにもとて、さらばめづらしき作り

いはやのさうし

○蓬萊の山 支那傳説中の仙境たる蓬萊山にかたざり松竹梅鶴龜などを飾つて祝儀に用ゐる。

○わんざん人 和議人の訛。一方に辨び一方を云ひ陥るゝ者候辯者。

○言葉のつゞき 言葉遣ひは。

○かまひて かまへての訛。きつこ、是非。

○みづからいかで制すべき 中將私身がさうして妻を外出せしめぬやう、留めて置かうや。

○きんかく 金間、立派な家の義。

物なさむとて、蓬萊の山を物の上手に造らせらる。さて大覺のすけと申す女房世にすぐれたる物わらひのわんざん人なり。これをつかひにて中將殿へ参り申すべきやうは、「四人の公達の御使にまゐりて候、さこそ御つれづれにぞ候らむとおしはかられて候、こなたへ入らせたまひて御遊び候へ。」とありければ、大覺参りてそのとほりをぞ申しける。中將殿姫君に、「それく御返事申させ給へ。」と宣へば、姫君仰せけるは、遠國のものは東西をもわきまへず候、八重だつ雲の外はみず、都のまじはりおもひもよらず候。かくて一日も候へば、中將殿御ため恥がましく候ほどに、思ひもよらず。」とのたまへば、大覺歸りて此の由を申せば、言葉のつゞきはおもしろし、されども聲はなまりてをかしかるらむ、只呼びよせて拂はむとて、かさねての御使には、白き装束に唐綾の袴そへて、御乳の人にもたせ、又大覺をつかはさる。四人の公達の仰せには、「御つれづれおし量り参らせて、かやうにたびたび申すに、などや御出でましまさぬぞ、中將殿御ゆるしなきやらむ、かまひてとくと渡らせ給へ。又北の政所の仰せには、これにも若き女房のあまた候へば、何かは苦しかるべき、かまひなく御入りましくて遊ばせ給ひ候へとの仰せにて候。」と申しければ、中將殿、「まことに度々仰せ下さるゝ事、恐れ入りて候、みづからいかで制すべき、はや御返

○こじ 来じではない、來むの誤り。

○をみなへしの十五 表は経青綠黃、裏青の五衣を著た十二單に三重の袴。

○紅葉がさね 五衣の色、黄、山吹色の濃淡、紅の濃淡。下に蘇芳色の單衣。

○はじのにはひ 色(赤黄色)の端のうすくなつたもの。

○いもりの御ぞ 不詳。

○菊の匂 上に蘇芳匂五枚、下に白三枚重ね。

○しやうの林 支那の上林苑であらう。

事申させたまへと有りしかば、姫君宣ふは、「殿上のうてなの住ひ、きんかくの御わざ、かりそめにも耳にふるゝ事なければ、はかり参らせ候へども、千引の石をうごかしてと申させ給へ。」とありしかば、大覺歸りて此の由を申す。四人の公達、「千引の石とはいかなることやらむ。」と宣へば、政所のたまひけるは、「千引の石を動かしてとは、千人して引くとも動くまじき石なれども、仰せの重さにゆらぎ出づるといふ事なり、さてはこじと思ふかや、いざやまうけせむ。」とて、こをはれと出立ち給ふ。麗景殿はをみなへしの十五に、萌黄にほひのうちき、紅の單に紅の三重の袴めしたり。中宮の御息所は紅葉がさねの十五にはじのにはひのうちき、薄紅の一重に、これも三重の袴めしぬ。關白の北の政所は、いもりの御ぞ十五に、薄紅の三重の袴めされけり。内大臣殿の北の御方は、菊の匂の十五に、紫の一重に、これも紅の三重の袴めしたり。一人の公達に三人づゝの女房を附け、色々こしらへ花を結びて出でたちけり。四人の公達をならべ置き母上御覽じて、「七夕彦星のあまの川原に立出でて鵲の橋を渡し、しやうの林を遊び給ふも、我が公達にはよもまさらじ、ましてやいはむ、田舎の者、しかも蟹の子、さこそかたくなしくをかしかるらむ、はや來よかし、見て笑はむ。」と宣ふ所に、御車近くなりぬると申せば、「中門へ寄せ

○主殿 寢殿。  
 ○ねらすべし 靜かに歩かせよ。  
 ○九夏三伏 夏三箇月即ち九十日を九夏と稱し、極暑の初伏中伏末伏を三伏と稱する。  
 ○下簾 車の簾の下にかけたる帷帳。  
 ○さうなくおりかねたるも 容易く下りかねたのも。  
 ○かいしやく 御世話。  
 ○ききは 著たる際  
 ○六田 大和吉野郡六田、六田の淀と稱し楊柳が多いので柳の宿の名稱がある。  
 ○たをやか しなやか。  
 ○かんざし 髪の方で、髪ではない。

させよ、母屋の簾のまへを主殿へ、上殿はるかにねらすべし。」と定められたり。老若をきらはず、上臈、女房われもくと、あまの子見むとてひしめきけるよそほひ、中將の御ため恥がましくぞ覺えける。さる程に中將殿は此の人はいかゞあらむと、おほつかなく思召して、御さまをやつし、板敷の下に入りてあそびのやうを聞き給ふ。姫君の御供には左近の丞なり。御車よせて遙かにのきてかしまる。車よせのつま戸の前には高燈臺に火かきたてて、女房三人手毎に紙燭ふとくして持ちたれば、九夏三伏の夏の日、草もゆるがず、照る日より猶明らかに限なし。女房差寄りて下簾をかきあけ「はやくおりたち給へ。」と申せ共、返事もし給はず、いかにも簾をおさへてかきあけ給はねば、おのくさ、やき申しけるは、「宮殿樓閣玉のうてな夢にも見じ、さうなくおりかねたるも理なり。」とぞ申しける。や、しばらくありて、今は人々思ひ忘れたりと思ふ折ふしおりさせ給ひて、誰かいしやくも申さねば、みづから衣のつま引合はせ袴のきぎは引きつくるひ、御ぐしかき撫で小袖の上にゆりながし、扇かざし給はず、おした、みてぞもたせ給ふ。母屋のみすの前を上殿はるかにあゆみ給ふ御すがたは、五月雨に水まさる六田の淀の川柳の、あやめ眞菰の上をこすよりなほたをやかなり。翡翠のかんざしは衣のすそに餘りて、八尺豊かに縁の上をぞ引かれける。柳の絲を春風のふき亂れたるよりなほ細くたをかなり。あはれ御姿を繪にかきて、あまねく人に見せばやな、いかなる繪師も筆にうちし難くぞ覺えける。さて御座の上に直り、うちそばみてぞおはします。さて見廻し給へば、錦のしとね綾の几帳、さこんのゆか、玉のすだれ、一の人の御所なれば、心にて思ひしに、我が父の西の對をこしらへ給ひしに勝りたりとも覺えず、昔をこふる涙つ、むにたへぬ亂れ髪、かぞふる袖に餘れるを、さらぬ體にもてなし給ふ御けしき、たとへむかたなくらうたけなり。北の政所御覽じて、白き装束はなかく、氣高く侍るものなり、わが四人の公達を蟹の子に見合はせぬれば、けすしき限りなし。されば世には斯かる人もありけるよ、中將のつれて上りしも理なりと、笑ひ憎むべき事は忘れて、めかれせずまほり給ふ。さて蓬萊の作り物を取出しみせ給へば、一目御らんじて又とも見給はず、日頃見馴れたる我らだにも面白く飽く事なきに、何と思召して又とも見給はぬぞ、物を宣へかし、聲をきかむと思召し、麗景殿宣ひけるは、「かやうの物めづらしからず候へども、見せ奉らむ爲に。」と申させたまへば、姫君よく御覽じて宣ひけるは、「とうりん」と申すは雲の上の都、蓬萊山とは海の底の都なり、仙人來りて薬をとらむとせし程に、五つの峯六つに崩れて、残り三つになる、彼の蓬萊に

○うちそはみてわきへ寄つて。  
 ○さこんのゆか 金の床か。  
 ○心にて思ひしに 姫の心中。  
 ○けすしき 下品さ  
 ○めかれせず 目を離さず。  
 ○とうりん 初利天の訛。佛語。須彌山の頂、閻浮提の上、八萬由旬の處にある城があり喜見城と云ひ、帝釋天ここに住んで居る。

○ちやあうんせい  
長安城であらう。

○俱舎 俱舎論。阿  
毘達磨俱舎論の異稱  
唐の玄奘譯、卅卷。

○多武の峯 大和磯  
城郡、山上に藤原鎌  
足廟がある。談山神  
社云ふ、そこに護  
國院妙樂寺があつた

○迦陵頻迦 極樂に  
居る美音の鳥の名。

○九品蓮臺云々 極  
樂の蓮臺、こゝでは  
死んでも離れぬ意。

○御手を云々 麗景  
殿の女御が強ひられ  
たのである。

○りようかく 龍角  
琴の頭の方の角。

○背きがたき云々  
姫の詞。

○緒合をし 絃の調  
子を合はせ。

○霞玉ちる 霞たは  
しるの詠。

○ひの御座 天子の  
御座で清涼殿にある  
こゝでは正座の意味  
に用ゐた。

○盤渉 十二律の内  
盤渉調。

○りやうぜん 流泉  
の詠。流泉啄木が詠  
曲のやうに云はれた

○はうけう 方聲、  
鐵、銅などで作り、  
二段の架にかけ兩桴  
を以て擊つて音を出  
す樂器。

○和琴 六絃の琴。  
あづま琴。

○二十五の菩薩 伎  
樂を掌る二十五の菩  
薩が常に衆生來迎の  
時など先驅する事に  
なつて居る。

一つの家あり、不老門と名づけ、長生殿ちやうせいだんこれなり、不老のさかひに一つの市いちたつ、ちやあうんせいうんせいの市といふ、此の市に一つの車あり、樂をしる車なり、其の車の中に壺あり、此の壺崩れて割れぬれば、あらぬ月日出づるなり、俱舎ぐしゃの二十五卷めに、こらうが壺といはれしは此の壺なり、されば此の蓬萊にはこらうが壺はなきやらむ。」と仰せけれども、知る人なかりければ、御返事申す人もなし。後に多武たふの峯のれうれん僧都とて、學匠がくしやうましますを召して問ひ給ふに、「さる事候。」と申されけるにぞ、こらうの壺をば皆知り給ふ。姫君物宣おんこわいふ御聲色、琴のしらべかりやうびんが迦陵頻迦の要文吟えうもんずる聲こゑよりもなほ面白き御聲音なり。其の時麗景殿琴をとり出し、「ちと遊ばしたまへ。」と有りければ、姫君宣ほろふは、「磯にしぐる、松の風、沖の鷗の友よぶ聲よりほかは、聞きならはぬ身にて候へば、かやうの琴とやらむは思ひもよらぬ事。」と宣へば、中將殿板敷いたじきの下にて聞召し、かほどの事とかねて知りなば、などか琵琶、琴教へざるべき、よし／＼琵琶琴弾けずとも、九品蓮臺ほんれんだいの雲の上までもはなれまじき物をと思召して、さて聞き給へば、麗景殿、是非遊ばせとありしかば、姫君、爪もなく候ものをとのたまへば、御手をりようかくのもとに添へられければ、「背きがたき仰せや。」とて、御膝の上にかきのせ給ひて、琴柱ことばたて直し、二七の緒なかき合はせ弾き給へば、

心こゝろことばも及ばれず、つひに、か程の琴の上手は聞かすと皆々思召しける。おもしろき事申す許あはりなし。さて又琵琶を參らせて、「これ遊ばせ。」と有りければ、「思ひもよらす候。」と頻りに辭退ありしかども、「御琴の様に遊ばし給へ。」とて、御琵琶をさしよせ給へば、「あら背きがたや。」とて、御琵琶をとり直し緒合なはをして鳴らし給ふ撥音はちおと、楨まさの板戸いたどをこと／＼しく、霞玉あせたまちる音よりも、なほ氣高けだかくぞ聞えける。さてひの御座ござの上に居直り、盤渉はんしゃに音をとり、りやうぜん啄木たぎの三曲二返さんくにへんまでこそ引かれけれ。雲の上までも澄みのほり、天人も天降り菩薩もこゝに影向あるかや、神もめでたくるみ給ふらむと、聞きしらぬ者までも、そゝろに袖をぞ絞しぼりける。中將殿の心のうち何にたとへむかたぞなき。さて曉あかつきにもなりければ、「御迎おんむかへの車まるりぬ、いとま申して。」と宣へば、「今しばらく。」と引止めて、其の時麗景殿は琴の役、御息所は琵琶の役、そのほかはうけう、筆策ふでさくとり／＼にて、姫君は和琴わごんを參らせ給ひて、樂をぞ始めたまひける。實まことに極樂淨土にて、二十五の菩薩たちの遊ばす樂も、かくやと思ひ知られたり。夜もほの／＼と明けければ、いとまごひましくて、御車にぞめし給ふ。人々御名残おんなごりをしさに、御車よせまで出で給ひ、「是れまで参りて候。」とのたまふ。定ただめて恐れ入りて候とのたまはむと思ひしに、さは宣はで、車くるまの下したすだれをあ

○手書學匠 字も巧みで且つ學者で。

○乞はむせしかども 妻に貰はうとし

○此の人につきたる 人なし 從屬して居るものがない。

○たよりのなからむ 心細いであらう

○衛門の督云々 以下三人女房の名。

○はしたのもの 召使の女。  
○うへわらは 貴族の家なごに召し使はれる童男童女。

けて、「何事も善悪二つの習ひ、むくいある事にて、參るまじきと申しけるを、頻りに召しつる報いに、これまでの御出では。」とて、既におりさせ給はむとし給ふ御けしき、言葉の品に至るまで、優にやさしくおはします。北の政所の仰せには、「不思議なりとよ、中頃堀河大納言の宮腹の姫君こそ、手書學匠にて、歌連歌の道、何につけても暗からず、琵琶、琴、和琴などをば、十歳より内にてその源を極めらるゝ、さらに凡夫とは覺えずとて、人々心をかけられし、我も中將のために乞はむとせしかども、四位の少將にこされて力及ばでありしに、其の頃大納言太宰府へ下りしに、明石の浦にて日本に相應せずとて、龍宮へとられて、さてこそ四位の少將は書寫の山にありとは聞け、其の姫君も今夜の蟹の娘にはよもまさらじ、悪しと思ふ我等だに、あしき所は見出さず、見れどもくあく事なし、何といふとも中將この人をばよも捨てじ、すてぬものゆゑに憎みてかひもなし、右大臣の娘も中將のみねば嫁ならず、蟹の子なりとも、我が子の見るこそ嫁なれ、此の人につきたる人なし、痛はしやさこそたよりのなからむ、人を遣はずべし。」とて、衛門の督、兵衛の助、衛門のつほね、小女房三人、はしたもの三人、うへわらは三人、十二の者どもを、車三輛にのせてつかはし給ひけり。

○おくり文 何か他へ贈るに添へてやる手紙。こゝでは從者をさし遣はさるゝに添へた手紙。

○心も消えかへり うつさりして。

○此の者共 北政所から遣はした女房、以下の召使共をさす

○たてど 立て所、こゝでは筆の使ひ方

○御心にかゝらねば 理なり あなたは眼中にないから平氣で居られるのも尤である。

○目代 國司の代官

仕官せられし人任地に行かず代理を遣はす、その代人。  
おくり文に、「ゆふべは見參に入り參らせ、うれしくこそ候へ、誠にさまざまの御いとなみに心も消えかへり、生涯のおもひでとこそ存じ候へ、はじめての見參なれども、百年もなじみたる心地して、御かへりさの名残をしさ、いかばかりとか思召す、今よりのちは日にも御入りましゝて、みづから慰めてたび候へ、中將に具し給へば、子供にかはることはなく候、又此の者共見苦しく候へども、年來のめしつかひどもにて候、恥ぢさせ給はで御つかひ候へ。」とて、おくられるこそ有り難けれ。姫君文ごらんじて、今はすこしのたよりもありと御喜びましゝて、世にすぐれたる御手跡にて、御返事をぞ遊ばしける。北の政所四人の公達ともに御覽じて、「扱もいつくしき御手かな、墨付筆のたてど文字のならびに至るまで、人間のわざとは見えざりける。」とぞのたまひける。その時中將殿仰せけるは、「今は何とてかほどまで包ませ給ふべからず、ありのまゝに語り給へ、みづからにさのみに物な思はせ給ひそ。」とのたまへば、姫君さめくと打泣き給ひて、「親なれば蟹のそぞろに戀しくて、袂のかわくひまもなし、御心にかゝらねば理なり、我らがためには親なれば、忘るゝ事も候はず。」と、なほも包ませ給ひけり。去る程に明石のあまは、出家の志深くて、所の目代ゆるさねば力なくして、女のあまばかり髪そり、御孝養さまぐいた

○かちめ 搦布。し  
わあらめ。海産植物  
○あまのり 紫菜、  
所謂淺草海苔。  
○こぶのり 昆布海  
苔。

○大納言の助 大納  
言の典侍の當字。  
○御太刀はきには  
晴れの外出の時、太  
刀佩きて供奉する人  
人には。こゝでは若  
君の御供する人々。  
○さゞめきつれて  
皆聲を立て騒ぎつ、  
大勢で。  
○まゝ母のむすめ  
三條堀河中納言の後  
妻の連れ子。

す。總じて生あるものをば取らずして、わかめ、かちめ、あまのり、こぶのりなどのたく  
ひを採りて世をぞ渡りける。折々は山に入り野にまよひ、花を手折り水を掬びて、明暮姫  
君の御菩提深く弔ひけり。ある時中將殿賀茂、八幡へ神馬を參らせらる。何事の祈りぞと  
きくに、姫君たゞならず渡らせ給ふが、早五月にならせ給ふ其の祈りの爲とぞ聞えける。  
その後殿下の仰せには、「中將殿あまの子に具しぬれば、わが子にあらず、生れたらむ子、  
男子にても女子にてもそれを我が子にすべし、生れたらむ時母が膝におかずして、いだし  
取りこれへ渡すべし。」と有りけり。程なく月日重なりて、御産たひらかにせさせ給ふ。あ  
たりもかゞやく程の、しかも若君にてぞましくける。大納言の助絹の袖につゝみ取り參  
らす。二條西洞院の中納言殿を御めのとに召されてけり。御車には大納言の局いだきま  
ゐらせて乗せ給ふ。御太刀はきには、よき諸大夫百餘人さゞめきつれてまゐりけり、けだ  
かくぞ覺えける。殿下大きに御よろこびましくて、御産湯殿下の御所にてせさせ給ふ。  
去る程に御乳の人には、まゝ母のむすめ參られける。餘りにあしきとの所へ母やり給  
へば、子ながらも悪しきふるまひさがなして、大納言殿不興し給へども、殿下の御子の  
御乳に參り給ふめでたしとて、御不興赦されて參りけり。かくて月日重なりて、又姫君出

○姫君しろしめした  
る云々 姫君が自分  
で知つてゐる事を教育  
せんまされるのだ。  
○御袴著 男兒の初  
めて袴を著る儀式、  
三歳、五歳、七歳に  
行ふ、こゝでは七歳  
で行はれたのだ。  
○御袴著の親 袴著  
の儀式に袴の腰を結  
ぶ者を云ふ、主とし  
て同族中尊貴で名望  
ある者をあてる。  
○天下の 關白の。  
○巾子、冠の後頂に  
高く立つて居る所で  
髻のはひる所。  
○地につけてこそ  
驚いて此方からも敬  
禮を返す有様。  
○簾の内には涙にく  
れ 姫君がである。

で来て是れは中將殿に置き奉りて、姫君しろしめしたる事ども教へむとて止め置き給ふ。  
つながらぬ月日の程なさは、わか君七歳、姫君五歳の八月十日に、御袴著の御用意なり。御  
袴著の親には、ぢさうるんの刑部卿參り給ふ。天下の御子の袴著なれば、大臣公卿殿上人  
一人ものこらず參り給ふ。姫君思召しけるは、かかるめでたきわが身のしぎ、父師の大納  
言殿に何ともして知らせ奉りたく思召し、二人の公達に宣ひけるは、「刑部卿御袴の腰ゆひ  
たまひて後、御座になほらせ給はで、公卿の内八番目にまします堀河の大納言殿を、三度  
づ、拜ませ給へ。」と教へ給ふ。さて刑部卿の宮御袴めさせ給へば、公卿の中へ遙かにおり  
させ給ひて、帥殿を三度づ、拜し給へば、帥殿おどろき、こはいかなる事ぞと、かぶりの  
巾子を地につけてこそましくけれ。皆人不思議に思召しけり。殿下も不思議に思召し、  
何の故に大納言を拜み給ふぞといひ給へば、公達、「母上の拜めと仰せ候。」とのたまへば、  
左近の丞を召して、このいはれを簾中へ尋ね給へば、簾の内には涙にくれて、しばしは物  
も宣はず、やゝありて、「みづからかやうのめでたきしぎになる事も、まことに父の御恩な  
り、みづからは五人の親をもちたり、誠の父は帥殿なり、母は大田の御門の二の宮なり、  
養ひ親は明石のあま夫婦なり、今一人は佐藤左衛門なり、十三の年帥殿筑紫へ御下りの

いはやのさうし

○引出物 贈物。

○繼母御前の不興の咎 繼母が父より受けられる不興の咎めが恐ろしく。

○東西をもわきまへ給はで 前後不覺になつて。

時、明石の浦にて繼母御前に海へ沈めらるべきを、佐藤左衛門がなさけより、岩の上に助けおきたりしを、海士見つけて我が家にかへり、四年が開月星の如くあがめ養ひしを、中將殿御覽じて、つれて都へ上り給ふ。」と仰せ出され候へば、御門を始め奉り、殿下、北の政所、中將殿、大臣、公卿、殿上人、子をもちたるも、もたざるも、一同に聲をあけてぞ泣き給ふ。帥殿はあまりの事にあきれはて、さてもこれは夢かや現かや、夢ならばさめて後はいかゞならむ、誠はうつ、なる間、嬉しき今の涙とて、一入ぬる、袂かな。大臣殿も此の人故にこそ、少將も世をうき事に思ひて、遁世修行に出でけるとて、ふしまろびてぞ悲しび給ふ。さて帥殿をみすの内へ請じて、姫君見参まし、色々の引出物、中將殿よりたび給ふ。さて姫君、大納言殿に宣ひけるは、「都に上りし事、とくにも申したく候ひつれども、繼母御前の不興の咎おそろしくて、かくとも申し侍らず、後の親を親とすべしといふ法文の候へば、今まで申さで過ぎしかども、みづからあの若君姫君いつも見れどもめがれせず、いとほしく思ひ奉るにつけても、さてこそ我が父も明暮みづからを玉の如くし給ひしに、行くへなくなりて後、いかばかり物を思ひ給ふべきと思へば、けふ喜びのついでに、かくは知らせ奉るなり。」とのたまへば、帥殿も東西をもわきまへ給はで、さめぐ

○御心ふかき故なり 用心深い事である

と泣きる給ふが、や、ありて仰せ候は、「御ことわりはさる事にて候へども、老いたる我にかく今まで物を思はせたまふ、餘りに御心ふかき故なり、うらめしさよ。」とぞのたまひける。さて又姫君、明石の浦にて岩の上に五日潮にうたれし事、來世にまします母宮の御聲きこえし事、蟹つれてかへり、つれづれ慰めし事、色々かたりたまへば、日も暮れ方にぞなりにける。

○故里 夫人の里。  
○ちこ此方へ立たせ給へ云々 父君驚喜し、姫に立たせたり歩かせたりして眺めて居る様である。

帥殿は御いとま申し給はりて、「明日又こそ参上仕るべく候へ。」とて、我が屋に歸り給ひけり。北の方宣ひけるは、「皆人々はとく歸り給ふに、などおそくかへり給ふぞ。」とのたまへば、「さればとよ、人にすぐれたる喜びありて。」と宣へば、さては我が子御乳に参りたるによりてと思はれ、「さぞおはしますらむ、美しき若君、姫君を見給ふらむ、羨ましや。」とのたまへば、や、ありて帥殿、「北の方は何の咎ありて、對の屋をば明石の浦にて海へはしづめ給ふぞ、今まで知らざる事の返すくも口をしさよ。」とて、やがて故里へ送り給ふ。さて帥殿次日中將殿へ参り給ひて、「姫君に見参まし、昨日は夢の心地にて、更に前後をもわきまへず候、今日の見参こそ誠に嬉しく存じ候へ。」とて、「姫君ちと此方へ立たせ給へ、そなたへゆかせ給ひ候へ。」とて、御姿を上から下へ、下から上へ見くだし見あけて、

いはやのさうし

○人目もつ、ましや  
人目も憚りあるよ  
○さむひやう 講評  
であらう、悪い評判  
の意。  
○神は非禮をうけ給  
はず 性理字義に、  
「神不レ敬ニ非禮。」  
○御乳の人 乳母、  
即ち狂亂して死んだ  
繼母の實の娘。  
○掃部の助 掃部寮  
の次官。  
○女をば あまの妻  
○大床 廣廂と同じ  
簀子の内の廂の間を  
云ふ。  
○みづからに添ふこ  
思へ 私と一緒居  
る心地で。

十一年が閒の思ひ、今こゝにて晴れぬとて、又涙をぞ流し給ふ。それより毎日通ひたまへば、餘りに人目もつ、ましや、中將殿の御心の内もいかゞと思召して、ある時は見参し、又ある時はよそながら御聲ばかりを聞きなどして、歸りたまふ事もあり。大納言殿の心の内うれしき、たとへむかたぞなかりける。北の御方はふるさとへ行かずして、直に稻荷へこもり、「南無大明神、ねがはくば對の屋にさむひやうをつけてたび給へ。」と、祈られけるこそ恐ろしけれ。神は非禮をうけ給はずして、對の屋はうけ給はで、繼母狂亂して、都を狂ひ歩き給ふ。京わらんべ、これを見て、報いの程の恐ろしさよとて、笑ひ打擲す、四十二と申すには、終に狂ひ死にぞたて給ふ。對の屋きこしめし、あら痛はしの次第やとて、御菩提ねんごろにとぶらひ給ふ。御乳の人をばいよく痛はり給ひけり。殿下明石の海士人をめしのほせ給ふ。無官にては内裏へ参らぬ事なれば、掃部の助になされて参る。明石の浦を子々孫々まで給はりけり。女をば大床まで召されて、姫君見参なされ、紫の薄衣十二かさね、紅の袴そへて、これはみづからに添ふと思へと下さるゝ。其の外漢家本朝の寶物、數を盡してたびにけり。榮花に誇りけるとかや。佐藤左衛門を召して、伊豫の目代をたびければ、「御恩はかたじけなけれども、何のよろこびに榮花には誇るべき、世に

○分々 各自。  
○大政をうけ給へり  
關白になられた。  
○出入のますそをつ  
らね 出入の人續々  
としてつゞく事。  
○人だめ 他人のた  
め、こゝでは單に人  
間のための意。  
○素懐 日頃の希望

住めばかかる事を承る。」とて、元結きり高野山へ上りしを、ほめぬ人こそなかりけれ。姫君の母宮の御時の人々、此の由をうけたまはり、われもくゝと参り、分々所領を賜はりて榮えけり。さる程に月日かさなりて、若君十九にて大政をうけ給へり。姫君は女御に参り給ふ。對の屋は北の政所と申してめでたく榮え給ふを、遠きは聞きてうらやみ、近きは樂しむ。出入のますそをつらね、ひかりをかざし、富貴萬福たとへむかたもまします。斯かるたぐひすくなき姫君は、上古も今も末の世も、有り難しとぞおほえける。人だめによきものは現世安穩、後生善所と、佛も説きておき給へり。御ちぎり淺からずして、後にはもろともに往生の素懐をとけ給ふ、世のちぎりこそめでたけれ。



辨の草紙

- 前佛 既に入滅せる佛。彌勒に對する釋迦如來の事。
- 後佛 彌勒菩薩。釋迦の佛位を紹ぐ可き佛、入滅して五十六億七千萬歳で人間に下生し正覺して居る。
- 中有の闇 中間の迷ひの闇。
- しやうまひ 未詳説であらう。
- 大丞 大孫が正しい、地方官の第三位
- 夏は閑窓に云々 晋の車胤の故事を聯想せしめたのである
- 案じ出して 考へついで。
- 野游のあたる命 朝に産れ夕に死す云はれて居るかゆるふのはかない生命

夫れ前佛は早去りて、二千餘歳の春秋に過ぎたり。經卷は残ると雖も、世衰へて學ぶ人少し、後佛は未だ世に出でずして、種々の魔法來りて人を惱ます。中有の闇にまどひ夢醒め難く、剩へ亂世となりて、法師は袈裟法衣を忘れ、俗はしやうゑひた、れと云ふ事なし。僅に心ある人、誰かこれを慨かざらむ。爰に何の比、常陸の國行方の郡とかや、竹原左近尉平昌保と云ふ人あり、武藝人にすぐれ、武運並びなき人なりけり。その先祖を尋ぬるに、桓武天皇より六代の後胤、平將軍貞盛卿末孫流れ來りて、常陸の大丞平の貞國の次男にてぞおはしける。學問を好みて、夏は閑窓に螢を集めて夜を明し、秋は横の屋の隙漏る月の影を待ち、四季轉變の折々には、敷島の道をたしなみ給ひける。ある時、如何なる御心やおはしけむ。人間の盛衰を案じ出して、こと古りたる譬なれども、蜉蝣のあだなる命も、朝顔の出づる日を待つ間も、皆これわれらが様なりと思ひえて、發心の志深くなりて、古へ、鳥羽院の御世に、佐藤兵衛憲清髻を切りて、剃髮染衣の姿となりて、西行

- 北の方 北の對屋に夫人の室があるから身分のある者の妻をかく云ふ。
- 思ひの催し 心配の種。
- 若 幼き者。
- きこゆるまは 人に知れて居る間は。
- なき 謎。前兆。
- おほしたて 成長させて。
- 日光山 孝謙帝の天平神護二年勝道四本龍寺を開き後滿願寺と稱した。天台宗
- 生ひさき見えて 前途有望な様が見えて。
- 形いさ美しく物したまひ 風采が非常に美しく成長し給ひ
- おろかならず 粗末ならず。

上人と名乗りしも、羨ましく思へども、父母の御心、北の方の御歎きをさすかに思ひ煩ひつつ空しく月日を送りける。御子あり、三歳にならせ給ふ。又その秋の頃より北の御方只ならず、いと思ひの催しなり。ある時北の御方に向ひまるらせ給ひて、「且つ聞き給へ、浮世の無情は定めなきものなれど、中にも弓馬の家に生れては、夕日の落つるをも跡さへからず、此の年月願ふ道におくれ侍らば、後生いかはせむ」とて、幼き人の髪をかきなでて、「此の若は武士の家に生れ侍り、きこゆるまは人ゆるさじ、若し生れ來らむか、男ならば法師になりて、我が後の跡をもとせ、御身もたすかり給へ。」と、懇に宣ひし。まことにいまはしきなどなりけり。かやうのはかなし事の積りにや、其の冬の比、國に兵亂惹りて討死し給ひけり。父母の御歎き、北の御方は云ふに及ばず、一門一族他家の人までも、皆惜しまぬはなかりけり。

さて、新玉の春にもなりて、北の御方、御産泣くくし給ひけり。世に清らなる、玉の男にてぞおはしましける。歎きの中の悦びにておほしたて、かしづき給ひけり。七ツにならせ給ひける程に、未だいたはしながら遺言なれば、下野國日光山の座主の御坊へのほせ參らせたまひける。生ひさき見えて、形いと美しく物したまひければ、座主の御坊おろか

○三衣 僧の著る大衣、七條、五條の袈裟の總稱。  
 ○行業不退 修業に對して少しも屈しない事。  
 ○一心三觀 天台宗の觀法。一心は即空即假即中なりと觀する意。  
 ○一念三千 專念に三世間一切の法を觀する事。之も天台宗觀法の一。  
 ○東谷 今の東照宮の東南の邊を東山谷と稱する。元四本願寺のあつた所。

ならず、らうたくし給ひ、人皆かしづき奉る。御手習物ならはしの爲とて、西谷の圓實坊昌譽僧都の許へうつし奉らせ給ひける。學文の敏く賢く、筆取る事たどくしからず、五歳ばかりの坊に住み馴れ給ひて、ありがたきまで、をとなひをはしましけり。然るに僧都老いの浪の寄せ來たる積り、又病のおかせるむくいにや、限りの様にならせ給ひける。此の兒の御様をつくぐと見まらせて、「いとをし、我永らへ侍らば、さりともと思ひ侍りしが、今は早空しくなり侍りなむ、なき跡にも、心に入れて御經讀ませ給ひて、御手習怠るべからず、誠に後世の繼にてこそ侍れ。さりながらも。」とて、東谷の教城坊昌長僧都をかたらひ寄せ參らせて、枕近くよせ奉り、「老僧はかくなり侍りぬ、此の兒らうたくし給ひて、出家、學文遂けさせ給ひて、一山のかざり、父の御跡、われらが後世をもとはせ給はり候へ。」と、かき口説き宣ひければ、誠に哀れにこそ。いなみ難くて、請取りまらせ給ひけり。此の昌長僧都と申すは、慈悲深重にして、三衣の破るゝを悲しまず、行業不退にしては、一鉢の空しきことを憂へず、一心三觀に思ひをかけ、一念三千の心をすまし、世にありがたき人なりけり。かくて此の兒十二にならせ給ひ、故昌譽僧都の御跡したひまゐらせ給ふこと、いと哀れなる程なりけり。とかく慰めまらせて、東谷にうつろはし奉

りて、御名を千代若丸とぞ申しける。いうに優しくぞおはしける。論談けつちやくし詠ふ聲は頻伽聲ともなすらへ、ひかに唱歌の御聲は、又東雲に鶯の寢床をさらぬ木するにて、ほのかに音信れたるとや聞ゆべからむ。一山のもてあそびにも、先づ此の兒を先立てまゐらせばやと、上下心を惑はしけり。和歌の道にも心を入れ、思ひ深くぞおはしける。ある折しも明けがた深く一聲音信れば、人こそ泣くや誰とかと目を覺し給ひて、

「梅が香にさそはれけりな鶯のまだ東雲に一聲は鳴く  
 花の色に聞きそへてこそ。」と仰せられれば、さもありぬべき事と皆人感じ奉りける。中にも勝れて筆取る事並びなし。人々申しけるは、まだ難波津のはかぐしからぬ時よりも、あくまで故はあるかしたと、おろかならずほめ奉りける。折節ことの會席にも、御手習のすさみ書きにも、はかなき歌のみを好ませ給ひければ、御父のいまはしかりし事、其の人々申し出し慰め申しけれども、御心のなはし、又いかなる愁へのつみにや、一首はかくこそ詠ませ給ひけり。

まちこゝの花も甲斐なく散り行けば身のはかなさぞ思ひ知らるゝ  
 とあそばしければ、これはあまりなる御心のいまはしとて、誹らはしけに申す人もありけ

○中禪寺 僧勝道が更に日光山奥の湖畔に立てた寺。  
 ○黒髪山 日光連山の主峯をなす山。男體山とも稱する。  
 ○南方無垢の成道 龍女の成佛した南方無垢世界の意。  
 ○勤經 看經。  
 ○閻伽 佛へさぐる水。  
 ○願ならぬ海 湖水。源氏物語開屋の巻、「わくらはに行き逢ふみちを頼みしも猶かひなしや潮ならぬ海。」  
 ○霜と雪とを 黒髪山にかけて、白髪が多くなるを云ふ。  
 ○ひゑんの柱 飛騨高き軒の柱。

り。

さて僧都の御坊中禪寺とて、なほ山深き靈社おはします。この御嶽をこそ、世にことふりる黒髪山とぞ聞えける。勝道上人かの御山に千年の靈像をきざみ立て、御堂をば弘法大師建立したまひて、ふだらく山と額を書き給ふ。寔に南方無垢の成道と見えにける。かの山に在りて、三歳籠り居て、勤經せらるゝ例ありけり。千代若殿は寺中におはしますべき由宣ひけれども、いかなりける御心やおはしけむ、同じく閻伽の水をも汲み、花をも摘まむ。」と宣ひて、籠らせ給ひけるとかや。この所の様を云へば、腰は高山巖々として前に湖水を湛へたり。源氏物語に猶かひなしとや鹽ならぬ海と詠みしも、此の所の様なるべし。春陽坊專順の歌に、

馱ふらむ黒髪山にかけうつす湖の鏡の霜と雪とを

ひゑんの柱に今にあり。十住心院心敬の歌には、

頼もした三歳籠れる法の師をさぞなあまてる神もまほらぬ  
 三歳の物籠りをよませ給ひけるにや。又雲護院道興は、

雲霧も及ばで高き山の端にわきて照りそふ日の光かな

○發句 連歌の第一の句。

○脇 連歌の第二の句を云ふ。

○新田尚純 下野の新田氏を繼げる舊家  
 ○歌の濱 下野中禪寺湖畔の名所。その東岸で、勝道此の邊に伽藍を立てた事がある。寺が崎も此地である。  
 ○日輪寺、上野島 千手の岡みな中禪寺湖内或は湖岸の名所  
 ○ありて 其のまゝ居りて。  
 ○尼削ぎの髪 少年時代に尼の如く髪を末端を切り揃へる事

さてまた發句に、折しも秋の半なれば、

水海に錦をあらふ紅葉かな

そこなる人の脇にて、

江に影ひたす秋の遠山

と申されけるとかや。その外古人の歌ども、皆漏らしけり。されども新田刑部大輔源尚純卿、歌の濱と云ふ南の岸にて、

越の海にありといふなる歌の濱あはせて見ねどまけじとぞ思ふ

萬葉集に容れられし名所には、紅葉の浦、やしほの瀧、老松、わか松、寺が崎、日輪寺、上野島あり。岩ふる濱、千手の岡その景筆にも寫し難し。さてありて千代若殿十五にならせ給ひけり。御髮剃らせ給ふべき由仰せられしを、一山の老若惜しみまるらせて、御髪をそぎたてまつりて、戒有たせ參らせて、辨公昌信とぞ申しける。尼削ぎの髪かみの房ふさやかに、御顔に散りかゝりて美しさ、眉の現はれしを、たとへて言はば、是れや霞の閒ひまよりかは、櫻の勻ひたると、紫式部が書きたりし言の葉や、さながらと見えたり。かくて山籠りの久しかりし御慰みの爲にとて、東谷に下らせ給ひける。兒童子睦ちむらはましく語らはせ給ひけ

○御心のよせやありけむ 心を惹きつけられる點があつたか  
 ○十六にして云々 胎内にありし時父上が歿せられし故である。  
 ○一目うけさせ給ふ目にはい涙ぐんで居られる。  
 ○人は子なりけり 人間は皆親をもつものであるよ。  
 ○愁苦辛吟 愁苦呻吟の譲り。戀に悩む有様。  
 ○見咎むる故ありて 見咎める事がありそこで。  
 ○花につけ云々 花紅葉に短冊なごつける風雅を愛しての消息はそんなに不都合でない。

る御心愈しなし。或時池の汀も荒れ果て、花園山も荒れ果てければ、岸の岩をも立て直し、法師ばら召し集め給ふ中に、太輔公と云ふ人あり、様宜しく、賤しからぬ法師なり。そことも知らぬ風の吹き來て、障子を吹き破りける隙より見奉るに、御目を見合はせ、ほのかに笑はせ給ひし御顔ばせは、秋の月雲間より洩れ出でたる様にやと見奉るに、如何なりける御心のよせやありけむ、御言葉をかけさせ給ひし嬉しさは、たとへむ方もなかりけり。我が宿に歸り來て思ひ染め奉る心の程こそ哀れなり。かくて僧都の御坊もの籠りこと終りて、東谷に下らせ給ふ。其の年も暮れ、明くる春の頃、辨公御父の十七回を弔はせたまひける。嚴めしき法座を飾り、御位牌を立て、佛前に參らせ給うて、花奉り焼香して、世には此の例もありけるや、十六にして、父の十七回をとふ事と、見ぬ親を慕ひ參らせ、御涙を一目うけさせ給ふに、御様を見參らせて、高きも賤しきも、人は子なりけりとて、皆人歎きけり。さて太輔の君、思ひの催しけるにや、かの御かどのあたりを愁苦辛吟しけるを、辨公召使はる、童目敏く見咎むる故ありて、ことの次第を尋ぬるに、ありし障子の隙より、思ひ染め奉る此の年月の苦しきども、こまやかに語りければ、「あはれ實にもこそと思はすらめ。且つ聞き給へ、花につけ、紅葉に結びたる消息はとり入れも苦しからず、

○思ふばかりは 千載集の歌「歎きあまり知らせそめつる言の葉も思ふばかりは言はれざりけり。」  
 ○召しありし時 重が呼はれた時。  
 ○思ひくづをれ 思ひ屈して。  
 ○風のつて 風のたより。  
 ○凍り居し胸のつらさ云々 うち解けにかけた。つらさはつら、さかけた技巧であらう。  
 ○千夜を一夜に 伊勢物語の歌「秋の夜の千夜を一夜になすらへて八千夜しねはや飽く時あらむ。」

人目を忍びて巻き入らる、消息數多侍りし身の病にまかりなる事も侍りき。さりながら御身の白地に御物語り、誠にあはれに思ひまゐらせ奉る。御文ばかりは苦しからじ、たしかに認め給はり候へ。」と、いひ捨てて歸りけり。嬉しく思ひ、我が宿に歸り來て、薄様引重ねて、歎くあまりしらせ初めつる言の葉も、思ふばかりはと云ふ古き歌をも思ひ出て、ほのかに認めて、奥に一首の歌あり。  
 ほのみつる花の面影身に添ひてきえむ命のゆふべをぞ待つ  
 召しありし時、人目も隙もありければ、御前に開きて參らせければ、「むつかしの文な見せそ。」と仰せられけるを、さし寄りて、事の仔細を懇に申しければ、「あはれの事や、さる事のあらば、今まで知らせざりし事。」と宣ひて、巻き返し涙ぐみ給ひけり。ある物語にゑびす心のむくつけし、思ひくづをれてやと書きたりし言の葉ども、思召し合はせ給ひて、いと哀れにぞし給ひける。暫しありて、御言葉はなくて、  
 風のつて待つまもあらでうつろはば花のとがとやいふべかるらむ  
 此の返し密かに傳へければ、嬉しさ限りもなかりけり。かくて忍びくぐに隙をうかひ、終に語らひ奉る。凍り居し胸のつらさも打ちとけて、夢許りなる春の夜の、千夜を一夜に

○月は臙に照りもせず云々 新古今集の「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の臙月夜にしく者ぞなき」

○きぬく、男女疑て空朝各衣著て別るを云ふ。

○よせ、心の寄せ。○聞えて、申し上げ

○曇紙、懐紙。

○何しかあつかふ人もなきにや、ちつとも介抱する人もなかつたのであらうか。○さや、夫れは。○人目をも忍び給はぬ様にや、人目をかくれもなさらぬ様子で。

思ひしも、甲斐なく立別れなむとせし時、有明の月は臙に照りもせず、曇りもやらず、亂れてかゝる黒髪の際より、眉のいとほのかなる御様に、いかゞ思召しけむ、幽かに、今よりはおもひおこせよ我もまた忘れじ今朝のきぬくの袖

御裳にとりつき奉りて、

ながらへてまた見む花とたのまねばよせを待つまの露ぞ悲しきと聞えて、よしさらば別れしと、朝の床のうへの枕ぞ形見、またやうちねむもさすがに、人目を忍ぶならひなれば、鬨のおち髪の一筋、二筋ありけるを拾ひて、疊紙に入れ、我が宿に歸り來りて、美しかりし御顔ばせと、あかぬ別れの物思ひ、何れを何れともわかかぬて、そのまゝ、起きも上らず、七日と云ふにつひに空しくなりにけり。此の事聞召されて、哀れにや思しけむ、童を召して、「煩ふ事やありしか。」と問はせ給ひければ、「此の年月の物思ひ、わづかなりける御物語に、いとゞ思ひの勝るにや、五六日は露をだにも口に、何しかあつかふ人もなきにや、果なくなりし。」と申しければ、「哀れのさや、いつの世の何の夕べには、此の哀れおもはむ。」と宣うて、衣引被ぎて、人目をも忍び給はぬ様にや、臥し轉ばせ給ひける。されども、「いかに。」と慰め申しければ、さらぬ體にし給ひけれども、何く

○足を空にして、走り騒ぐ形容。○物怪、怪しい物のりうつる云ふ信仰。○おどろくしく物凄く。○人をよきて、人を避けて。○あこ、童を親しみ呼ぶ語。吾子。○こそその身えら、誤字があらう、未詳。○さはらず、妨ぐる。○何事の云々、千載集哀傷歌に出て居る。

れの果物をだに觸れさせ給ふこともなかりければ、僧都の御房、狽て騒ぎ、一山の大家足を空にして、物怪にやとて、様々の修法などせさせ給ひ、療治など加へ奉る。おどろくしくはなけれども、日々に重り給ひけり。勻ひやかに美しき御姿の、いとう面瘠せて哀れなり。ある時人をよきて、かの童を御枕近く候はせて、「あこはしらじ、古、奈良の都に、侍従と云ふ童あり、とその身えらなりけるにや、ある人、語らひかしづき侍りしを、さはらずる人ありて、その人なけき、終に空しくなりにけり。此の事を侍従哀れに思ひて、悲しみに堪へかねけるにや、和泉川に身を投けて、底の水屑となりけり。僧都範立はその心も知らず、哀れに思召して、一首の歌あり、

何事の深き思ひに和泉川底の玉藻と沈みはてけむ

とあそばしけるとかや、千載集に入れられたり。昔は人の思ひを哀れむ事、斯様にありしことなり。」と仰せければ、童、承つて、「こは浅ましき事を仰せらるゝ物かな、未だ生れたまはぬ先だにも、後世を頼むと仰せ置かれし、御父の御志、又御母上の御歎き、いかゞはせさせ給はむ。」と申しければ、「いさとよ、思ひ立つことはなし。」と仰せられ、やみたりけり。されども、日々に弱りもて來て、限りの様にならせ給ひける。僧都の御坊は申すに足

○遅れ先立つ花は残らじ 平家物語行慶法印の歌「哀れなり老木若木も山櫻遅れ先立ち花は残らじ。」  
 ○たゆひなる たるさうな。  
 ○ものにみなあたりける 上の空の心で物に突き當つた。  
 ○昌保に離れ云々 良人に死に別れたよりも尙悲しいこの義  
 ○傳法灌頂 秘法を傳授し阿闍梨の職位を賜がしむる灌頂。水を頂に灌ぐ儀式。  
 ○一つ蓮花に 一蓮託生。  
 ○終の行く道 死の道をさす。

らず、同谷に法門坊綱譽僧都其のよしみおはして、病窓かの床にも去らず勞り給ひける。されども老少不定のならひ、古言にも遅れ先立つ花は残らじとの例にや、水無月十四日、昌長、綱譽の御手をひしくと取り、御眉のいとたゆけなる御眼を開き、いと嫺々として御母上の戀しさなど仰せられて、程もなく消え入る様に失せ給ひける。昌長、綱譽は申すに及ばず、一山の大家、狽て騒ぎ、さながら五月のくね闇の如くにして、夢に道行く心にや、ものにみなあたりける。御母上に傳へ申しければ、そのま、起きも上り給はず、「昌保に離れまるらせしは、又ことの數にもあらざりしを。」と歎かせ給ひける。道理にぞ人皆申し奉る。

さてあるべきにあらざれば、清瀧寺尊豪法印と申す貴き聖を頼み奉りて、一時の煙となし奉る。果なかりける事どもなり。様々の御弔ひ、七日々々に限らずし給ひける御歎きの餘りにや、昌長僧都、傳法灌頂を執り行ひ、壇上に御位牌を立て、過去幽靈平昌信頓生菩提と廻向し給ひける御志、道理にもと、袖を濡らさぬはなかりけり。次の日又綱譽僧都も灌頂執行し、「過去幽靈一つ蓮花に上らせ給ひて、我等が終の行く道には、觀音の御手の内の蓮臺にとりのほせ、都率の内院に引取り給へ。」と、法施し給ひし御志、又すぐれて人

○蓮臺 念佛の行人淨土に往生する者の所託。  
 ○都率の内院 兜率天の奥。彌勒菩薩の淨土。  
 ○法施 三施の一。佛へ經卷、讀經などを施す事。  
 ○髻 髪を集めて結びし所。  
 ○天台の四教五時 天台宗の教義。五時とは釋迦一代の説法を五時に分ちその變遷を論ずるもの。四教は三藏教、通教、別教、圓教の教へ。  
 ○かづらきのれい 葛城の靈窟。  
 ○入峯 山で修行する事。  
 ○山林斗藪 山林を旅する僧の修行。

皆哀れに思ひ奉る。召使はれし童と、髻切り、出家して、御骨を首に懸けて行方も知らず出でにけり。其の外、召使はれし人々、深き思ひに引籠るもあり、谷に轉び落つるもあり、あはれなりし事どもなり。又爰に、眞鏡坊昌澄と云ふ人あり。愚かなれども、筆執る業を得たり。辨公かの法師を召して、天台の四教五時の名目を書くべき由宣ひけり。その夏の比、此の山に峯あり、神護慶雲元年に勝道上人この山を開白し給ふに、本宮と中禪寺南社をあげめおき給ひて後、智光行者に密約し給ひ、かづらきのれいくつを寫しふみわけ給ひけるとかや。弘法大師、其の後、瀧尾の靈社を作り立て、品々の佛像を彫み置き給ふ。慈覺大師下り給ひて、新宮を建立し給ひ、千手、彌陀、馬頭の靈相を彫み立て、満願寺と云ふ寺號をなし置き、神殿にはほどくの御寶物を納め給ふ。傍には又文殊の靈相を作り立て、當山の寶祚を守らしめ給ひける。されば桓武、平城、嵯峨の三帝の敕願寺として、正一位准三宮日光山大權現と御神官進らせ給ひて、未來永劫まで、人民の守らせ給へとなり。さて昌澄法師、夏峯の先達にあたりて、辨公へ返答しけるは、「修行辭み難し、出峯事終りて書き奉らむ。」と申し請ひて、五月半に入峯して山林斗藪の行を立て、樹下石上を宿とし、不惜身命に身をなして、一心不亂に修行しけるに、辨公失せ給ひぬと聞えけれ

○從懸 修驗者が上に著る麻の衣。

○文月十四日 七月十四日。

○聖教 佛聖の説かれた教へ。

ば、從懸の袖を絞りける。されども日限りあれば、文月十四日に成就して、御墓に参り、臥し歎きけれども、甲斐なく、翌日より、かの聖教を書き奉り、御墓に納め参らせ、愚かなれども一絶を佛前に備へける。

翰墨約君君別離 無親疎似有親疎 莫嫌紙上斑々色 進孝野僧滴淚書

その夕、我が宿に歸り、歎き明して、微眠みたりける夢に、辨公この聖教を開き給ひて、御嬉しけなりける御顔ばせにて、一首詠ませ給ひける。

筆の跡見るとは知らじ夢のうちもかはす言葉の例なければ

と詠ませ給ひ、その夢にしばしもなくて、明け行く空に覺えけり。もしやと眼を開き、あたりをうかひけれども、跡かたも無くなりけり。昌澄法師かやうの哀れともいさ、かなる身をうらみて、往生院と云ふ蓮臺に、弘法大師阿彌陀の靈相を作り立て、妙覺門と額を遊ばしける。今に絶えざる事共なり。或る外典を見るに、一日安閑は值萬金とあり。又大隱は朝市にかくれ、小隱は岩藪にかくると云へり。しかし只かのたはらに住まま欲しく、在於閑處修攝其心いふ經文をさとり得て、方丈なる庵室を結び、朝夕にかの御菩提を弔ひ参らせて、二六時中には法華妙典をよみ奉る。されば寂寞無人聲讀誦此經典と讀みあ

○大隱は朝市にかくれ すぐれた隱者は却つて市中にかくれる意、王康堪の詩句に「小隱隱三陵藪大隱隱朝市。」

○みかくれの明神 未詳、鹿島明神の末社であらう。

○ごんしゃ 權者。此の世にかりに現はれ衆生を濟度する佛

○安養の淨刹 安養淨土。安養は極樂の異名。あんじよう。

けけるを、聞く人愚かにはせざりけり。辨公、或る人の夢に、鹿島のみかくれの明神のかりに現じ給ひ、あまたの人を發心せさせ給ふと、慥に告げどもありけり。又或る人の夢に一首の歌あり。

戀しくば上りても見よ辨の石われはごんしゃの神とこそなれ

黒髮山の頂に、辨の石と云ふ靈石あり。富士の嶽の望夫石の古語を思へば、事あひたる心地して、あらたなりける事どもなり。斯かる不思議ともに人みな見いて、あるは語り、あるは歎き、よしさらば、人の唱ふべきものは、彌陀の名號、願ふべきわざは安養の淨刹なるべしと、一慶に不惜の阿彌陀佛を兩三返申して、目を閉ぢ塞ぎ、袖を濡らさぬはなかりけり。

かざしの姫君

○髪のか、り 髪の垂れた様子。  
 ○なべてならず 世の常ならず。非常に太くつくる事。  
 ○やごみなき 尊いけわかい。  
 ○光源氏 源氏物語の主人公。  
 ○こしかた行末 過去將來。  
 ○おきわかれなむ 起きて別れると露の澁ぐにかけた。

昔、五條あたりには、源の中納言とて、萬にやさしき人おはしける。北の御方は大炊殿の御女なり。姫君一人おはします。御名をばかざしの姫君とぞ申しける。御容を見るに、髪のか、り眉口美しくて、春は花の下にて日を暮し、秋は月の前にて夜を明し、常に詩歌を詠じ、色々の草花をもて遊び給ふ。中にも、菊をばなべてならず愛し給ひて、九月の比は庭の邊を離れがたく思召して、年月を送りたまふ。十四と申す秋の末つ方に、菊の花の移ろひゆくを、限り無く悲しきことに思召し續けて、微眠みたまへば、年のほど二十あまりなる男の、冠姿仄に、薄紫の狩衣に、鐵漿黒に、薄化粧太眉づくりの、やごとなき風情は、古への業平、光源氏もかくやと思しくて、姫君によりそひ給へば、姫君は夢現ともおほえず、起きさわがせ給へば、この人姫君の御袖をひかへ、「などか露ばかりの御情もなからまじや。」とて、泣くく色々のことの言の葉を盡し給へば、姫君もあはれとやおほしけむ、夜半の下紐うちとけ給へば、かの人嬉しくて、いとこしかた行末を語り明させ給ひ

○まれ人 客。  
 ○こふべきたより 尋ねるべき手段、便宜。  
 ○御名をしらせ給へかし 夜男が通ひ来て、や、日數経て名をつゆるのが平安朝以來の風習である。  
 ○花そろへ 花合せ花を持ちよりその優劣を争ふ遊戯。  
 ○繪言 天子の御言葉。禮記に「王言如綸、其出如綸。」  
 ○ちからなくして せむ方なくて。  
 ○西の對 主人の居る寢殿の西方にある獨立した宮殿、こゝではかざしの姫の住んで居られる所と見える。

けり。衣々にもなりしかば、この人姫君に打向ひて、「又の夜は必ず。」とて、なくく、憂きことをしのぶるもとの朝露のおきわかれなむことぞかなしきときこゆれば、姫君、末までと契りおくこそはかなけれしのぶがもとの露ときよりと、互に言ひなかし給へば、まれ人は籬のほとりへゆくと見えて、面影もなし。さてかざしの姫君はいよく不思議の思ひをなし給へども、人にとふべきたよりもあらねば、心ならず、それよりして互の御契り浅からず、忍びくに通ひ給へば、いつとなく日數をすこし給ふほどに、ある時姫君仰せけるは、「今は何をか包み給ふらむ、はやく御名をしらせ給へかし。」ときこえたまへば、この人恥かしけにて、「このあたりに少將と申しはべる者なり。後には定めて知召すべし。」とて、歸り給ひぬ。そのころ朝廷には花そろへありとて、人々を召されければ、中納言殿も參り給ふ。みかど、中納言を近づけ給ひ、「尋常ならぬ菊の花そろへ奉れ。」と、繪言あらせ給へば、ちからなくして中納言、「菊を奉らむ。」とて、歸られけり。さて少將は、その日の暮方に、西の對に來り給ひて、いつよりも打萎れたる有様にて、



○世の中のおたなる事 世の中のはかない、たよりない事。  
 ○見えまらせむ事 御目にかゝる事。

○あひ構へて 決して。  
 ○下繪したる薄様 模様のやうに繪を書いた薄い鳥子紙。

○はしまで思ひなけき給ひけり 未まで思ひ考へて歎かれた

世の中のおたなる事ども、語り續けて、うち涙ぐみ給へば、かざしの姫君、何とやらむ御物思ひ姿見えさせ給へば、「いかなる事を、思召しわづらひ候ぞや。」と、終夜きこえさせたまへば、「今は何をか包み候べき、見えまらせむ事も、けふを限りとなりぬれば、如何ならむ末の世までと、思ひし事を、皆徒事となりなむ事の悲しさよ。」とて、さめくと泣き給へば、姫君も、「こはいかなることぞや、御身をこそ深く頼み奉りしに、自らをば何となれとて、さやうにはきこえさせ給ふらむ。野の末山の奥までも、誘ひ給へかし。」とて、聲を惜しまず悲しみ給へば、少將も、「心にまかせざれば。」とて、とかくの詞もなし。や、ありて少將涙の隙よりも、「今ははや立歸りなむ。あひ構へてく思召し忘れたまふな、自らも御心ざしいつの世に忘るべきなむ。」といひて、髪をきりて、下繪したる薄様に包みて、「若し思召し出でむ時は、これを御覽せさせたまへ。」とて、姫君にまらせて、また胎内にも、緑子をのこしおけば、如何にもくよきやうに育て給ひて、我が形見とも思召せ。」とて、泣くく出でたまへば、姫君も御簾の外までしのび（股文あり）あづけおき、「いづくへとてかおはすらむ、今一たび見え給へ。」と悲しみ、只ならぬ御身としてはしまで思ひなけき給ひけり。今はなやましくならせ給へば、乳母いかにと悲しみて、母上に此の由申

○かんなぎ 巫祝。神をいつき祀つて、卜占、祈禱などする人。

○つごもり 三十日  
 ○酉の刻 午後六時  
 ○いたはりつかせ給へる 病にかゝられたる。

○あやふき 危き、不吉な。

○忍びはつべき 隠しおほせる。  
 ○内参り 参内する事、天子の後宮へ参らせる事、妃などを志したのである。  
 ○さてのみやまむ そのまゝで終る。

しければ、中納言殿も騒ぎ給ひていろくに勞り給へども、そのしるしこそなかりけれ。乳母かんなぎの方へ行き、「御年十五にならせ給ふ姫君の、長月つごもりの酉の刻よりいたはりつかせ給へるは、いかゞ候べき、考へて給はり候へ。」と聞えしかば、神主申しけるは、「なにともはかりがたく候、若したゞならぬ御身にてやおはすらむ。如何様にもあやふき御占にて候。」とありしかば、乳母不思議の思ひをなし、急ぎかへりて母上にかくと申されければ、北の御方仰せけるは、「みづからも然様には見なしてありしかども、さやうの事はあらじと思ひ侍れば、言ひいでむ事もさすがにて、若し又いかなる事にかありけむ、よく賺して問ひ給へ。」ときこえければ、乳母對の屋に参りて、「御姿を見参らすに、たゞならぬ御有様と覺えて候ぞや、自らに何をか包ませ給ふべき、御心の内しらせたまへかし。」とこまくと囁きければ、姫君思召しけるやうは、とても忍びはつべき事ならねば、語らばやと思召し、恥かしながら、始終の事どもを、残りなくきこえければ、乳母あさましく思ひけり。さるほどに乳母北の御方へ参り、ありのまゝに申しければ、中納言殿も聞召し、「類なく淺ましき事かな、内参りの事をこそあけくれ思ひしに、さてのみやまむ本意なさよ。」とて、うちすさみ給ふ。さる程にやうく月日も重なりければ、内々御産所を

○介錯 介約が正し  
いと云ふ、介抱する  
意。

○あやめも見えさせ  
給はねども 赤児は  
眼はまだ見えないけ  
れども。

○忘れ形見 忘れ難  
きと形身とをかけた  
語。忘れられぬ記念  
○母姫君 母となり  
しかざしの姫君のこ  
と。

○御袖に移し給ふ  
自分の袖にうつして  
抱かれた。  
○御袴著せ参らせ  
初めて袴著る儀式通  
常五歳又は七歳で行  
ふ。

初めて、女房達數多介錯申しければ、實に美しき姫君出でき給ふ。乳母嬉しく思ひ、やがて御産湯衣まるらせて、申されけるは、「人々も見給へ。母姫君も御覽ぜよ。これにつけても、御命ながくよ。」とて、母姫君にさしよせ給へば、姫君見やり給へば、未だあやめも見えさせ給はねども、かッやき美しく、御顔ばせ、父少將に少しもちがはせ給はねば、そのとき姫君かくぞ詠じ給ふ。

夢ならば夢にてさめてあさましやこはいかなりし忘れ形見ぞ

とて、御涙をながし給ふ。さるほどに北の御方聞召し、「あらうれしのことどもや、いそぎ中納言殿に見せ参らせむ。」とありしかば、母姫君思召しけるやうは、あら恥かしのことどもや、親の身にても、さこそあさましくおほすらめ。これにつきても少將殿命をめせとぞ悲しみ給ふ。さてあるべきにあらざれば、乳母、姫君を抱き給ひ、北の御方諸共に、中納言殿御覽じて、「あら美しの姫君や。」とて、聽て御袖に移し給ふ。御いとほしみ限りなし。かくてつながぬ月日なりければ、七歳にて御袴著せ参らせ給ひけり。日數を経る程に、程なく十三にぞならせ給ふ。「眉目容の美しさ、唐の楊貴妃、漢の李夫人、我が朝の衣通姫、小野小町なども、これにはよも勝らじ。」とて、人々申しけり。さる程に君聞召されて、

○女御 中宮につぐ  
天子の妃。

女御にぞ定まりける。中納言殿も、北の御方、母姫諸共に、御喜びは限りなし。さても御門御寵愛甚だしくこそきこえけれ。いよく淺からぬ御心にも、かなひ給へば、ほどなく若宮、姫宮うちつゞきいでき給ひて、まことにめでたき事にぞ人々申しけり。あまりに不思議なる例なれば、末の世までの物語に書きおき侍べるなり。

花 み つ

○天下親子になり給ひしかば、國內の皇室と臣民が親子の如く一致したから。  
 ○菊池 菊池武敏。延元元年備前で足利勢を破つた事が太平記に出て居る。  
 ○御運いかめしく運がよく。  
 ○騎濱 筑前柏屋郡多々羅も帯く。  
 ○手を碎き合戦し骨を折つて戦ひ。  
 ○いこくはつ申すに及ばず 感光は申すに及ばずの誤りか。  
 ○しうしんのぎも主臣の義も。  
 ○法華寺 法華山寺播磨加西郡下里村。  
 ○赤寫山 播磨加路の西北一里半、頂に圓教寺(天台宗)あり

尊氏將軍の御時、既に一天下親子になり給ひしかば、尊氏都にこらへ難くして、筑紫をさして落ちさせ給ふ所を、菊池大勢にて追ひかけ奉る。尊氏の御勢僅に一千餘騎には過ぎざりし。されども御運いかめしく韃靼の合戦に打勝ち給ふ。其の故は赤松の妙善律師則祐といふ人、手を碎き合戦し、高名大きに勝れたり。されば赤松は播磨十六郡を賜はりて、入國のいこくはつ申すに及ばず、一族若黨其の數を知らず。こゝに岡部といふ新參の者一人侍り、器量骨柄人に勝れて文武二道の兵なり。しうしんのぎもよく心に相叶へり。しかれば播磨西八郡を賜はつて、草木を靡かしたまひけるが、一人の子をもたずして、ある時心に思ひけるは、申子をせばやと思ひ立ち、聽て女房は法華寺に參り、岡部は書寫山に參籠申し、深く祈請を申しける。七日に満ずる夢に答める花を一房賜はるに、青き葉の風に散ると見て、夢はさめにけり。さては子を賜はらむ事は疑ひなけれども、妾がはかなくならむよと、思ひながらも下向する。岡部が見る夢にも盛りなる花一枝賜はるとありけれ

○大番 交替で宮城を護衛する役、通常三箇年間の任期。

○比翼連理 比翼の鳥、連理の樹の如く睦み合ふ義。

○わが殿 我が主君足利氏をさす。

○大殿 赤松則祐をさす。

○ゆひがひなく振舞ひたらん時は 云ひかひなく、つまらない行動をこつた時は

ば、青き葉の風に散ると見る程に、われに子を賜はる事は疑ひなけれ共、葉の散ると見る事の心もとなけれど、思ひながら下向する。程なく女房懐妊して産の紐をぞ解きにける。男子なりければ斜ならず喜うで、名をば花みつ殿とぞつけたりける。

かかりける所に、赤松殿、岡部を召して仰せけるは、「われ三年三月の大番を仰せ下されたり、某上るべけれども、御邊某が苗字を名のりて御番勤めよ。」とありければ、「主の苗字を許さるゝ所面目これに過ぐべからず。」と、急ぎ都へ上り御番を受取り、日數を送りゆく程に、傍輩の方より、「暫く在京の程召使はれ候へ。」とて、優なる女房を一人遣はしけり。心さま人に勝れければ、岡部在京の程愛して比翼連理の思ひをなしければ、程なく子を一人まうけたり。比は九月十三夜の事なれば、月によそへて月光とぞ名づけける。

大番も過ぎければ、月光同じく母上を相具して下り、始めて家を作り、あたらし殿とぞ申しける。花みつが母にも劣らずもてなしけり。やうく月日を送りゆく程に、花みつ十歳になりける時、岡部思ふ様、赤松殿は久しくわが殿の御一族なれば、大殿久しくわが殿の奉公仕りけり、二人の者共を相具して其の時ゆひがひなく振舞ひたらむ時は、主の恥、我が家の恥ぞかし、思へば山寺へも上せばやと思へども、萬の事共案じける時、書寫山へ

○別當の御房 此の寺の住職の居る家。

○色小袖 色染の小袖、普通のものには白小袖である。小袖は下著で袖の小さい衣

まるらばやと思ひ、花みつをば輿こに乗せて別當の御房へぞまゐりける。別當守護代御上りとて座敷を飾り、寶物たからものを調へ待ちける程に、花みつの輿をば縁近くかかせければ、別當も同宿も怪しく思ふ所に、年の齡十歳ばかりと見えたる兒の色白く美しきが、色小袖にこ精好かうの大口たわくと著なし、薄化粧したるが輿の内より出で給ひければ、別當喜びて、やがて坊中の兒達を請じ、座敷の體美々しく見えけり。杯三獻に及びければ、少人を初めとして打亂れ、既に酒盛になりければ、別當既に酩酊して、酒を飲み得ず。岡部心に思ふやう、花みつを兒に請へかし、請はればこのまゝなりとも置くべきものと思ひければ、別當に酒を強ひて、「今一つ聞召せ、御所望のこと御座候はば、何事にも承り候へ、奉公申すべき。」といひければ、別當、酒たふくとうけて、「法師は別して何も所望にも候はず、只今これに御座候少人は、定めていづかたへも御約束候はむすれども、暫くの間、別當に御預け候へ、後見申したく候。」と仰せければ、岡部一往は辭退しけるが、再遍に及びければ、仔細なしと領承しけり。別當餘りの嬉しさに三杯飲みて、花みつ殿に思ひざして、其の杯を祝著して、われ又飲みて岡部にさしけり。色々の藝能をつくして、既に酒盛も過ぎければ、岡部花みつを呼びて、「汝はこのまゝ、これに在るべし。」とて、若黨わかたう小厮こものを相添へて

○大口 大口袴の畧束帯の時など表袴の下に著る、大きく張つてる袴。

○たわ／＼ しなやかに。

○少年 少年、即ち此の坊中の兒等をさす。

○再遍 二度。

○祝著して 祝つて

○翡翠の髪さし 濃く黒い髪。

○本臺 正しい御臺所。本妻。

○雜餉 此の時代の厨事薪炭等の雜役を掌る人。

○引きかへたる氣色 之とちがつた様子

○花みつ殿にぞ靡きける 花みつの母の勢力を見て皆花みつの方に附隨した。

○ごにもかくにもなるならば 死んだならばを婉曲に云つた

○あたらし殿 月光の母をさす。

○思ひ切つて 此の人の世の望みを断つて。

花 み つ

置きけり。さる程に岡部下向して思ひけるは、今は月光もいかに羨ましく思ふらむとて、吉日を選みて同じ坊へぞ上せける。さる程にこの兒達は成人するに随つて容顏人に勝れ、芙蓉ふきようのまなじり鮮かに、青黛せいだいの眉麗しく、丹花の唇うつくしく、翡翠の髪さし、誠に以て濃やかなり。見る人は申すに及ばず、聞き傳へし人も、心を懸けずといふ事なし。されば情なさけも色深く、心ざまも正しくして類なし。書寫は三百坊と申せども、一千餘人の老若おしなべて此の兒に心を寄せざるはなし。さる程に花みつ殿の母上は本臺にてまします上は、四季に従つて衣裝色々をつくして、折節の雜餉何に乏しき事はなし。月光殿の母上はいまだ何事も心に任せざる事なれば、引きかへたる氣色なりければ、人の心の薄情さは皆花みつ殿にぞ靡きける。花みつ殿十四と申せし春の比、母上生死無常のならひなれば、既に危く見え給へば、花みつを近づけて、「我ともかくにもなるならば、定めてあたらし殿此の家に移り給ひて、月光を世に立てらるべし、左様になるとも相構へて威勢争ふべからず。只汝は思ひ切つて法師になつて妾が後の世をとぶらば、誠の孝子と思ふべし。」とゆひ含め遂に空しくなりにけり。

案の如く月光殿の母上は本の家に移りて、よろづ思ふやうなり。斯かりける所に京都又

○ありきたにも問はず、さうして居るもたづねず。  
 ○小袖風情 小袖の様なもの。輕視した云ひ表はし方、小袖みたいなものでも。○つきなる 二の次の。上等でない。  
 ○こしの御方へ居士か御師か、恐らく前者であらう。  
 ○雜餉かまへ 雜餉を用意し、命じて。  
 ○人の心のつたなさは 人心の淺はかなさは。  
 ○賞齎す もて難す  
 ○譏奏 譏訴の詔。  
 ○露に争ふ袖の上 涙のしけき袖の上。  
 ○打添ふ母の面影 身近く淨ぶ亡き母の面影。

亂れ、天下亂世となりしかば、國土の軍兵共京へ上りければ、赤松殿も上洛あり、岡部も御供申して上りけり。多くの日數つもりしかば、繼子繼母の事なれば、花みつの方へは月に一度も何事かありとだにも問はず、たま／＼小袖風情の物を仕立てて上する時も、つぎなる小袖を上せけり。月光殿の方へはよき小袖を數をつくして上せけり。これは坊主の御方へ、これはこしの御方へとて、雜餉かまへ送りけり。人の心のつたなさは皆月光殿と賞翫す。されば花みつ殿は何事につきてもよろづ物あぢきなくして、一日二日と過ぎ給ふ。岡部都より下りけるに、女房語りけるは、「花みつ殿は坊主の御方より暫くの閒不興あるべし。」と語りければ、岡部思ふ様、繼子繼母の事なれば、空言にてもあるらむと思へども、まづ／＼女の心を破らじと思へば、寺へ人を遣はして月光が方へ文を上せていふ様は、「急ぎ此の使と下るべし、花みつには思ふ仔細あり、此方より申さむ時に下るべし。」とありければ、花みつ殿、「我らこそ兄なれば、まづ文をも賜はりて下るべきに、月光が方へ御文ありて下さるゝに、何ぞ怨めしや、仰せ事のうたてさよ。」と言ひければ、月光申す様は、「定めて母の譏奏にてや候らむ。」とて、打涙ぐみいへば、花みつ殿にも、「さは候はじ、もしさもあらばよき様に申させ給へ、聽て某も下りたく候、下らせ給へば心安くて候。」とて打涙

○兄の心もなさに兄の氣づかはしき。  
 ○猶も大人しくぞあるらむ これ以上に大人びて居らう。  
 ○所詮寺へ上りたれば 要するに自分が寺へ行って見れば。  
 ○大方の事にて言ひ許して見せむするものを 大抵の事と言ひなだめて見せようものを。  
 ○雜餉さりはやし 雜餉がさりもちとして  
 ○心をさりかね 心中を推測しかね。  
 ○別當の氣にも誠にちがひけるぞ 眞實に別當の御機嫌をそこねて居るぞ。  
 ○心にそます 身にしみず。

ぐみて、さすが人目も恥かしければ、露に争ふ袖の上、打添ふ母の面影の、今更いとど戀しくて、わが住む部屋に歸りつゝ、さめ／＼と泣きければ、餘所の袖までもあはれにて、皆感涙を流しけり。月光も兄の心もとなさに、泣く／＼里へぞ下りける。岡部は月光が成人したるを見るにつけても、花みつかくこそあるらむ、猶も大人しくぞあるらむ、彼の母の草の陰にても、不興といふ事をさこそうたてく思すらむ、所詮寺へ上りたれば、定めて事の様は知るべし、別當に大方の事にて言ひ許して見せむするものを、と思ひて、聽て月光を打連れて上りけり。別當いであひ、雜餉とりはやし、自餘の兒達も座敷に直られけれども、花みつ殿はさしいづる事なし。別當花みつに仰せけるは、「機嫌を窺ひ御身の事を申し許し進ませむ。」と言ひ慰めてありけり。岡部、所詮只今急ぎて上るも、只我が子のゆかしきにこそあれ、疾くして別當の此の事のひいだして許せとあれかし、思ふ事なくて酒をのみて歸らむと思へども、別當も心中に此の事をのみ思ひけれども、岡部殿の機嫌打解けぬ體を見、心をとりかねてのひ出さざりけり。

岡部思ひけるは、無慙や此の子は別當の氣にも誠にちがひけるぞ、此の者の事を一ことゆひ出されざる事よと思へば、酒も心にそますして座敷を立ちければ、花みつは父の戀し

○鱈板 板塀。内部を覗けぬやう覆ふ板  
 ○さながら そのまま空しく。  
 ○これ程にうたてし  
 くあるらめ これほどつらくされるのであらうの意。  
 ○さにもかくにもなるより外は 死ぬより外はない。  
 ○大ふし、う 大夫侍従。二人の名。  
 ○如意輪堂 如意輪観音を祀つた堂、同観音は手に如意寶珠を持ち衆生の祈願を充たしめること云ふ。  
 ○茅店まさに明らかにして云々 温庭筠の絶句「離聲茅店月人跡板橋霜」を寫へ用ゐた。

さに鱈板の隙より次第に見送りて見れば、岡部も涙ぐみて、無慙や此の子われらを戀しと思へばこそ、彼處の陰よりもや覗きて見るらむと、こゝかしこの隙より見るほどに、鱈板の隙より目と目と見合はせけり。岡部さればこそ此の子よと思へども、何といふべき様もなければ、さながらにて歸れば、兒遙かに見送りて、稍久しく立ちて、遂に泣くく部屋へ歸りて、つくぐ案じて思ひ給ふ様は、われは父の不興のみならず、坊主の御心にもちがひ、憎まれ參らせてありけるものを、たとひ我が親は人のゆひなしにより不興と宣ふとも、坊主だにとりもちて御詫言あらむに、なか許されざるべけれども、坊主の御氣にちがひ申すによりてこそ、これ程にうたてしくあるらめと思ひ入りければ、われは今母親はなし、父親はあれども不興の咎を蒙りて、師匠にも憎まれぬる上は、うき世にありても何かせむ、ともかくにもなるより外はと思ひ、召使ふまつわう丸を呼びて、「大ふし、う二人のこしの方へ、「此の夜この月の面白さに社に參り申し、面々諸共に月を眺めて、御心をも慰めばやと思ひ立ちて。」と宣へば、二人同じく、「易き事。」といふ儘に、二人が一人は前に、一人は後に立ち、まつわう丸を引具して、如意輪堂に參りけり。折節人もなかりしに、比は八月十五夜中の事なれば、茅店まさに明らかにして、板橋おのづから靜かに、松

○言語道斷 言葉で言ひ現はし得ぬ程佳い景色。  
 ○假令 まるで。  
 ○月影も兒の袂に云云 袂が涙に満ちたから月光が浮くやうに見えた意。  
 ○御里の様の事は 御實家のあの事は。  
 ○いかゞし給ひしが 何かゞ優遇されたが。  
 ○何事をか仰せを背くべきと 「と」は軽い感歎を現はす語であらう。「ぞ」或は「よ」と同じ意味で今も地方に用ゐる。  
 ○たゞへは 具體的に言へば。  
 ○討つて賜はり候へ 此の「と」云ふ用語も前と同じ。

風颯々と吹いて谷川の聲りんくと響きけるは、言語道斷の次第なり。皆もろともに心を澄まして、いと信心に念誦し、その後はこし方行く末の物語どもまで言ひ出して、涙を流し、假令月影も兒の袂に浮ぶ程に見えければ、二人の法師怪しく思ひて、兒の心を慰めむとて、「何事にても候へ、われくかくて候上は御心安く思召せ、心を残さず承り候へ、御里の様の事は、今一旦の人の申しなしにてぞ候らむ、やがて思し直さるべし、其の外は何事をか御心にかかせ給ふべき、いかやうの御事なりとも、我等に深く御心を残させたまふな。」と申せば、兒も暫く打案じて、「今は何をか包むべき、母にて候ひし人世にありし時は、坊主も人々もわれくをいかゞとし給ひしが、今此の頃は人々の心も變り候、面々様ばかりこそ、われらを不便と思召し候へ、そのみ御嬉しく候、情にて候。」とて、かきくどき宣へば、二人諸共に袖をぬらしけり。  
 稍久しくありて、「所詮面々に申したきこと候、聞召し入れ候はば申すべし、一大事の事にて候。」といへば、「何事をか仰せを背くべきと、一命をすつる事にても候へ、露塵とや思ひ候べき。」と、誠に思入つたる體に申せば、「さては嬉しく候、誠の御志とはかやうの御事を申し候へ。」と、ねんごろに喜びて、「たとへば弟の月光討つて賜はり候へと、これこそ一

○これはよもと思ひつるものを、之は決して口外しまいと思つて居たものを。  
 ○さこそあらめ、定めて大變な事にならうの意を含めた語。

○一定 きつじ。  
 ○無體に わけもな

○思ひ切りて、決心して。  
 ○よしそれも今はいらぬことなり、いやそんな辯解はもう無用である。之は二人の詞である。  
 ○夜こめて、夜のうちに。

大事の御用とは申し候へ。」といへば、二人返事に及び難く、赤面してあり。兒、「さればこそこれはよもと思ひつるものを、心易くゆひ出したる口惜しさよ、此の事漏れて聞ゆるならば、坊主にも里にもさこそあらめ、今はなかの坊へも歸るまじ。」といへば、とかくする程に、「夜も更けゆき候に、皆々御歸り候へ、御名残をしくは候へども、とても長らへて添ひはて申すべき身とも思ひ候はねば、われはこれよりいつくの浦曲の末、山の奥までも、身をすごし候べき、さすが棄て難き命にて候へ、長らへて候はば互に見え申すべし、もし露の身のならひにて、消えぬと聞召し候はば、後の世を頼み入り候。」といへば、此の兒は一定自害をすべき、さなして此の人を失ふべきにあらず、火に入るも水に入るも前世の因果なり、二人の兒をば孰れとも思はねども、そも此の兒を無體に失はむより、彼の月光をこそ兎にも角にもなし參らせむとて同心し、思ひ切りて、「さらば仔細なし。」と領承し、花みつ殿涙を流し、「さこそ面々、不得心に思召し候はむ、御心中ども恥ぢ入り候。よしそれも今はいらぬことなり、さてもいつといへば、兒は我が所へ十六日に定めて來り候はむ時、われ聲もせずして候べし、歸り候はむ所を討たせ給ひ候へ。」といへば、「仔細なし。」と領承す。さらばとて皆々夜こめて歸りけり。二人の法師は一所にゐて、「さてもうき世の

○露消えむ花の朝顔いつまでと、露は先きに消え、花は榮華を誇るやうであるが之もやがていつまで榮えよう。  
 ○つく／＼鳴りしんみりと響き。  
 ○打刀 敵を刺す刀に對する語。鐔があり敵を打つに便した長刀。  
 ○肘のかゝり 肘のはし。

○見紛ひて 見違へて。  
 ○二つともなし 外にし方もない。

習ひとて、斯かる憂き目を見む事よ、さりながら力なし、後の世をこそ弔ひ申すべけれ。」とぞ言ひける。兒はわがやに歸りけり。露消えむ花の朝顔いつまでと、はかなき命ありあけの、月も傾く名残にて、月日を待つこそ悲しけれ。  
 さる程に十六日の暮方に入相の鐘もつく／＼鳴り、月影も山の端に忍びて出でもやらざるに、二人の法師は用意して、わざと具足は著す、打刀ばかりにて、花みつ殿の局の前に立つ。花みつ殿は月光殿の姿に身をなして、暫く叩き給ひければ、内より聲もせざりければ、「餘所へ御いでか。」と、獨り言をいひ歸り給ふ所を、大ふは餘りの悲しさに走りより、足をむんずと抱きつく。し、うは思ひ切らではとて、肘のかゝりを二刀さしてすて奉る。二人の者泣く／＼歸りて、扱もく我は情なき事をしたるものかな、法師の身にて兒を殺害する事は例なき次第なり、但し後の世をとぶらひ申すべしとて、泣き悲しむ所に、こはいかにしつる事ぞや、花みつ殿を今宵人の殺したるぞとて、上下騒ぎければ、二人の法師これを聞き、見紛ひてぞあるらむと思ひながら、行きて見れば花みつ殿なり。さては此の兒にたばかられてこそとて、二つともなし、自害するより外はなしと思ひ切りて、二人の法師は、「今は何をか隠し申すべき、花みつ殿をば我等二人が殺し申すなり、いつぞやの頃

○打棄て給ひ 切り  
すて給ひ。

○た、なかなり 悲  
しみのまん中。極ま  
云ふ事か。

○面々の道理なり  
おの、\方 of 態度が  
尤も千萬である。

○失はむめ 失はめ  
の音使。

○きやう 孝養の誤  
りであらう。

○文共數多 花みつ  
の音置である。

本堂にて我等を頼み給ふやうは、弟の月光を害してくれよ、其の仔細は餘りに母のうたて  
しく我に當り給ひ候事の憎ければ、子を殺して思ひ知らせむとありければ、かく仕り候。」  
といへば、別當何事かわが心中に變り候べき、さこそく思はせ給ふらむ、此の老僧をさへ  
打棄て給ひ、自害をし給ひ候はば、悲しみの中の悲しみを、何となれとか思ひ給ひしやら  
む、今は只いかにも共々に此の人を弔ひ申すべけれ。」と宣へば、これ又た、なかなり。  
かかりける所に月光殿、「此の事は面々の道理なり、花みつ殿と我と比ぶれば、月光をこ  
そ失はむめと思召し候心中御ことわりなり、我におきては更に怨みとも思ひ候はず、今は  
只われらもとも々にいかやうにもとぶらひ申すべし。」と、泣くく宣へば、これ又理をわ  
けて宣ふものかなとて、自害をばやみぬ。たゞ一筋にきやうをしたてまつりて、その後發  
心修行をも仕り候べけれと思ひ直し、二人の法師別當ともに死骸をとり、孝養せむとしけ  
る。泣くく別當申されけるは、「此の兒十歳といひしとき親父に請ひ申し、十六歳の今に  
至るまで露愚かなく育て奉るに、かやうに憂き目を見せ給ふ事の悲しさよ。」と歎きたまへ  
ば、一山の老若は申すに及ばず、賤しき者までも皆感涙を流しけり。さる程に文共數多あ  
り。一の文は坊主の御方へとあり。見れば幼少の時より今まで人となされ參らせ候へば、

朝夕御手をも引きまらせ候と思ひ、又後の世をも弔ひ申さむと思ひて候ひしかど、かや  
うにことの外なる有様、誠に生々世々の御怨みとこそ思ひ候へとて、二首の歌あり、

花はちり跡はさびしくなりぬればしもうらめしき心こそすれ

さこそなほ月をぞ人のもてあそぶ花はあだなる物と思へば

又一つの文は大ふ、し、う殿へとて、さても御手にかゝりかやうになり候こと、後の世を  
ば頼み入り候とて、二首の歌あり、

久方のあま照る月に名をとめて散る花みつとたれか言はまし

二つあらば一つの命のこしおき君がなさけを思ひ知らばや

又一つの文は月光殿へとあり。又もなき兄弟にかやうになりゆき候へば、さこそ思はせ給  
ふらむと、そのみ心にかゝり候とて、一首の歌あり、

花の雲風に散りなば月ひとり残らむ世こそ羨ましかれ

又一つの文御父の方へとあり。言葉はなくて歌ばかり、

をしまれぬ身は山陰のさくら花散るともたれか哀れとは見む

斯様に書きおかせ給ひける程に、此の由を里へ告ぐる程に、岡部さればこそ不思議の事い

○花はあだなる物と  
思へば 花即ち自分  
はつまらぬ物と思ふ  
から。

○又もなき 二人と  
なき。

○不思議の事 大變  
な事件。



○是非の次第 是非もない事

○善知識 佛道に導く善い案内者。

○むにん 「無人」

○順縁逆縁 佛果菩提を望むに當り、佛道に逆ふのを逆縁、順ふのを順縁とする。但し日本の俗語は之と意味が異なる。

○御方便 一時のかりの手段。

○有り難く 尊く。

○末の露もこの暁や云々 新古今集巻第八哀傷歌、下句は「おくれさきだつためしなるらむ。」

○よもの海濱のまさごを數へつ、云々

古今集巻第七。賀歌上句は、「わたつ海の」になつて居る。

できけると思ひて、急ぎ寺へ上りければ、是非の次第なか／＼言葉に及ばざりければ、孝養營み、空しき野邊の夕煙となし、月光、大ふ、し、う殿、まつわう丸ともに行きかた知らずなりにけり。別當も又うき世にありても何かせむとて、ある山深く閉ぢこもり、行ひ澄しておはしけり。さる程に岡部も花みつには死して別れ、月光には生きて別れ、彼せむ方もなければ、髻を切りて猶も子どもの行末の悲しさに、別當の住み給ひける山の奥を尋ねゆきて、花を摘み香を焚き薪を採り水を汲み、亡者の菩提をとぶらひけるは、現世後生の然るべき善知識とぞおほえける。

月光、大ふ、し、う、まつわう丸四人の人々は、高野山へ上り奥の院近く閉ぢこもり、難行苦行してむにんの御あとをとぶらひけるこそやさしけれ。昔より今に至るまで繼子繼母程うたてしき事はなしと言ひ傳へたり。さりながら順縁逆縁皆佛菩薩の御方便なれば、此の人々の發心修行しけるも、誠に頼もしく有り難くこそ思ひはんべりけれ。

末の跡もとの雫や世の中の後れ先だつならひなりけり

よもの海濱のまさごを數へつ、君が千年のありかすにせむ

玉水物語

上

○宰相 參議。

○三十二相 佛の相好から出た美人の要件。

○なべてならず 特別に。

○なほざりばかりは云々 何もさせないで置くのを可哀想に思はれ。

○前栽 庭園。

○御乳母子 自分の乳母の子、即ち乳兄弟に當る。

中比の事にや有りけむ、鳥羽の邊に高柳の宰相と申す人坐せしが、三十に餘り給ふまで御子もなく、如何なればとて歎き給ひて、神佛に祈り申し給ひければ、其の效驗にや北の方只ならず見えさせ給ふ、御悦び限りなかりけり。さて神無月の初めつ方に、姫君出で來給ひけり。手の上の玉と俣き育て奉り給ふ。三十二相の御容めでたく、誠に傍光る許りに見え給ふ。斯くて年月重なる儘に十四五に成らせ給ふ。吹く風立つ波につけても、心にかけて歌をよみ詩を詠じ、何となき御遊びにても類有り難く坐しければ、父母なべてならず思し俣きて、なほざりばかりは痛はしく思召し、御宮仕へにや出し立てむと思す。御心様優にやさしく坐せば、前栽の花ども咲き亂れ、四方の山邊の霞み渡りいと面白きを、或夕暮に御乳母子の月さえと申す女房只獨り御供にて花園へ立出で給ひつ、花に戯れ、何心なく遊び給へり。此の邊には狐と申す者多く住みける處なり。折節此の花園に狐一つ

○餘所にてもよそながらも。直接逢はないでも横から。  
○靜心なく、心落ちつかず。

○御身徒らに 姫君の一生が無駄になる  
○じんごう 神頭、鐵の一種、實頭の轉音であらうと云ふ。  
多く木製で長筒圓球の一端を切つた形。漆で黒く塗り、長さ二寸餘。  
○在家 僧家に對する語。こゝでは單に田舎の家。  
○一人女ならましかは 子供の内一人だけは女であつてほしい。

侍りしが、姫君を見奉り、あな美しの御姿や、せめて時々も斯かる御有様を、餘所にても見奉らばやと思ひて、木陰に立隠れて、靜心なく思ひ奉りけるこそ淺ましけれ。姫君歸らせ給ひぬれば、狐も斯くてあるべき事ならずと思ひて、我が塚へぞ歸りける。熟々と座禪して身の有様を觀するに、我前の世如何なる罪の報いにて、斯かる獸と生れけむ、美しき人を見染め奉りて、及ばぬ戀路に身を借し、徒らに消え失せなむこそ怨めしけれと打案じ、潸然と打泣きて伏し思ひける程に、よきに化けて此の姫君に逢ひ奉らばやと思ひけるが、又打返し思ふ様、我姫君に逢ひ奉らば、必ず御身徒らに成り給ひぬべし、父母の御歎きと言ひ世に類なき御有様なるを、徒らに爲し奉らむこと御痛はしく、兔や角やと思ひ亂れて、明し暮しけるほどに、餌食をも服せねば、身も疲れてぞ伏し暮しける。もしや見奉ると、彼の花園に踰躑ひ出づれば人に見られ、或は飛礫を負ひ、或はじんどうを射掛けられ、いと心を焦しけるこそあはれなれ。中々に露霜とも消えやらぬ命、物憂く思ひけるが、如何にして御側近く参りて、朝夕見奉り心を慰めばやと思ひ廻らして、或在家の許に男許り數多ありて、女子を持たで、多き子供の中に一人女ならましかばと、朝夕歎くを便りにて年十四五の容鮮やかなる女に化けて、彼の家に行き、「我は西の京の邊に在りし者なり、無縁の身となり頼む方なき儘に、足に任せて是れまで迷ひ出でぬれど、行くべき方も覺えねば頼み奉らむ」といふ。主の女房打見て、「痛はしや尋常人ならぬ御姿にて、如何にして是れまで迷ひ出でけむ、同じくは我を親と思ひ給へ、男は數多候へども女子を持たねば朝夕ほしきに。」といふ。「左様の事こそ嬉しけれ、何處を指して行くべき方も侍らず。」といへば、斜ならず喜びて愛しみ置き奉る。如何にしてさも有らむ人に見せ奉らばやと營みける。されど此の娘つや／＼打解くる氣色も無く、折々は打泣きなどし給ふ故、「もし見給ふ君など候はば、我に隠さず語り給へ。」と慰めければ、ゆめ／＼左様の事は侍らず、憂き身のめざましく覺えて斯く結ほれたる様なれば、人に見ゆる事などは思ひも寄らず、唯美しからむ姫君などの御側に侍りて、「御宮仕へ申し度侍るなり。」と言へば、「よき所へ有り付き奉らばや。」とこそ常に申せども、さも思召さば、兔も角も御心には違ひ候まじ。高柳殿の姫君こそ優にやさしく坐せば、妾が妹、この御所に御ひてうにて候へば、聞きてこそ申さめ、何事も心易く思されむ事は語り給へ、違へ奉らじ。」と言へば最嬉しと思ひたり。斯く語らふ所に、彼の者來りければ、此の由を語れば、其の様をこそ申さめとて、立歸り御乳母に伺へば、「さらば唯やがて参らせよ。」と宣ふ。悦びて引裝ひ参りぬ。見様容貌美

○もし見給ふ君 見初めた人。戀ひ初めた人。  
○憂き身のめざましく覺えて 悲しみ多き自分の身をあさましく感じられて。  
○斯く結ほれたる様なれば かやうに鬱結した有様であるから。  
○御ひてう 御秘藏の詔か、御秘藏かであらう。  
○違へ奉らじ きつと聞いて上げよう。  
○其の様を その事情を。その仔細を。  
○さらば唯やがて そんなら今直ぐ。

○供御 食膳。

○身の毛一つ立に  
るやうにて、總身の  
毛が悉く逆立つ程恐  
怖する意。

○御覺えの程 御寵  
愛の程度。

○口々申しければ

口の内くちで低く云ふ意  
○さみだれの程は雲  
の郭かく云々 五月  
雨あめの降る間は、傷く  
垂たれれて居る空で鳴く  
時鳥。

しかりければ、姫君も悦ばせ給ひて、名をば玉水の前と付け給ふ。何彼なにかにつけても優にや  
さしき風情かぜいして、姫君の御遊び、御側に朝夕馴れ仕うまつり、御手水おんてうづ參らせ供御參らせ、  
月さえと同じく御衣おんぎの下に臥し、立去る事なく候ひける。御庭に犬など參りければ、此の  
人顔の色違ちがひ、身の毛一つ立たちになるやうにて、物も食ひ得ず、けしからぬ風情なれば、御  
心苦しく思されて、御所中に犬を置かせ給はず。餘りけしからぬ物怖ものおぢかな、此の人の御  
覺えの程の御羨うらやましきよなど、傍かたはらには嫉ねたむ人もあるべし。斯くて過ぎ行く程に、五月半  
の頃、殊更月も隈なき夜、姫君簾みすの際さへ近くさへるざらせ給ひて、打眺め給ひけるに、時鳥おと  
づれて過ぎければ、

郭公雲居かくこううんぐのよそに音をぞ鳴く

と仰せければ、玉水取敢へず、

ふかき思ひのたぐひなるらむ

やがてわが心の内と口々申しければ、何事にか有らむ心の中こそゆかしけれ、戀とやらむ  
か、又人に恨むる心などが、怪しくこそとて、

さみだれの程は雲の郭公たがおもひねの色をしるらむ

玉水やがて、

心から雲を出でて郭公いつを限りと音をや鳴くらむ

月さえ、

覺東な山の端いづる月よりも猶鳴きわたる鳥の一聲

など言ひかはし、夜も更けぬれば、内へ入らせ給ひぬ。されども玉水は月残り多く侍ると  
て残り居て、來し方かた行く末打案じ、さても我はいつを限りに何となるべき身の果てぞと、  
漫まに涙漏れ出でて、袖も絞しぼるばかりに成りにければ、

思ひきや稻荷の山をよそに見て雲るはるかの月を見るときは

心から雲を出でて望月の袂に影をさすよしもがな

心から戀の涙をせきとめて身のうき沈むことぞよしなき

最久いとしく歸らねば、月さえ心もとなくて立歸るに、かく吟うたむを聞きて怪しく覺ゆれば、

よそにても哀れをぞ聞く誰ゆるゑに戀の涙に身をしづむらむ

ととむらへば、姫君聞き給ひ、

おほかたの哀れは誰もしらずやと身には習はぬ戀路なりとも

○思ひきや稻荷の山  
をよそに見て云々  
此の狐の故郷は稻荷  
山あたりと見える。  
稻荷山は山城紀伊郡  
深草山の北。そこに  
稻荷神社があり、今  
官幣大社。  
○とむらへば 慰む  
れば。

○思ふ心のもと戀  
ひ思ふ心のそこ。  
○目易く 見安く、  
即ち見ぐるしくなく  
○みやうさく 身を  
うさくか。  
○我も覺束ながら過  
ぐる朝の心には思は  
ざらなむ 私も心も  
さなく思ひながら過  
ごす朝夕の心に、や  
うして母上たちを思  
はない事がありませ  
う。  
○佗しけれ っらい  
○南面の塚 南方の  
墳墓に。狐は塚に居  
りて人に化くるさ信  
ぜられて居る。白氏  
文集に「古塚有狐妖  
且老化為婦人。」  
○所や有る 我々の  
知らぬ所があらうか

はや夜も更けぬらむ、入らせ給へと宣へば、泣くく歸りて、月さえ諸共、姫君に添ひ臥し奉れども、思ふ心のもと言ひ現はさねばにや微睡ます。

斯くて月も立ち行く程に八月許りに成りぬ。初鴈音の告げ渡る聲も身に染む心地して、哀れを訪ふと覺えたり。養母の方よりは絶えず訪れ、誠の親よりも愛しく當りけり。常の衣裳の外にも鮮かに目易く仕立ておこせけり。文にも、「などや時々は出でても慰めたまはぬ、我はかく夜の寢覺にも、生まぬ親なれば、みやうとくのみ持成し給ふ。」と恨みければ、「我も覺束ながら過ぐる朝の心には思はざらなむ、誠の親ならねばと、承るこそ佗しけれ。」など言ひて返事をしければ、是れを見て、けにくさぞ有らむ。理ぞかして打泣きぬ。去る程に三年と申す神無月に、姫君の親しき人々數多寄り集まり給ひて、紅葉合あるべしと定めさせ給ふ。明日にもなりぬれば、色美しく葉數多有らむ紅葉を尋ね侍るに、此の玉水夜更けて打紛れ出で、元の姿になり、鳥羽殿の南面の塚に、兄弟などある處へ行きたりければ、見付けて斜ならず悦び、「如何にや何處より來れるぞ、失せぬると覺えて後の營みをこそ此の三年はしつれ。」此の程御所の邊に候なり、靜かに語り申すべし、さては明日一大事の用ありて紅葉尋ね來りたり各如何にもして尋ねて給へ。」と言ひければ、「所

○添ふべき心地はし  
侍らむものを 侍ら  
むは侍らぬの誂。他  
人につれ添ふ心持は  
ありませんものを。  
○さし次の弟 直ぐ  
次の弟。

○唯遊ばしたらむこ  
そ 唯遊ば御自身で  
およみになつたら。

や有る、易き事かな。」といふ。「嬉しくもあるかな、さらば高柳の御所南の對の縁に差置き給へ。」といへば、「易き事なり、さりながら犬や有る。」と問ふ。「犬は侍らず、心安く在せ。など言ひ置きて歸りぬ。姫君、月さえは「例ならず何方へ出で給ひしぞ。」といへば、打笑ひ、怪しき者に戀ひ契りて出で逢ひつるなど戯れければ、「實にさや有りつらむ、いと久しかりし。」などいへば姫君、「さもあらば如何に憎からむ、移れば變る習ひなれば、我は必ず思ひ捨てられむ。」と戯れ給へば、忝く嬉しいみじと思ひて、「あな 傍痛や、世にあるまじき人と言ふとも、御側を立離れて他人に添ふべき心地はし侍らむものを。」と申せば、「知れ難き事。」と打笑み給へるを見奉れば、身に染む心地していと味氣なし。さて彼の兄弟は、山へ入りて紅葉尋ねけり。中にもさし次の弟、五寸許りなる枝に、色は五色にて、葉毎に法華經の文字を摺りたり。鮮かに磨き付けたる如くなるを、明日の午の時に玉水出でて見れば、「枝差の斯かる物有りけるや、まだ見ず。」とて、愛で悦び給ふこと限りなし。「外よりも數多奉らせ給へども是れに並ぶや有るべき。さて面々に紅葉に歌をつけらるべし。」と有りしかば、「同じくば歌を玉水よみて付け給へ。」と宣ふ。「唯遊ばしたらむこそ。」と言へど強ひて宣へば、「さらば書き出でて見せ奉らばや、少しも宜しけならむを取り直し給はなむ。」

とて、筆とり上げすさみ居たる。殿も渡り給ひて、紅葉を御覽じ愛でて歸り給へば、又母上ぞ渡り給へる。

さて玉水は歌を書き出でて姫君に奉る。何れも面白しとて、五つの枝に五首歌を付けらる。青かりし枝に、

もみぢ葉の今はみどりに成りにけり幾千代までも盡きぬ例に  
黄なる葉に、

黄なるまで紅葉の色は移るなり我れ人かくは心かはらじ

赤き葉に、

くれなるに幾しほまでか染めつらむ色の深きはたぐひあらじを  
白き葉に、

野邊の色みな白妙に成りぬとも此の紅葉ばの色はかはらじ

紫の葉に、

幾しほに染めかへしてか紫の四方の梢を染めわたすらむ  
となむ書き付けられける。残りは姫君書かせ給ふ。扱其の日になりて合はせ給へば、色々

○くれなるに幾しほまでか云々 紅く麗人まで染めたのであらう。人は染料に染めるものをつけ浸すを云ふ。  
○五度合せ給へども紅葉と紅葉を合はせ優劣を定める、それを五度まで合はせられたけれど。

○内 天子。

○出し立てむ事難くや 姫を宮中へ差上げることについての支度に非常な費用がかかる故、差上げにくくあらう。

○きそく 氣色。

○けはひ所 所謂化粧料の意味であらう

○様々恨み仰せられければ 姫君始め父君などである。

○さらば父母悦ぶ事斜ならず 此の章の上にはやむを得ず受取り父母へ預けた文が脱けて居る。  
○おほぢ子ども 老父や子達。

心を盡して讀みいで、えならぬ枝色を調へ給へども、姫君のに並ぶものなかりけり。五度

合はせ給へども、度毎に姫君ぞ勝たせ給ひける。此の事隠れなく、内にも聞召され、彼の

紅葉御召しあり。惜しみ給ふべきかはとて聽て参らせ給ひければ、帝御覽坐して、聽て

其の姫君参らせ給ふべき由、時の關白に仰せ下されければ、「定めて参らせ給はむ事は悦び

なるべけれど、宰相微かなる住居にて候へば、出し立てむ事難くや。」と申させ給へば、聽

て心得させ給ひて三箇所を賜ひにけり。かねて願ひし事なるに悦び給ふ事限りなし。聽て

その御營みめでたかりけり。玉水の前の御きそく類なし。津の國かく田といふ所をば玉水

のけはひ所に賜ひにけり。「我が身は無縁の身なれば、只哀れをかけさせ給はむこそ嬉しう

侍らめ、斯様の御事は思ひ掛け侍らす。」と度々申し返し奉れども、様々恨み仰せられ

ば、さらば父母悦ぶ事斜ならず。或時彼の母物怪めきて惱み渡る、多くの祈りをしけれど

も、月日重なる儘に重くのみ見ゆれば、おほぢ子ども歎きけるに、「御所に候ひ給ふ娘に、

今一度逢ひ奉らまほしう、常に戀しきを見て止みなむ。」と言ひければ、此の由かくと傳へ

申しけるに、いと哀れと思ひて、暫しの暇を申して参りければ、悦ぶこと限りなし。「如何

なる前の世の契りにか、唯朝夕御事のみ心苦しく、御宮仕へも何時までかと痛はしく思ひ

○身置き奉らむこそ云々 御身を後に残し置き奉るのが。  
○少し暇ある心地して 玉水の前が看護するので少し休む暇が出来た心持で。

○日比命の限りと思ひしものなれば 平常、生きて居る間は難すまいと思つたものであるから。  
○搔暗す心地なむす心がくらくなるやうな氣持がする。  
○は、そ 柝の木と母さかけた。

奉る、御身故に心易く過し侍れば、有り難く嬉しくも覺え奉る、思ひ掛けず斯かる病を受けぬれば、千に一つも助かり難し、身置き奉らむこそ悲しけれ。」とて、衰へたる手を差出して搔撫で泣きければ、此の人は物も聞えず、泣くより外の事ぞなし。側に付き添ひ給へば、残りの子共は少し暇ある心地して、此處彼處に打休む程なり。

下

此の母少しも人心地ある時は心細けなる事ども言ひ、又起ると思ふ折々は物怪めきて、現にもあらぬ風情なり。起りて又少し押鎮めて言ふやう、「我は斯かる有様なれば、遂には消え失せなむ、痛はしや御身も我世に無くなりなば、又誰をか母とも頼み給はむ、われ母の譲りにて鏡一つ持ちたり、日比命の限りと思ひしものなれば、これを形見に御覽ぜよ。」とて參らせけり。今は早歸り給へと勸むれど、見捨て難くて一日二日と過ぐる程に、既に三日になりにけり。姫君の御方より文あり。母の惱み心苦しがるむ、少しもよき様ならば、早く歸り給ふべし、此方の徒然思ひ遣り給へ、搔暗す心地なむすと書かせ給ひて、年を経るは、その風にさそはれば残る梢はいかになりなむ。

○少しの開心よく見奉りて 丁度人心地のある折で文を拜見して。  
○御宮仕へならずは云々 御奉公しなけれはこんなに認められもしなかつたのであらう。  
○身より出でたる子供よりも云々 産みの實子より大切に思ふぞ。  
○初花のつほめる色 玉水の前に喰へた語。  
○思ひの色は晴れやらす 心配が除かれず。  
○少し怠りたる様 少し快くなつた様子  
○我が父方の伯父 玉水の前の父の兄。

と遊ばしたるを、此の母少しの開心よく見奉りて、「忝くも仰せられたるかな、御宮仕へならずは、いかで世にある者とも知られ奉らむ、とにもかくにも有り難し、身より出でたる子供よりも、おろか無く思ひ奉るぞ。」と悦びけり。月さもえ細々と書きて、  
初花のつほめる色のくるしきにいかに木の葉の色をみきくと、斯かる事を見聞くにつけても、思ひの色は晴れやらす。御返りは、忝き御哀れみ申し盡し難う、筆にも及び難う侍るなり、心に掛らぬ折なく參らまほしう侍れども、見捨て難くてなむ、少しもよろしけならば、參りてよろづ自らこそ申し侍らめとて、  
ちりぬべき老木の花の風吹けば残る梢もあらじとぞ思ふ  
月さえにも同じく書きて、  
陰たのむくち木の櫻朽ち果てばつほめる花の色も残らじ  
など書きて參らせけり。  
斯かる處に母の物怪起りければ、一所に集まりて歎くに、又少し怠りたる様にて寢たれば皆打緩み、夜更け人静まりて此の娘許り起きて居たるに、毛一條もなく禿けたる古狐一つ立寄りて見ゆ。能々見れば我が父方の伯父なり。これを追ひ退ければ、病者は微睡み

○互に その古狐と  
玉水の前を。  
○我が狐 玉水の前  
より見た狐の稱。我  
が狐よ。  
○聊かの便りにより  
少しの縁故により  
○我が頼みたる子  
將來を心頼みにして  
居た子。  
○なご今度 なごか  
この度。

○目を見出して 目  
をむき出して。  
○延喜の帝 醍醐天  
皇。  
○末代まで忍はれま  
せ給ひし 後の世ま  
で人民に慕はれな  
された。

けり。互に、「こは不思議なる事かな、如何に。」といふ。「我が狐われ聊かの便りによりて、この病者を親と頼む事あり、然るべくは立退きて此の苦しみを止め給へ。」と言へば、「ゆめゆめ叶ふまじき、其の故は彼の病者の父、我が頼みたる子を、さしたる咎も無きに殺したれば、などか思ひ知らせざらむ、我も此の娘を惱まし命を取りて、思ひをさせむと思ふなり。」と語る。玉水「理なれどしゆしやうむしやくしやう化城品と名付けたり、さり乍ら業に引かれて六道に迷ふ罪によりて、元の三途に歸る事、身より出せる焔なり、我等畜類なり、未だ業因盛んなり、然りと雖も善根をもせば、など今度人體を受けざるべき、又人體は佛の體なり、心違はずば、などかこんど佛にならざるべき、幾程あらぬ世の中に、一旦の念に引かれて、忽ちに此の病者を失ひ給はば、彼の罪と言ひ、又多くの人の歎きを受け給ひなむ、何事も報いのものなれば、さあらば獵師の手にも掛り給ふか、然らずは三途に歸り給はむ事のはかなさよ、唯然るべくは立退きて助け給へ。」と言へば、古狐目を見出して申すやう、「人界に生るゝも佛の教によりてなり、然れば佛も度々現じて、忽ちに人の命をも斷ち給ふ、我に起す罪ならず彼等が招く罪なれば、努々身に過失なし、終日に座禪工夫をして我が心を見るに、心に種なし理を知りて心とす、理を計つて、そこと案ずるに、

○無間の底 無間地  
獄の底に。  
○かふや上人 太平  
記には日藏上人とあ  
る。  
○一業所感 過去世  
になした一業が、現  
世で結果を感起する  
事。  
○佛の力にはけ給ふ  
佛力に代つて制裁  
を加へようとなさる  
の意。以下文脈亂れ  
て意味が明瞭に調つ  
て居ない。  
○耳に留めて覺えき  
かむ 耳に留めて覺  
え聞かない。きかむ  
は聞かぬの訛。  
○善悪けつしやう  
善惡決定。善惡の定  
まつて動かぬ事。

起らざる念を理とす、念を拂ひて功德とす、此の仇を知らずして、思はむ事は力なし、延喜の帝と申すは、末代まで忍ばれさせ給ひし帝なれども、過去の宿業によりて、無間の底に沈み給ふ。帝の皇子かふや上人とて世を背き給ひし人、御夢想の告げに隨ひて、無間の底より、炭頭の如くなるを金鉢にてはさみ出し給ふとこそ申せ。斯かるめでたき御門だに前世の業をば免かれ給はず。又播磨の書寫に住みける蟒、雀の子を尋ぬるとて、法華經の聲を聞きし故、聖武天皇の后とならせ給ひしなり。今惡念を拂ひ菩提心を起し、十惡五逆の罪人まで導き給ふ彌陀の名號を頼み奉らば、後生は疑ひ有らじ、然るに汝も獸なり、我も畜類なれば、一業所感の身として、何れを教化すべし。」といふ。其の時若狐、「理はいと能く知り給ひて、佛の力にばけ給ふ謀一旦の事なり、法然上人の仰せられし事を、耳に留めて覺えきかむといふは、善惡を嫌はざる處なり、罪に理非は入るべからず、淨飯王の王子悉達太子と申せしも、王宮を出で給ひし故にこそ、今の釋迦佛とも成り給へ、又善惡を分け給ふはかうこそ有るべけれ、子の敵を取り給へば惡なり助け給へば善なり、爰に於いて善惡けつしやうは、是れを殺さむと思ひ給はむ念ならずや、爰に於いては拂はぬ念なり、彼是を思ひ捨て給へば悟りなり、即身成佛こそ有らまほしけれ、十惡五逆を盡して

○猿眠り 瞑目して居る事であらう。

○有か見たり 誤脱の字があらう。

○孝養 こゝでは供養の意に用ゐた。

○御内参り 姫君が妃として宮中へ参らるゝ事。

○一の女房 女房の第一位の人。

○是れを勇ましくも これを嬉しくも。

○常は 常にの語氣を強めて云つたもの。

○いか様にも云々 姫君の詞。

阿彌陀佛の教化を頼みたまはむ事は然るべからず、此の上にそれを思ひ取り給はずば力なし。」と申せば、其の時古狐猿眠りして打顔き、「斯かる不思議に逢ふ事前世の幸ひなり、誠に殺したればとて、戀しき我が子歸るべきにあらず、今は一筋に亡き後を弔ひ給へ、我は入道して山深く閉ぢ籠り念佛申すべし。」とて、病者の許を立退きけり。母は娘の人と物語するとぞ思ひける。さて病者は心軽くなりて物など言ひ、物見入れなどしける由聞き、同じ畜類と言ひながら、有か見たりとて語りければ、實にさる事ありとて、彼の射殺しつる狐の後弔ひ、様々の孝養したり。さて玉水は心易く見置きて御所へぞ歸りける。

既に霜月になりぬれば、御内参りの御儀式目も驚く許りなり。女房達童三十人、中にも此の玉水をば中將の君になし給ひて、一の女房に定めらる。されども是れを勇ましくも覺えず、常は打萎れたるを如何にと怪しみ給へば、何となく風の心地など言ひ紛らはし、「いか様にも物思すらむ、か許り隔てなく思ふを、などか心にこめて言ひ出で給はざるらむ、語りても慰み給へかし。」と宣へば打泣きて、「遂には知召さるべき事なれども、今は語り奉らじ。亡からむ後にも哀れとは思召し出でさせよ。」など申せば、心苦しう思す。御内参りも近づく儘に、玉水熟々と思ふ様、われ畜類と言ひ乍ら、近づき参りて契り奉らむ事は痛

○只斯くながら 只このまゝ。

○局 女房の部屋

○仇なる物 たよりにならぬはかない物

○我いか様にも成りなむ後 私死んだ後を婉曲に云つたのである。

○様ある箱 仔細のある箱。

○左右なく人に見せさせ給ふまじ たやすく軽々しく他人にお見せなさいませぬ

○懸子 一つの箱の外わくのやうに作つた盆のやうな匣。

はしさに、只斯くながら見奉り添ひ奉るに、心を慰めつる事の果なさまよ、姫君の御耳へは聞かせ参らせばやと思へども、今まで知らせ奉らで思ひの外に恐ろしとや思されむ、逆も御内参りあらば其の時こそ紛れ失せめ、わが化けたりし姿を今まで見つけられざりつるこそ不思議なれと思ひ廻らして、風の心地とて我が住む局に閉ぢ籠り、初めより思ひ染め奉りし我が有様、今までの事を書き集め、小き箱に入れて姫君にもて参り、「何とやら此の頃は世の中味氣なく、仇なる物と思ひ知られて物憂く侍れば、もし夜の間にも消え失せ侍る事もやと覺えて此の箱を奉る。我いか様にも成りなむ後、此の箱を御覽せよ。」と申して潜然と泣きければ、姫君は怪しく、「如何に思ひ給へば斯くは宣ふぞ、此の儘わが行先をば見届け給はまじきや。」と打怨み給へば、「御内参りにも御供申し奉るべけれど、もし如何なる事か有らむと心細くて是れを奉り置くなり、儀式の折は人目繁くて、此の箱をもえ参らせぬ事かあらむなどと思ひ奉りて。」など言紛らかしつ、「構へてく此の箱を類なく思召し、又親しく思召さるゝ月さえなどにも見せさせ給ふな、様ある箱にて候へば、左右なく人に見せさせ給ふまじ。中の懸子をば御年積り世を思召し放ちたらむ時明けさせ給へ。」と申せば打泣き給ひて、「何時までも候はむとこそ思ふに、斯く末の世の事まで宣へば、心元



なく、最愛き心こそすれ。」と宣ひながら、此の箱を受取り給ひて、互に涙に咽び給ふ。月さえも参り人々忙はしけなれば、紛らかしつ、立去りぬ。姫君さらぬ様にて、此の箱を引隠し給ひけり。

○殿 高柳の宰相、

○内 こ、では官中

さて御内参りの紛れに車に乗る由にて、何處ともなく失せにけり。殿には内へ御供なりと思す、内には心地悪しと常に言ひしかば、里に止まりぬらむと人々も思ふ。姫君も歎かしく、如何もなりつるぞと心元なう思召し、二三日過ぎて何方へも無しと聞えければ、親の方此處彼處尋ねさせ給へども行方も知らず。五日十日の程は、さりと聞え出でむ、親所よりや歸り來むと待ち給へども見えねば、何處に失せぬるぞ、人の隠したるかと思し給ひければ、御悦びに御心の内の御歎きぞ増させける。諸卿の女房達打託ち歎き合ひけり。何事につけても此の人あらましかばと思しける。宰相殿は中納言にぞ成り給ひける。玉水の事常に名高く、いみじき事も有れば、如何に成りぬる事ぞと歎き給ふ。姫君は此の箱の中ゆかしく思さるれども、御門のおはします事絶えず、暇なくて明し暮し給ふに、或時官の廳へ御幸あり、よき暇と思召し、忍びて開けて御覽すれば、始めより終りの事を書き付けたり。こは如何になる事ぞと、御胸打騒ぎ、恐ろしくも哀れにも思しけり。われ故斯様

○此の箱の中ゆかし  
く此の箱の中見た

○官の廳 木政官の  
正廳。

○無慙さよ むじた  
らしさよ。

に化けたりしを、遂に色にも出さで過ぎし事の、畜類ながら無慙さよ、覺えの志を見せつ  
つせし事の哀れさよ、難有き心かなと、思召し續けて打涙ぐみつ、御覽すれば、此の巻物  
の奥に長歌をぞ書き付けける。

束の 間も	去り難かりし	我がすみか
君を逢ひ見て	その後は	静心なく
あこがれて	うはの空にも	迷ひつゝ
はかなき物は	數ならぬ	憂き身なりける
物 ゆゑに	すゞろに身をば	つくし舟
漕ぎ渡れども	晴れやらで	浪に漂ふ
篠 蟹の	絲筋よりも	微かにて
過ぎし月日を	數ふれば	唯夢とのみ
成りにけり	我が身一つは	如何にせむ
君さへ長き	恨みをば	負ひなむ事の
由な さよ	朝夕君を	見る事も

○物ゆゑに 難故に  
○すゞろに身をばつ  
くし舟漕ぎ渡れども  
晴れやらで 身をつ  
くす筑紫へ通ふ舟  
ををかけ、舟を漕ぐ  
と心を焦がすまかけ  
てある。

○我が身一つは如何  
にせむ 自分ひり  
はさうでもよい。

○身の類ぞと「身の願」の誤りであらう。

○思ひ明石の思ひあかす地名の明石をかけた。

○欄引く方もなつかしや姫の居らる方へ煙がなびく故。

○乾く間もなき袖の上潮に乾く間もないと、涙に乾く間もないとかけた。

身の類ぞと	慰めて	夢現とも
別き難く	明し暮しつ	面影を
何時の世までも	變らじと	思ひ明石の
浦に出て	潮干の貝も	拾ふかな
蟹の焚く藻の	夕けぶり	棚引く方も
なつかしや	島傳ひして	みるめ刈る
蟹の子どもに	有らねども	乾く間もなき
袖の上	訪ひ来る風も	ほしかねて
靡く氣色を	餘所に見て	思ひ知られぬ
身の程も	遂に甲斐なき	心地して
たゞ一筆を	すさみ置く	玉章ばかり
身に添へて	長き思ひの	しるしぞと
常に弔ふ	心あらば	後の世までの
掛橋と	なりても君を	守りてむ

○斯かる憂き身を人知れず云々 此の句以下意味が通じない

○處狭き場所のせまい程溢る。

○濁りなき世に云々上の句缺脱。

○ミぢめ 最後、結局。

○打傳への爲におくなり 後世に傳へんために書き置いたのである。

斯かる憂き身を 人知れず とぶらはしとは  
 をののやま またたついなや 花に出でて  
 また例なき たぐひをも 思ひ出でよの  
 心に て 只書きすさむ 水莖の  
 岩根をいづる 山川の 谷水よりも  
 處狭き 袂の露を 君は知らじな  
 色に出て言はぬ思ひの哀れをも此の言の葉に思ひ知らなむ  
 …………… 濁りなき世に君を守らむ

かやうに歌を書き奥に二首の歌を書きつけて、此の箱は人に厭かれず、年経れど添ふ人に愛を増す箱なれば奉るなり、君に添ひ参らせむ程は、此の懸子をあげさせ給ふなど申し置きて参らせたるに、哀れ浅からず思召しける。畜類ながら斯かるやさしき心の、哀れ深き打傳への爲におくなり。

美人くらべ

上

○御臺所 夫人。

○遠國波濤まで 遠き國々、波の末の離れ島まで。

○後腹の御子 後妻に出来た子。

○縁を尋ねて 縁故を探したよつて。

○内証 祕密に、内に。

古の事かよ。都に隠れなき丹後の少將殿とて時めける人あり。器量骨柄人に勝れ、詩歌管絃何につけても暗からず、御年二十に餘り給へども、御臺所まします、都廣しと申せども、御心に入りにし方なくして、遠國波濤まで御尋ね候へども、未だ何れとも定まり難し。爰に五條の宰相殿の御娘御二人おはします、姊御は御年十六になり給ひしが、其の頃世に類なき美人にて坐す。母上に後れさせ給ひて、繼母御にかゝりて坐す。又其の妹十四にならせ給ひしは、後腹の御子なり、是れも美人にてましますも、姊御には劣り給ふと聞えし。姊御をば野もせの姫、妹を紫蘭の姫とぞ申しける。丹後の少將殿は、兄弟の姫君の事聞き及び給ひ、只一目見たきと思召し、姊野もせの乳母、鞆負の局の方へ、縁を尋ねて、内証仰せ遣はさる。又妹紫蘭の乳母紫竹の局の方へも、内証仰せ遣はされ、一目御覽ありたきとの御事なり。鞆負の局は、少將殿よりの内証申し來りしを、繼

○思ひの儘なる 思ふ通りの。  
○申しつがひ候へ 云ひつけ。申し傳へなさい。

○さやめかいて が やがやと騒ぎ合つて  
○櫻重 著物の襦の色目の名。表は白、裏は赤花又は葡萄染其の他裏は濃紫、二藍、縹等の説がある  
○いさうたく 非常に可憐で。  
○目馴れたる云々 見馴れたる、見た事もないと思はれ。

美人くらべ

母御に申すも如何あらむ、父御に申すべきやと思案し居たり。又妹の乳母は内証申し來りし事、母御に申し聞かせ候へば、母御は悦びて申させ給ふやう、「丹後の少將殿と申すは器量世に勝れ、諸藝達し、時めく人なり、是は思ひの儘なる増殿なれば、急ぎ見せ参らすべし、清水詣でに擬へて見せ参らせむ由申しつがひ候へ」とて、則ち乳母方より少將殿へ其の通り申し遣はしけり。鞆負の局は之を聞き、聽て父御へ申しければ、父宰相殿仰せられけるは、娘を見するといふ事如何なり、何れも物詣での時分知らせ申すべき由、其の方が心得の由にて、申し遣はすべきとの御ことにて、則ち申し遣はしけり。さて丹後の少將殿は、彼の姫君達の清水詣でを今や遅しと待ち給ふ。斯くて彌生十八日の事なりしに、宰相殿の北の方御娘御二人召し具し、御輿十挺許り遣り續けさやめかいて清水詣でありけり。丹後の少將殿は此の由を聞召し、女の姿に出立ちて、先に立ちて参り給ひ、觀音の御前の傍に、輿を立てさせて彼の人々を待ち給ふ處に、宰相殿の北の方御輿より下り給へば、次に野もせ姫御輿より出で給ふを見たまへば、櫻重の上に萌黄の袿、紅の袴踏みしだき、中門より歩み給ふ御姿、御髪は袿に等しく御顔容の美しさ、目元口付、姿いとらうたく言ふも愚かなり。廣き都の其の内に斯程の美人は、遂に目馴れたる事もなきと思召し、

○花山吹 表は薄朽葉、裏は黄色。

○薄様 紙の名。鳥の子紙の薄いもの。  
○花ならぬ人に云々 古今集の小野小町の戀歌を引用したものである。「色見えで移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける」こと、花ならぬ人云つたのは浮華でなく實質のしつかりした人の意。  
○ほのめかすらむ 蘆の穂にかけた。

少將殿は是れをこそと思はれけれ。又其次に妹の紫蘭の姫御輿より下り給ふを見給へば、花山吹の上に、薄紅梅の袴、紅の袴踏みしだき、是れも顔容姿美しさ類少なき装ひなり。然れども姉には劣たると少將殿心に思召されけり。扱少將殿はそれより御下向あれば、姫君達も廳て御下向ありけり。二人の乳母面々に思ふ様は、今日の美人比べには、何れが勝り何れが劣りたるならんと、少將殿よりの便りを聞かまほしくぞ思ひける。去る程に少將殿は、野もせ姫を迎へむとて、先づ御母上に此の事申させ給へば、母上は聞召し、「五條の宰相殿の姫は、事の仔細あれば叶ふまじき由。」仰せられけり。少將殿は此の由聞召し、「さて是は如何すべきぞや、たつて申せば不孝なり、また此の姫の外浮世に迎へむと思ふ人なし。」とて深く思ひに伏し沈み給ひけり。かかりける處に、少將殿の乳母に正木の局申すや、「御心地は何と坐すぞ、野もせ姫の御事に於ては、自ら叶へて參らせむ、急いで御文を遣はされ。」とぞ申しける。少將殿は此の由聞召し、御枕をあけさせたまひ、「嬉しくも申すものかな、さらば文を參らせむ。」とて、紅の薄様に引重ねてかくなむ。  
清水のそこにて君をゆめばかり見しおもかけの色はわすれじ  
花ならぬ人に心のうつろひてなにはの蘆のほのめかすらむ

○あり合ひて 居合はせて。

○仰せ懐けさせ給へ 豫め婚約をなさいいひなづけの敬語。  
○祝ひを申すべし 祝としての報酬を與へよう。  
○いかで私にては云云 ぞうして私心をはさんで申しませうや。  
○十善の位 前世に十善を行ひて、現世で天子になると云ふ佛説から来た。天子の位。  
○野干 狐の異名。

美人くらべ

斯様に書き給ひて、乳母の正木に遣はされければ、正木御玉章をもちて、五條の宰相殿へ參り、靱負の局に見參申したき由申しければ、折節妹の乳母と紫竹の局あり合ひて、「何方よりの御使ぞ。」と問へば、「丹後の少將殿より參り候、この玉章を野もせ姫へ參らせて給べ。」と申す。「暫く御待ち候へ。」とて、野もせ姫へは參らせずして、御臺所へ此の由かくと申しければ、御臺所は此の文をそと開きて見給ひ、扱は清水にての美人比べに負けたりとて、乳母も共に安からず思へども力及ばぬ次第なり。御臺所宣ふは、「先づ其の使を此方へ召せ。」とて中の庭へ呼び寄せられ、使に御臺所申されけるは、「あの野もせ姫は、腰より下に大瘡出で來候て、時々死に入り給ふなり、顔許りこそ人にて候へ、同じくは紫蘭の姫を仰せ懐けさせ給へ、形は野もせ姫には勝りて候。」と申されければ、此の使申すや、「さて淺ましき事にて候ものかな、其の由をこそ申し候はめ。」とて歸りければ、袖を控へて、「よき様に御申し候はば、祝ひを申すべし。」と申されければ、「いかで私にては申すべき。」とて使は歸りて少將殿へ此の由申し上げければ、少將殿宣ひけるは、「紫蘭の姫へ相馴れて、其の日の中に十善の位には即くといふとも、宿縁無ければ叶ふべからず、野もせ姫だに相馴れば、如何なる山の奥、野干の住む野の末なりとも、諸共に住むべけれ、早々行きて思